

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(II)

上野原遺跡

(第10地点)

所在地 鹿児島県国分市大字上之段字水ヶ迫ほか

第4分冊

縄文早期土器編1(早期中葉編)



2001年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

本報告書は、国分上野原テクノパーク造成工事に先立って、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施しました上野原遺跡第10地点における埋蔵文化財発掘調査の記録です。

近年、鹿児島県を含む南九州では、旧石器時代や縄文時代草創期をはじめ縄文時代早期の遺跡が相次いで発見されています。

特に、その内容の特異性は全国から注目され、昨年10月に開催された日本考古学協会2000年度鹿児島大会においても、当該期の様相についてのシンポジウムがあり、上野原遺跡の成果に関心が集まりました。

さて上野原遺跡第10地点の調査につきましては、昨年度に縄文時代前期までの遺構・遺物と縄文時代早期の遺構について報告書を刊行したところですが、今年度は「遺物編」として縄文時代早期の遺物について刊行することになりました。

上野原遺跡第10地点においては約15万点の遺物が出土しましたが、これらの遺物は南九州において、約7,500年前の縄文早期後葉の時期に高度な文化が花開いていたことを裏付けるものとして高く評価されました。そのうち 767点については、平成10年6月30日に重要文化財（考古資料）として指定を受けております。

本報告書が今後、埋蔵文化財保護と学術研究のために広く活用されることを願っております。

最後に、発刊にあたり御協力をいただきました関係各位の皆様をはじめ、発掘調査に参加されました地元の皆様方に対して、感謝申し上げるものであります。

平成13年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 井上明文

報告書妙録

ふりがな	うえのはらいせき
書名	上野原遺跡
副書名	国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第2集
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	28
編著者名	中村耕治・井ノ上秀文・富田逸郎・八木澤一郎
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地 TEL0995-65-8787
発行年月日	2001年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 在 所	コード 市町村	北緯 度	東經 度	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
上野原遺跡 (第3工区)	鹿児島県国分市 大字上之段字ヶ迫 他	462128	10-76	31度 42分 20秒	130度 47分 30秒	19940624 5 19950328	90,000m ² 国分市上野原 テクノパーク 第3工区造成 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野原遺跡 (第3工区)		縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代後期 弥生時代中期 古墳時代 中世 近代	縄文早期土器埋納土坑 縄文早期石斧埋納遺構 縄文早期磨石集積遺構 縄文後期階層・穴 縄文後期掘り込み 弥生中期堅穴住居跡 古墳時代堅穴住居跡 中世掘立柱建物跡 近代探照灯	12基 6基 3基 79基 369基 1基 1基 8棟 2基	平底式土器 (深鉢形土器、壺 形土器) 土偶・耳飾り・土 製品・石製品・石 斧・石鎌・石皿 塞ノ神式土器 山ノ口式土器 成川式土器 青磁



遺跡位置図 (50,000分の1)

例　　言

- 1 この報告書は、国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のうちの第2集である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県開発公社（現　鹿児島県地域振興公社）の委託を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う発掘調査の調査報告書刊行においては、資料数が多いため年度を分けて刊行することとし、平成11年度に近代から縄文時代前期までの遺物・遺構、および縄文時代早期の遺構については、「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(27) 国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 上野原遺跡（第10地点）」として報告を行った。本報告書は、縄文時代早期の「遺物編」で、土器・土製品および石器・石製品について報告を行う。
- 4 発掘調査における測量・実測・写真撮影は平成3・4・5・6年度の調査担当者が分担して行った。
- 5 本書掲載の測量・実測図の製図、出土遺物の実測および製図は、担当者が分担して行った。なお、執筆責任者名は「国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　上野原遺跡（第10地点）」の各分冊構成欄に掲載した。
- 6 出土遺物の写真撮影およびプリント等は、牛嶋茂氏（奈良国立文化財研究所）の指導を得て、鶴田静彦、横手浩二郎、福永修一（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。
- 7 遺物番号は本文および挿図・図版の番号と一致する。
- 8 本書に用いたレベル数値は、全て海拔絶対高である。
- 9 本書の編集は、主に中村耕治、富田逸郎、八木澤一郎が行った。
- 10 平成3年度から平成8年度まで、本発掘調査現場及び整理作業に携わった方々の名を以下に記し、感謝申し上げます。

【発掘作業】

赤塚政彦，阿多石幸雄，阿多石ヨリ子，有園義治，有馬スミエ，有村章，有村アツ子，
有村サチ，有村純彦，有村ツヤ，有村テル，有村文子，有村ミチ，飯山カスミ，碇山スミ，
碇山ツル，池田包弘，池田ノリ子，池田ヒサ子，池田洋子，池田義光，石野ヨシ子，
磯脇ハルエ，揖宿藤郎，祝園綱，岩切頭三，岩崎幸夫，岩本淑江，潤 親義，大西利武，
大庭ノリ子，大庭春代，大東嘉利，大人トシ子，岡留紀佐子，岡留秀男，小原良治，
勝山敏子，樺元實，上村叶，神村久美子，唐鎌虎男，川越恵子，川越勉，川畠エツ子，
神崎スミ，神崎タミ，神崎直秋，神田昌子，魏希榮，清山薫，楠元ミチ子，久保チヨ，
木場ミエ，木場實，是枝逸男，是枝キミ子，坂口シズエ，阪本一志，猿渡ヒロ，下大迫政雄，
下深迫豊，笑喜ミチ子，末永タミエ，末満政身，末満レイ子，錢瓶登美子，造田マサ子，
園田製麿八，園田ミフ子，高野義徳，田上益夫，宅間美穂子，田中章，谷村志乃恵，
多持ミエ，反田千代子，寺園ヒサ子，徳田照子，徳満ミチエ，長迫ツナ，長迫フミ子，
永里ツギエ，永里ツル子，中深迫スミエ，野崎ミエ，野間口實男，野村秀雄，橋口イトエ，
橋口京子，橋元みどり，濱田エミ子，濱田一則，浜田一美，濱田竹彦，東芦谷恵美子，
東恵子，東中園虎雄，東中園ヒサエ，久永直美，平川廣安，福重登，福重育子，福徳トシ，
福元セツ子，藤田静雄，藤田義雄，藤元早苗，藤山国弘，藤山フジエ，藤山ミネ，藤山義盛，
朴木辰二，朴木トシ子，朴木虎雄，古川正文，堀切萩子，堀切ミチ子，堀切ユキエ，
堀切りツ子，堀ノ内東湖，堀ノ内芳子，前田ツマ，前田止，前平達夫，牧之瀬喜内，
牧元和子，増田アキ子，松崎貞子，松崎涼子，松元瑞枝，松元喜憲，真辺美義，満田千枝子，
湊トキ，南美千代，宮永シヅ子，宮永勝，宮原親盛，村山重雄，空田智明，本川イマ，
山内和子，山口ヒサ子，山口ミヨ，山下キクエ，山下シヅ子，山下俊美，山下博，山下義澄，
山中スワ，山之上ミネ，山元クサ子，四元清敏，四元誠，四元康秋，六反博久，和田まり子

【整理作業】

有村明子，池田成子，石川奈緒美，伊集院香代子，岩城カヨ子，臼井綾子，岡部安代，
槐島孝子，熊川節子，川田美津子，川野高子，川畠明子，川畠裕美子，木田安枝，小山君子，
齊藤千鶴，篠原香代子，四丸久美子，清水由理美，下畠節子，志和池和恵，高倉晴美，
竹下マリ子，竹ノ内礼子，月野ひとみ，徳永郁代，徳永美喜子，富満由美，永田よしえ，
中名主和子，西清子，沼時子，野入満喜子，野口成美，橋口まゆみ，早川孝子，春山まり子，
堀口由美子，本多直子，前田秀子，前原順子，松元雅子，宮岡雪子，森岡幸子，山元順子，
行船順子，脇田美津江

「国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書上野原遺跡
(第10地点)」の各分冊構成

口 紋

序 文

例 言

第Ⅰ章 調査の経過

　第1節 調査に至るまでの経過

　第2節 調査の組織

　第3節 調査の経過

第Ⅱ章 遺跡の位置

　第1節 遺跡の位置

　第2節 周辺遺跡

第Ⅲ章 層位

第Ⅳ章 発掘調査

　第1節 調査の概要

　第2節 近代の調査

　第3節 歴史時代の調査

　第4節 古墳時代の調査

　第5節 弥生時代の調査

　第6節 繩文時代後期の調査

　第7節 繩文時代前期の調査

(以上、第1分冊)

第8節 繩文時代早期の調査

　1. 遺構

付 篇 壺形土器内の土の分析

(以上、第2分冊)

図版編

(以上、第3分冊)

序文

例言

2. 遺物

　(1) 土 器

　　A. 繩文時代早期中葉の土器

　　(以上、第4分冊一本分冊)

　　B. 繩文時代早期後葉の土器

　　(以上、第5分冊)

　　B. 繩文時代早期後葉の土器

　(2) 土製品

(以上、第6分冊)

(3) 石 器・石製品

　A. 本文・一覧表編

(以上、第7分冊)

　B. 挿図編

(以上、第8分冊)

図版編1 (モノクロ編)

(以上、第9分冊)

図版編2 (カラー編)

(以上、第10分冊)

なお第1・2・3分冊については、第1集として平成12(2000)年3月に刊行した。今年度、第4・5・6・7・8・9・10分冊を第2集として平成13(2001)年3月に刊行する。

また、第4分冊以降の各項の執筆責任者は次のとおりである。

第8節 2. (1) 八木澤一郎

2. (2) 中村耕治

2. (3) 富田逸郎

第4分冊凡例

- 1 本分冊は、縄文時代早期中葉の時期に属する土器を報告した部分である。他の時期に属する遺物については、「各分冊構成」を参照の上、該当する分冊にあたられたい。
- 2 土器については、各型式ごとに「～式土器出土状況全体図」、「～式土器出土状況図」、「～式土器実測図」の3種類の挿図を作成した。また、土器型式内において細別が可能であると判断した場合は、細別型式ごとに3種類の挿図を掲載した。
土器観察表はできるかぎり「実測図」の下段に掲載するようにした。
- 3 上野原遺跡第10地点の発掘調査は、40m四方のグリッドを設定し、原則としてグリッド単位で行った。また遺物取上では、遺物番号を各グリッドごとに1番から通し番号を付けて取り上げることとした。さらに遺物取上図面は、原則として1/50で作成することとし、調査担当者がそれぞれ分担し作成した。
- 4 本報告書掲載の「～式土器出土状況全体図」は、各グリッドごとに遺物取上図面を50%縮小した図面を元図として、各土器型式ごとに拾い出した図面を下図として作成した。
この下図を10%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載したので、各図は1/2000の仕上がり図面である。
またこの図で使用した地形測量図は、アカホヤ火山灰直下のVI層上面で作成した図を1mセンターで掲載した図である。
- 5 本報告書掲載の「～式土器出土状況図」は、4で作成した下図を、37%縮小のうえ、原則として6グリッドを1枚の挿図としてトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。
またこの図に掲載した土器の番号は、「実測図」の番号と一致する。
- 6 上記の「～式土器出土状況全体図」と「～式土器出土状況図」とに示した土器出土地点を示すドットは、1ドット1点の土器片が出土したことを示したものである。したがって、当該土器型式に属する全ての土器を提示したものである。

7 本報告書掲載の「～式土器実測図」は、土器実測図を67%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。したがって、各図は1/3の仕上がり図面である。

なお報告番号は、各土器型式ごとに1番から通し番号をふった。この番号は該当する「～式土器出土状況図」や土器観察表の報告番号と一致する。

8 本報告書掲載の「土器観察表」は、実測図として資料化した土器片のみを対象とした表であることをお詫びする。

9 さて「土器観察表」中の記号などについては次のとおりである。

1) 胎土中の鉱物欄での記号は、

○…含有量が特に多いと思われる鉱物。

○…含有量が多いと思われる鉱物。

△…含まれはるものの中の含有量が少ないと思われる鉱物。

を示しているが、「多い」「少ない」は全くの主観に基づく判断である。

2) 器面調整については概ね最終調整に近い段階の調整を示す。内容は次のとおりである。

「ハケ」…

木製と思われる工具によるハケ目調整を行っていることを示す。方向が判明するときは方向を明示、多方向の調整が観察できるときには単に「ハケ」と記載した。

「ナデ」…

指および工具によるナデ調整を行っていることを示す。「丁寧なナデ」はほとんどそれ以前の調整が観察できないほど丁寧にナデ調整を行っているが、「ミガキ」調整ほど光沢ができるまで調整を続けていないことを示している。

3) 「色調」については全くの主観である。

第4分冊目次

序文

報告書抄録

例言

第IV章 発掘調査

第8節 繩文時代早期の調査

2. 遺物	14
(1) 土器	14
1) 繩文時代早期中葉	14
① 第1群 石坂式土器	15
② 第2群 下利峯式土器	21
③ 第3群 桑ノ丸式土器	61
④ 第4群 円筒形条痕文土器	75
⑤ 第5群 微細山形押型文土器	84
⑥ 第6群 山形押型文土器	89
⑦ 第7群 楊円押型文土器	98
⑧ 第8群 条線押型文土器	112
⑨ 第9群 变形撫糸文土器	112
⑩ 第10群 手向山式土器	126
⑪ 第11群 手向山式類似土器	142
⑫ 小結	143

第4分冊挿図目次

第1図 上野原台地斑辺地形図及び上野原テクノパーク周地形・テクノパーク内遺跡分布図	11
第2図 薩島・桜島地形断面図	12
第3図 上野原道路第10地点の土層	13
第4図 石坂式土器出土状況全体図	16
第5図 石坂式土器出土状況図1(Q・R・S-9-10区)	17
第6図 石坂式土器出土状況図2(Q・R・S-11-12区)	18
第7図 石坂式土器出土状況図3(Q・R・S-13-14区)	19
第8図 石坂式土器実測図	20
第9図 下利峯式土器出土状況全体図	23
第10図 下利峯式土器1類出土状況全体図	24
第11図 下利峯式土器1類出土状況図1(O・P・Q-7-8区)	25
第12図 下利峯式土器1類出土状況図2(R・S-7-8区)	26
第13図 下利峯式土器1類出土状況図3(O・P・Q-9-10区)	27
第14図 下利峯式土器1類出土状況図4(R・S-9-10区)	28
第15図 下利峯式土器1類出土状況図5(O・P・Q-11-12区)	29
第16図 下利峯式土器1類出土状況図6(R・S-11-12区)	30
第17図 下利峯式土器1類出土状況図7(P・Q・R-13-14区)	31
第18図 下利峯式土器1類出土状況図8(O・P・Q-15-16区)	32
第19図 下利峯式土器1類実測図	33
第20図 下利峯式土器2類出土状況全体図	35
第21図 下利峯式土器2類出土状況図1(O・P・Q-7-8区)	36
第22図 下利峯式土器2類出土状況図2(R・S-7-8区)	37
第23図 下利峯式土器2類出土状況図3(P・Q-9-10区)	38
第24図 下利峯式土器2類出土状況図4(R・S-9-10区)	39
第25図 下利峯式土器2類出土状況図5(O・P・Q-11-12区)	40
第26図 下利峯式土器2類出土状況図6(R・S-11-12区)	41
第27図 下利峯式土器2類出土状況図7(P・Q・R-13-14区)	42
第28図 下利峯式土器2類出土状況図8(O・P・Q-15-16区)	43
第29図 下利峯式土器2類実測図(1)	44
第30図 下利峯式土器2類実測図(2)	45
第31図 下利峯式土器2類実測図(3)	46
第32図 下利峯式土器2類実測図(4)	47
第33図 下利峯式土器3類出土状況全体図	49
第34図 下利峯式土器3類出土状況図1(O・P・Q-11-12区)	50
第35図 下利峯式土器3類出土状況図2(R・S-11-12区)	51
第36図 下利峯式土器3類出土状況図3(P・Q・R-13-14区)	52
第37図 下利峯式土器3類出土状況図4(O・P・Q-15-16区)	53
第38図 下利峯式土器3類実測図(1)	54
第39図 下利峯式土器3類実測図(2)	55

第40回 下剥單式土器4類出土狀況全體圖	57
第41回 下剥單式土器4類出土狀況圖1 (P·Q·R-11-12区)	58
第42回 下剥單式土器4類出土狀況圖2 (P·Q·R-13-14区)	59
第43回 下剥單式土器4類實測圖	60
第44回 桑ノ丸式土器出土狀況全體圖	62
第45回 桑ノ丸式土器出土狀況圖1 (Q·R·S-5-6区)	63
第46回 桑ノ丸式土器出土狀況圖2 (Q·R·S-7-8区)	64
第47回 桑ノ丸式土器出土狀況圖3 (Q·R·S-9-10区)	65
第48回 桑ノ丸式土器出土狀況圖4 (N·O·P-11-12区)	66
第49回 桑ノ丸式土器出土狀況圖5 (Q·R·S-11-12区)	67
第50回 桑ノ丸式土器出土狀況圖6 (N·O·P-13-14区)	68
第51回 桑ノ丸式土器出土狀況圖7 (Q·R·S-13-14区)	69
第52回 桑ノ丸式土器出土狀況圖8 (N·O·P-15-16区)	70
第53回 桑ノ丸式土器測量圖 (1)	71
第54回 桑ノ丸式土器測量圖 (2)	72
第55回 桑ノ丸式土器測量圖 (3)	73
第56回 桑ノ丸式土器測量圖 (4)	74
第57回 円筒形条紋文土器出土狀況全體圖	76
第58回 円筒形条紋文土器出土狀況圖1 (O·P-8-9区)	77
第59回 円筒形条紋文土器出土狀況圖2 (Q·R·S-8-9区)	78
第60回 円筒形条紋文土器出土狀況圖3 (Q·R·S-11-12区)	79
第61回 円筒形条紋文土器出土狀況圖4 (P·Q·R-13-14区)	80
第62回 円筒形条紋文土器實測圖 (1)	81
第63回 円筒形条紋文土器實測圖 (2)	82
第64回 円筒形条紋文土器實測圖 (3)	83
第65回 微彌山形押型文土器出土狀況全體圖	85
第66回 微彌山形押型文土器出土狀況圖1 (P·Q·R-12-13区)	86
第67回 微彌山形押型文土器出土狀況圖2 (P·Q·R-14-15区)	87
第68回 微彌山形押型文土器實測圖	88
第69回 山形押型文土器出土狀況全體圖	90
第70回 山形押型文土器出土狀況圖1 (Q·R·S-5-6区)	91
第71回 山形押型文土器出土狀況圖2 (Q·R·S-8-9区)	92
第72回 山形押型文土器出土狀況圖3 (Q·R·S-10-11区)	93
第73回 山形押型文土器出土狀況圖4 (Q·R·S-12-13区)	94
第74回 山形押型文土器實測圖 (1)	95
第75回 山形押型文土器實測圖 (2)	96
第76回 山形押型文土器實測圖 (3)	97
第77回 楠円押型文土器出土狀況全體圖	99
第78回 楠円押型文土器出土狀況圖1 (R·S-5-6区)	100
第79回 楠円押型文土器出土狀況圖2 (R·S-7-8区)	101
第80回 楠円押型文土器出土狀況圖3 (Q·R·S-9-10区)	102
第81回 楠円押型文土器出土狀況圖4 (O·P-11-12区)	103
第82回 楠円押型文土器出土狀況圖5 (Q·R·S-11-12区)	104
第83回 楠円押型文土器出土狀況圖6 (P·Q·R-13-14区)	105
第84回 楠円押型文土器出土狀況圖7 (O·P-15-16区)	106
第85回 楠円押型文土器實測圖 (1)	107
第86回 楠円押型文土器實測圖 (2)	108
第87回 楠円押型文土器實測圖 (3)	109
第88回 楠円押型文土器實測圖 (4)	110
第89回 条線押型文土器出土狀況全體圖	113
第90回 条線押型文土器出土狀況圖1 (Q·R·S-8-9区)	114
第91回 条線押型文土器出土狀況圖2 (Q·R·S-10-11区)	115
第92回 条線押型文土器出土狀況圖3 (O·P·Q-11-12区)	116
第93回 条線押型文土器出土狀況圖4 (P·Q·R-13-14区)	117
第94回 条線押型文土器實測圖	118
第95回 变形燃系文土器出土狀況全體圖	119
第96回 变形燃系文土器出土狀況圖1 (Q·R·S-8-9区)	120
第97回 变形燃系文土器出土狀況圖2 (P·Q·R-10-11区)	121
第98回 变形燃系文土器出土狀況圖3 (P·Q·R-12-13区)	122
第99回 变形燃系文土器出土狀況圖4 (P·Q·R-14-15区)	123
第100回 变形燃系文土器出土狀況圖5 (P-16区)	124
第101回 变形燃系文土器實測圖	125
第102回 手向山式土器出土狀況全體圖	127
第103回 手向山式土器出土狀況圖1 (Q·R·S-5-6区)	128
第104回 手向山式土器出土狀況圖2 (P·Q-9-10区)	129
第105回 手向山式土器出土狀況圖3 (R·S-9-10区)	130
第106回 手向山式土器出土狀況圖4 (P·Q·R-11-12区)	131
第107回 手向山式土器出土狀況圖5 (P·Q·R-13-14区)	132
第108回 手向山式土器出土狀況圖6 (N·O·P-14-15区)	133
第109回 手向山式土器出土狀況圖7 (O·P·Q-15-16区)	134
第110回 手向山式土器實測圖 (1)	135
第111回 手向山式土器實測圖 (2)	136
第112回 手向山式土器實測圖 (3)	137
第113回 手向山式類似土器出土狀況全體圖	139
第114回 手向山式類似土器出土狀況圖1 (Q·R-12-13区)	140
第115回 手向山式類似土器出土狀況圖2 (P·Q·R-14-15区)	141
第116回 手向山式類似土器實測圖	142
第117回 上野原遺跡第10地點攤開早期中土器編年案 (1)	146
第118回 上野原遺跡第10地點攤開早期中土器編年案 (2)	147

上野原遺跡周辺の環境と土層

上野原遺跡の立地する上野原台地は、姶良カルテラの外輪山に相当する。外輪山は第2図のように想定されるが、天降川・別府川・検校川等によって開拓されている冲積平野部分は定かでない。カルテラから霧島山麓へかけては、入戸火砕流で形成されており、ゆるやかな傾斜の台地になっている。その台地全体が天降川や新川、検校川などで開拓され、樹枝状の谷が複雑に入り組む。これらの様相は、第2図の霧島・桜島地形断面図に示すとおりである。上野原台地の標高は海側の最高所が263m、霧島に面する所でおよそ240mであり、北側に向かってゆるやかな傾斜をもっている。台地の基盤は安山岩の岩盤であり、海側にカルテラ壁の断崖が形成している。その直上には亀角角礫層が堆積し、さらに姶良カルテラ噴出物やサツマ火山灰などの桜島噴出物が堆積して台地を形成している。

台地の東側はカルテラ壁頂部が続くが、それ以外の三方は断崖もしくは急峻な谷になっており、周辺と隔絶している。台地東側のカルテラ壁頂部には海側への浅い開拓谷があり、その開口部、断崖近くには湧水がみられる。また、台地の北側にも湧水があり、台地上ではあるものの、現在も一定の水量は確保されるようである。

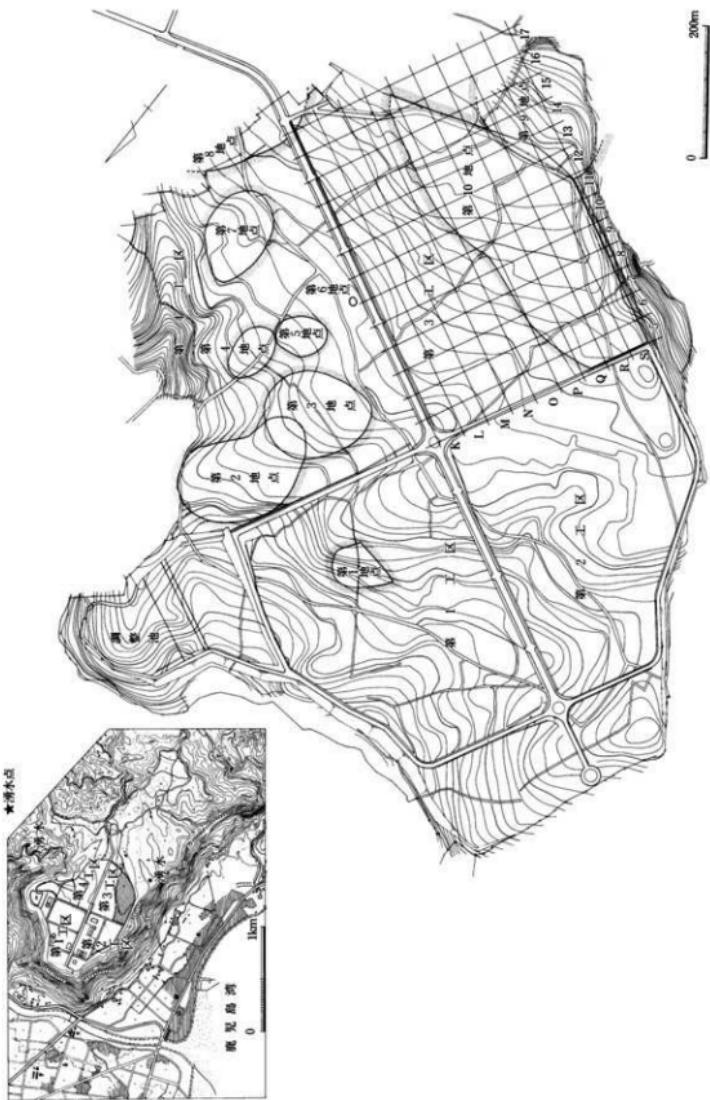
この姶良カルテラ周辺には南九州の主要な縄文遺跡が数多い。中でも、上野原台地と検校川を挟んで向き合う位置にある平裕貝塚は、本遺跡第10地点の主体的な土器の一つである平裕式土器の標識遺跡である。また、カルテラ南西部外側を流れる福荷川流域に立地する加栗山遺跡は、本遺跡第2地点と同じく早期前葉前平式土器様式期の集落が検出された。同じ立地条件の加治屋園遺跡では草創期の微隆起突起文土器が出土した。別府川の沖積地には、縄文後期中葉から後葉にかけての南九州のほとんどすべての型式の土器が膨大な量出土した干迫遺跡がある。検校川の上流に位置する城ヶ尾遺跡では、埋納された塞ノ神式土器様式の壺が3個体出土している。この遺跡は、縄文時代早期後葉の埋納された壺形土器という共通項もあるため本遺跡との関連が注目される。

上野原台地内の遺跡分布を概観しておきたい。第

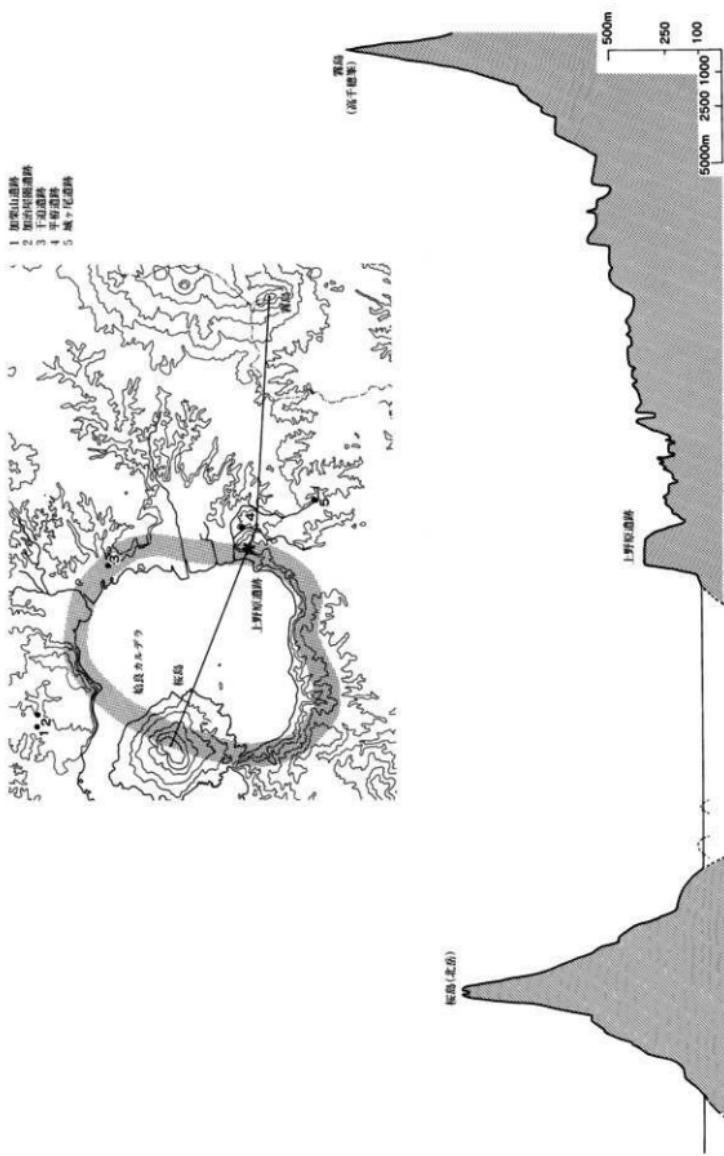
1工区と第2工区のほとんどの区域については不明であるが、第1工区内の第1地点で弥生時代中期後葉の集落が検出されている。また第1地点は、ほぼ完全に復元された塞ノ神式土器の深鉢形土器1点と石器1点だけからなる特異なようを示す早期後葉の遺跡である。第3工区と第4工区は全域が調査されている。旧石器時代から縄文時代草創期の包含層は1ヶ所も確認されていない。縄文時代早期前葉に第2地点で前平式土器様式期の集落が出現し、同中葉になると、第2・3・4・10地点と広がりを見せ、同後葉になると、第7・9・10地点に分布を変える。第7地点の出土状況は第1地点とよく似ているようであり、この二者と第9・10地点との関連は今後究明されねばならない課題となるであろう。なお、第9地点は、工業用水道タンクの建設予定地であったが、確認調査の結果遺構・遺物の出土が多量に上ることが予想されたため、全面調査を実施せず、工業用水道タンクは現在地に建設された。縄文時代前期になると、第10地点の西側にごくわずかに分布するだけで、早期後葉との較差が大きい。同中期になると台地上からほとんど姿を消し、同後期になって陥り穴列が出現し、ごくわずかの土器が残される。同晩期になって再びにぎやかになり、第4・5地点で遺構・遺物とも多量に出土している。

次に、土層について概略述べる。I層は表土。II層黒色土は、中世以降の包含層である。III層は暗茶褐色を呈するⅡ層とIV層の漸移層で、縄文時代晚期から弥生時代の包含層である。IV層は黄褐色土と黃白色の火山灰に二分され、黄褐色土は縄文時代後期の包含層で、陥り穴の掘込み面でもある。V層は上部に縄文前期の遺物を包含するが、下部は無遺物層であるアカホヤ火山灰層である。VI層及びVII層が縄文早期の包含層であり、第10地点の主体となる層である。VI層は白色の軽石を多く含む暗茶褐色土で、VII層は軽石が少なく、黒褐色を呈する。VIII層はサツマ火山灰層で明黄褐色を呈し、第10地点でもブロック状の堆積を見せず、全面に堆積している。IX層は黒褐色ロームであり、本遺跡では遺構・遺物は出土していない。以下、入戸火砕流まで何枚かの桜島バミスを介在しながらロームが堆積している。

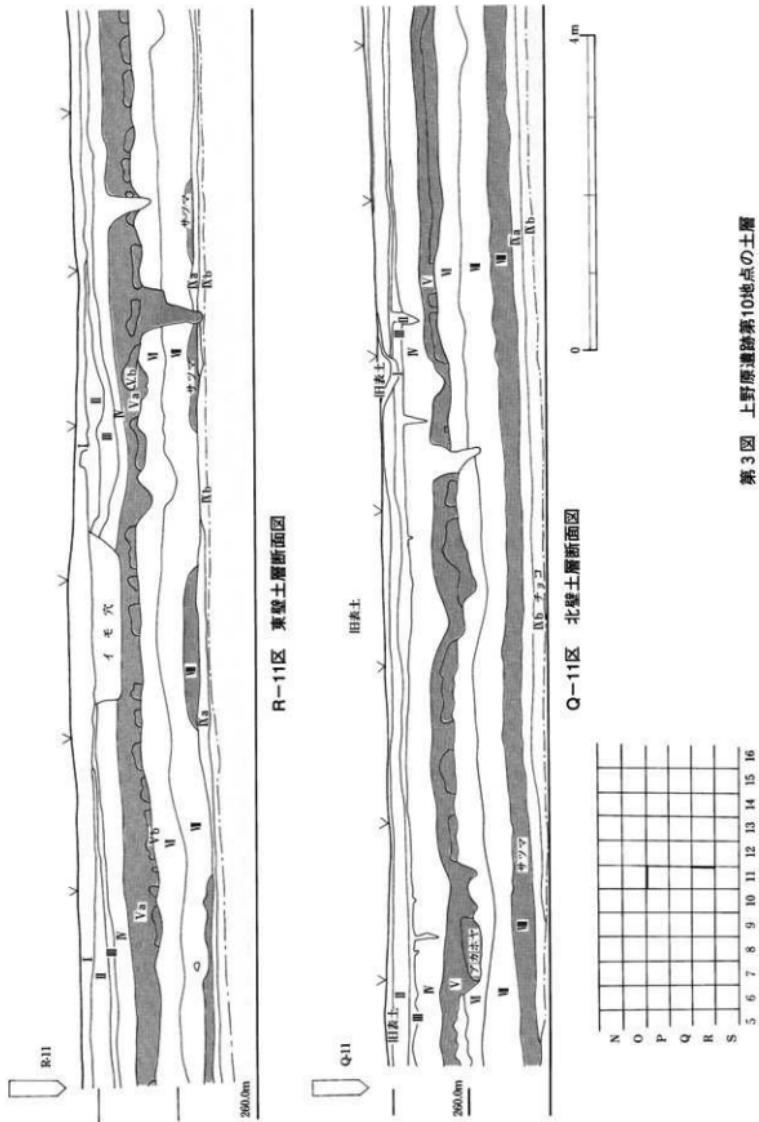
第1図 上野原台地周辺地形図及び上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内遺跡分布図



第2図 桜島・桜島地形断面図



第3図 上野原遺跡第10地点の土層



第IV章 発掘調査

第8節 繩文時代早期の調査

VI層およびVII層が遺物包含層であった縄文時代早期の時期の発掘調査は、各グリッドごとの進捗状況に応じて適宜行った。

上野原遺跡第10地点の発掘調査を行った結果は、約15万点にのぼる多量で、しかも多種多様な遺物が出土したこと、多様な遺構が検出されたことであった。これらのこととは、南九州では縄文時代早期の段階において、すでに全国に先駆けて多彩な縄文文化が開花していたことを示すものとして、発掘調査期間中から注目された。

その成果として、平成10年6月30日には767点の上野原遺跡出土品が重要文化財として指定された（一覧表参照）。

なお、第2分冊では縄文時代早期の時期に属する遺構として検出した、集石遺構・石核母岩集積遺構・磨石集積遺構・石斧埋納遺構・土器埋納遺構についてすでに報告を行った。

そこで、第4・5分冊と第6分冊前半部分とでは出土した土器について、第6分冊後半部分では土製品について、第7・8分冊では石器・石製品についての報告を行うこととする。

したがって、遺構検出状況などに関わる部分について必要がある場合は適宜述べるが、詳細については第2分冊を併せて参照されたい。

2. 遺物

上野原遺跡第10地点で、縄文時代早期の時期の包含層であるVI層およびVII層からは、約15万点に達する遺物が出土した。VI層およびVII層から出土したこれらの遺物が属する時期は、南九州の土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥峯式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平格式土器・塞ノ神式土器などの土器群とが出土している。しかしながら、その出土量の比率は、早期後葉の時期の土器群が出土土器全体の9割以上を占める状況にあった。

以上の状況から上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期中葉の時期から早期後葉の時期に人々の生活が行われ、遺跡が形成されたと考えられる。

さて遺物の分類では、壺形土器などを含む土器や耳栓などの土製品、多種多様な石器そして垂飾品などの石製品に分かれることが明らかとなった。

そこで、土器・土製品・石器・石製品の順に順次報告していくこととする。

では、まず土器について報告を行う。

（1）土器

先に述べたように上野原遺跡第10地点で出土した土器は、現在示されている南九州の縄文土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥峯式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平格式土器や塞ノ神式土器などの土器群とに属することが明らかになった。では、まず縄文時代早期中葉に属する土器群から報告を行うことにする。

A) 縄文時代早期中葉の土器群

上野原遺跡第10地点で出土した縄文時代早期中葉の時期に属する土器は、下記のように11型式に分類することができます。

- 第1群 石坂式土器
- 第2群 下剥峯式土器
- 第3群 桑ノ丸式土器
- 第4群 円筒形条痕文土器
- 第5群 微細山形押型文土器
- 第6群 山形押型文土器
- 第7群 楊円押型文土器
- 第8群 条線押型文土器
- 第9群 变形燃糸文土器
- 第10群 手向山式土器
- 第11群 手向山式類似土器

以上分類した第1群から第11群までの11型式の土器のうち、第1群（石坂式土器）、第2群（下剥峯式土器）、第3群（桑ノ丸式土器）に属する土器は、縄文早期前葉の時期以降に南九州地域で広く見られる、主に貝殻を使用して施文・調整を行う、貝殻文系円筒形土器様式に属する土器型式である。

一方、第4群（円筒形条痕文土器）は縄文早期前葉以降の時期に中九州西部地域を中心に広く見られる土器型式である。

これに対して、第5群（微細山形押型文土器）、第6群（山形押型文土器）、第7群（梢円押型文土器）、第8群（条線押型文土器）、第9群（変形撲糸文土器）および第10群（手向山式土器）に属する土器は、回転押捺技法で施文を行う土器型式である。

このうち、第5群、第6群、第7群、第8群および第10群に属する土器は、押型文土器様式に属する土器型式である。このうち、第5群と第6群とは同じ山形押型文土器に属する土器であり、本来は同じ分類の下に記述すべき土器ではある。しかし、後述するように土器型式的属性や出土分布などにおいて、おのおの特徴があることから、本報告では類を分けて報告することにする。

さらに第11群（手向山式類似土器）は、手向山式土器とは施文方法は全く異なるものの、手向山式土器の文様構成のイメージが酷似する土器である。したがって本來は、第10群の亞種として取り扱うところである。しかし、第11群は押型文土器とその施文方法において一線を画する土器であり、本報告では類を分けて報告を行うことにする。

それでは、第1群土器から順次、各群の土器について報告を行うこととする。

① 第1群 石坂式土器（第4図～第8図）

i) 概要

第1群に属すると判断した土器片は、28点出土し、そのうち4個体・全点を資料化した。

第1群は、「口縁部が肥厚して大きく外反し、胸部は円筒形で底部は平底である。文様は、丸みを帯びた口唇部

には斜位の刻み目が連続して巡らされ、口縁部には貝殻刺突文を斜位や羽状に施文する。胴部には貝殻条痕の綾杉文を縱位に丁寧に施文し、底部側面下端には刻み目を巡らす」と定義されている。河口貞徳氏により設定された土器型式である。鹿児島県川辺郡知覧町石坂上遺跡から出土した土器を標識とする土器である。

1～4の器形的特徴としては、口縁部が直線的でわずかに外反すること、口唇部が外傾する平坦面を作出すること、口縁部の瘤状突起が2箇所に見られること、胴部が直線的で、円筒形を呈すこと、が挙げられる。

さて、第1群の土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウムモを含有する土器片が1点も出土していないことは、注目できる。また、土器の調整方法は外器面がヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが、内器面がナデ調整を行うことが主流である。一方、土器の色調は外器面では茶褐色が、内器面では暗茶褐色から茶褐色が主流であった。

さて、出土状況全体図から第1群は、Q-10区を中心とする標高259mから261mにかけての区域と、R-12・13・14区の標高262mを中心とする区域とに集中して出土していることが指摘できる。

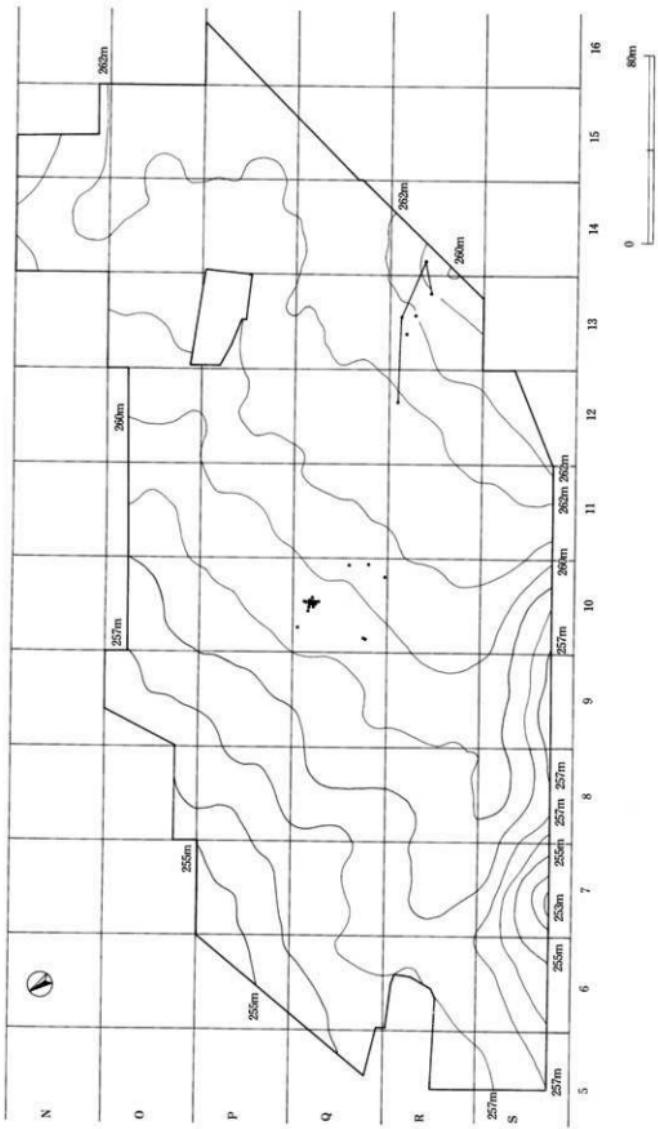
ii) 小結

第1群に属する土器の器形的特徴は、口縁部が直線的でわずかに外反し、口縁部には瘤状突起を有することが指摘できる。

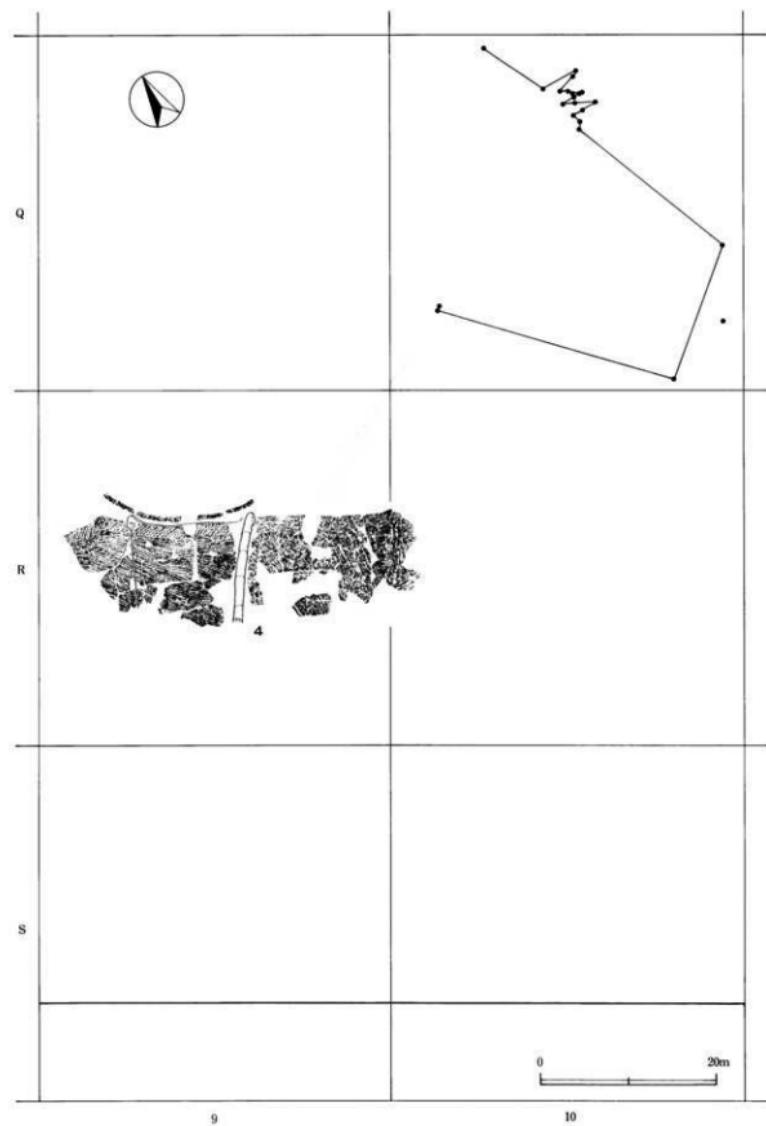
この特徴と比較すると、前田亮一氏の言う「石坂式新段階」に該当する土器として比定できる。

石坂式土器観察表

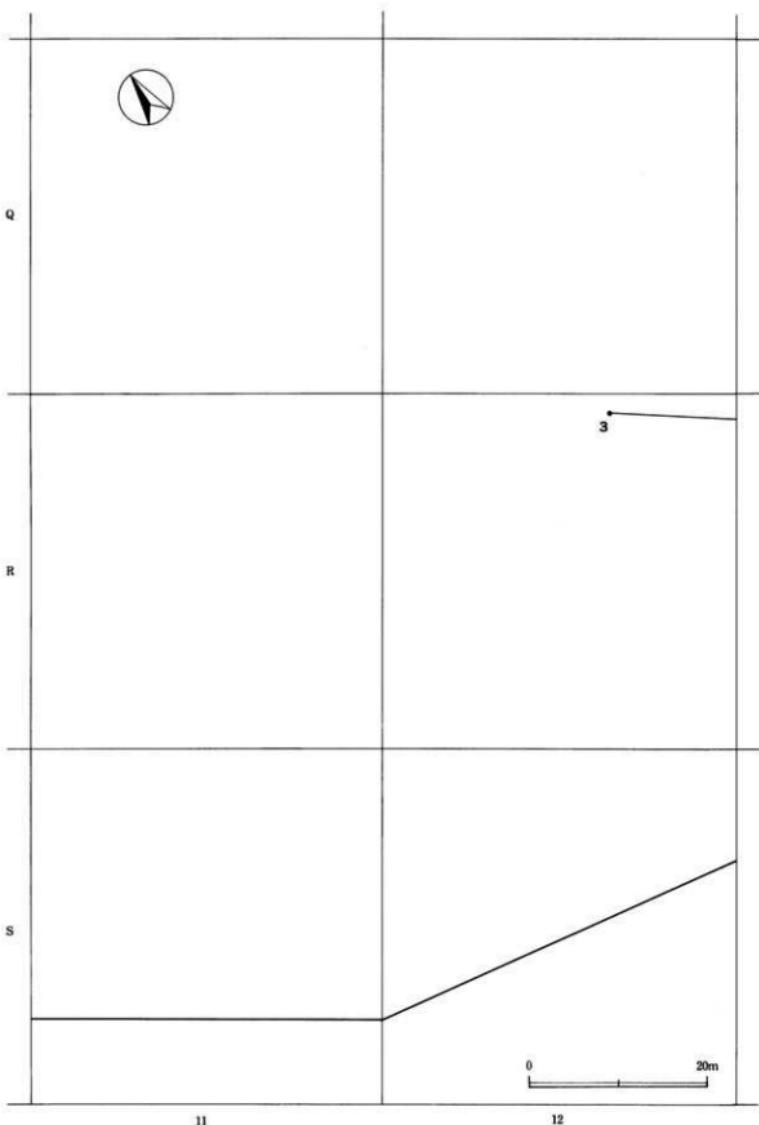
群別 番号	地区 番号	出土 区	出土 年	測定 番号	測定 場	基準	形状	器 形				外器面 調査	内器面 調査	色 調	内器面	備考
								石英	長石	角閃石	クロウムモ					
第 1 群	Q-1-0	795	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	869	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	2599	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	2778	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	2796	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3002	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3012	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3017	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3023	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3025	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3033	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3049	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3792	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3793	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3869	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3974	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	Q-1-0	3999	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
第 2 群	R-1-2	664	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	R-1-2	671	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	R-1-3	6521	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	R-1-3	1331	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
第 3 群	R-1-3	2001	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無
	R-1-3	324	1975	1	直縁	口縁-側面	○	○	○	無	無	無	無	無	無	無



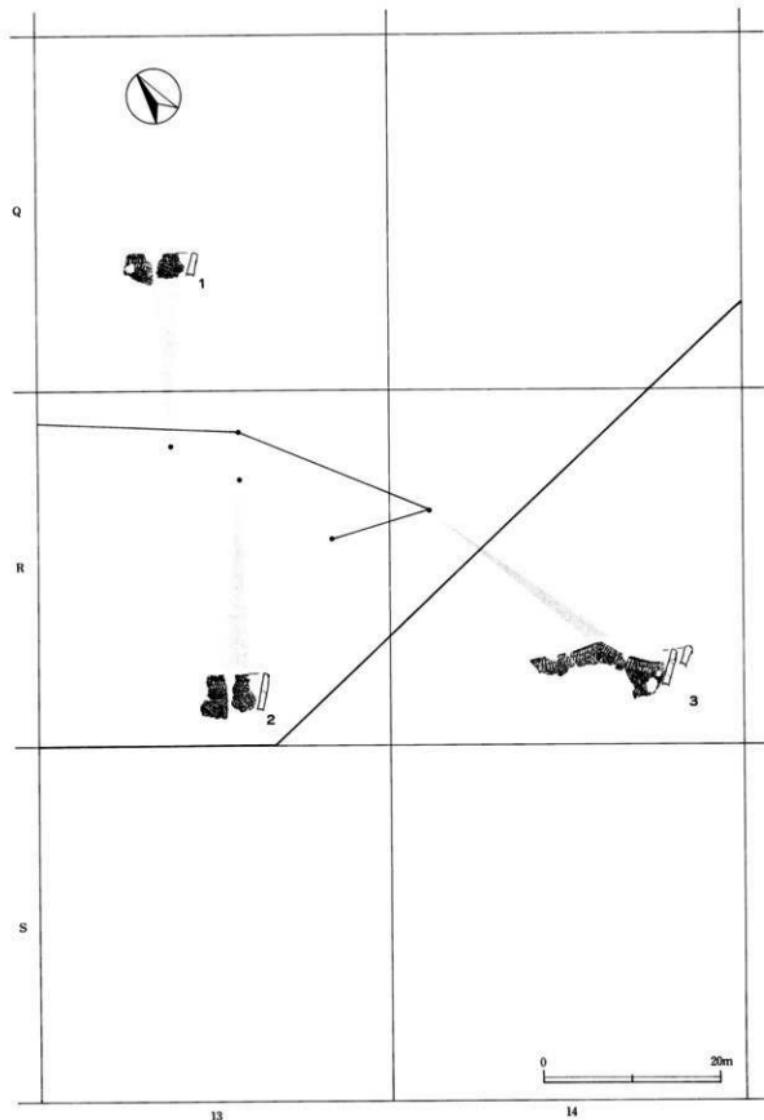
第4圖 石坂式土器出土狀況全體圖



第5図 石坂式土器出土状況図1 (Q・R・S・9・10区)



第6図 石坂式土器出土状況図2 (Q・R・S-11・12区)



第7図 石板式土器出土状況図3 (Q・R・S-13・14区)

第8図 石板式土器実測図



② 第2群 下剥峯式土器（第9図～第43図）

i) 概要

第2群に属すると判断した土器片は、780点出土し、そのうち44個体・179点を資料化した。

第2群は、「土器の全体器形が円筒形で、底部は平底を呈し、口縁部は若干内凹して、口唇部は内傾する平坦面を作出する特徴を有する」と定義されている、新東晃一氏により設定された土器である。鹿児島県西之表市現和に所在する下剥峯遺跡から出土したII類土器を標識とする土器である。

本報告では土器の文様構成から4分類した。その特徴を以下に記す。

第2群1類に属する土器の施文的特徴としては、貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）を、口縁（上端）部には横位方向に数条巡らし、胴部全面には羽状文あるいは鋸歯文を縦位方向あるいは斜位方向に施文する点を挙げることができる。

類例としては、下剥峯遺跡でIIa類に分類された土器であり、最も下剥峯式土器の基本形に近いと考えられる土器である。

第2群2類に属する土器の施文的特徴としては、口縁（上端）部にヘラ状工具を用いて、縦位方向に垂下する刺突文を横位方向に数条巡らす点と、胴部全面には貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）を縦位方向に羽状文に施文する点とを、挙げることができる。

類例としては、下剥峯遺跡でIIb類およびIIc類に分類された土器である。

第2群3類に属する土器の施文的特徴としては、ヘラ状工具を用いて、横位方向に施す羽状文と横位方向に3～4条巡らした連続押し引き文とを交互に、口縁（上端）部から胴部上半にかけて施文する点を挙げることができる。さらに胴部下半全面には、貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）で縦位方向に羽状文を施文する部分と、ヘラ状工具を用いて縦位方向に羽状文や連続押し引き文を施文する部分とを、交互に施しながら横位方向に施文している点を挙げることができる。

第2群4類に属する土器の施文的特徴としては、先端が尖った工具を用いて口縁（上端）部から胴部

全面にかけて、縦位方向に押し引き文を施したり、横位方向に鋸歯文を施す点を挙げることができる。

さて、出土状況全体図から第2群土器は、主に標高262mから260mにかけての、P・Q-12・13・14区やR-13区を中心とする発掘区画東側の区域に集中して出土している（第9図参照）。この区域は、発掘区画の境界近くであるため詳細な地形は不明であるが、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩やかな傾斜地にあたる地域である。

したがって第2群の出土分布の状況から、これらの土器を使用した人々は東側の発掘区画外にかけて生活の場を設けていたことが想定できる。

さらに重要なことは、第2群が集中して出土した地域は、第4群に分類した円筒形条痕文土器や第5群に分類した微細山形押型文土器、第9群に分類した変形燃系文土器、第10群に分類した手向山式土器が集中して出土した地域と重なっていることである。その一方で、第3群に分類した桑ノ丸式土器や第6群に分類した山形押型文土器、そして第7群に分類した梢円押型文土器などの土器群が集中して出土した、標高262mから259mにかけての、R-S-9区からS-11区を中心とする発掘区画南側の区域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

したがって上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期中葉の時期の人々は、主に発掘区画東側の区域に集中して生活した時期と、主に発掘区画南側の区域に集中して生活した時期とに分かれる、と考えられる。

この分布域の問題は、縄文早期中葉の時期に人々が生活の場をいかに変遷させたか、を考える上で重要な視点になると考えられるので、注目していく。

それでは、第2群のうちの各類ごとに概観していくことにする。

②-1 下剥峯式土器1類（第10図～第19図）

i) 概要

第2群1類の範疇に属すると判断した土器片は、220点出土し、そのうち11個体・48点を資料化した。第2群1類は、先述したように、施文の特徴としては、貝殻を用いて連續した刺突文（貝殻刺突文線）を、口縁（上端）部には横位方向に数条巡らし、胴部全面には羽状文あるいは鋸歯文を縱位方向あるいは斜位方向に施文する土器である。

ただし土器の器形的特徴から、さらに2つに分けることが可能である。

まず、第2群1類aに属する土器の器形的特徴は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内湾して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する。そして、胴部は直線的にすぼまり、底部は平底を呈する、下剥峯式土器の基本的器形を呈する土器である（第19図4～10）。

次に、第2群1類bに属する土器の器形的特徴は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまるく削られており、見かけ上、口縁部の内湾形態が強調されている（第19図1～3）。下剥峯式土器の基本的器形の定義からは、はざれる土器群である。

さて、第2群1類の土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石・クロウンモで構成された。特にクロウンモの含有量が多かったのに対して、角閃石の含有量は少なかった。また、土器の調整方法は外器面、内器面共にハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。中にはケズリ調整を行う土器も観察できた。さて、土器の色調は外器面、内器面共に暗茶褐色から暗褐色が主流であった。

ところで、出土状況全体図を概観すると第2群1類は、R-13・14区を中心とする区域に集中し、その周囲に散布地域があがぐる状況である。

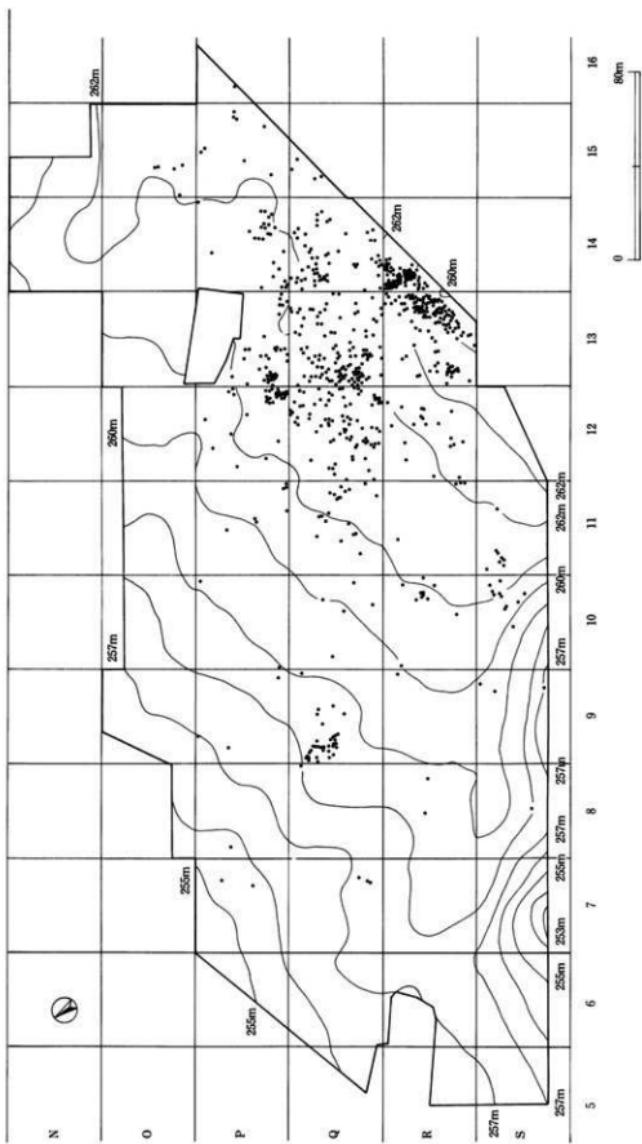
また特にここで指摘しておきたいことは、傾斜方向である東西方向に200m離れた地点で出土した土器が接合したことや、ほぼ同じ標高地で110m離れた地点で出土した土器が接合したことが確認できたことである（第9図参照）。これらのことが何を意味

するものなのかは、現在のところ不明である。

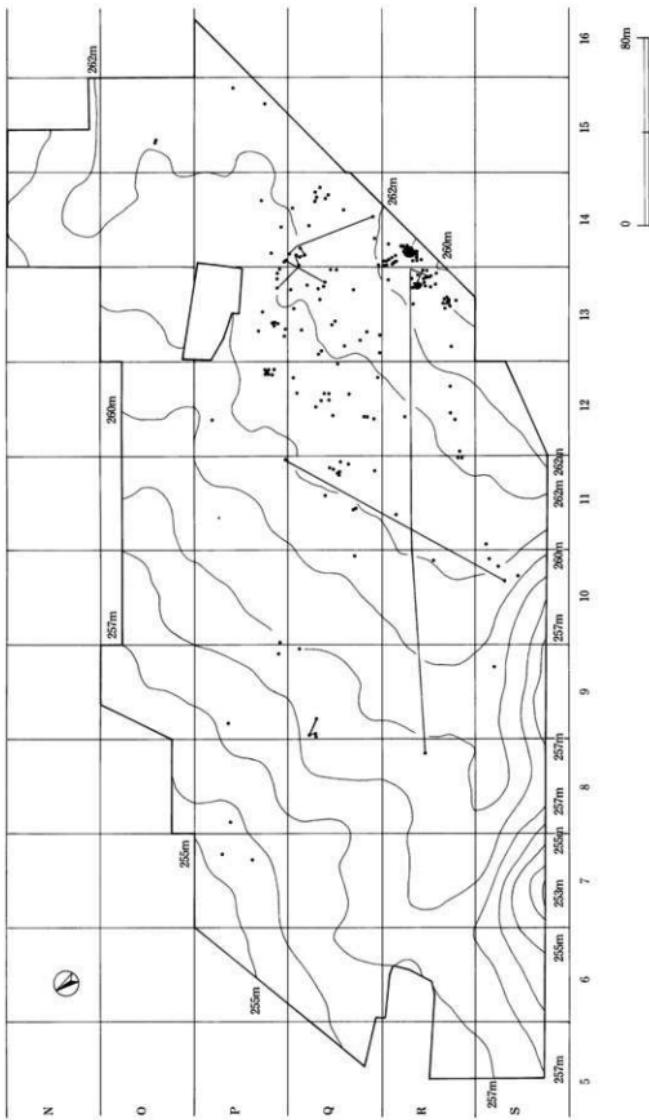
ii) 小結

この第2群1類の特徴から、施文の文様構成はほぼ同じながらも、土器の器形において以下の2種類に分けることができた。

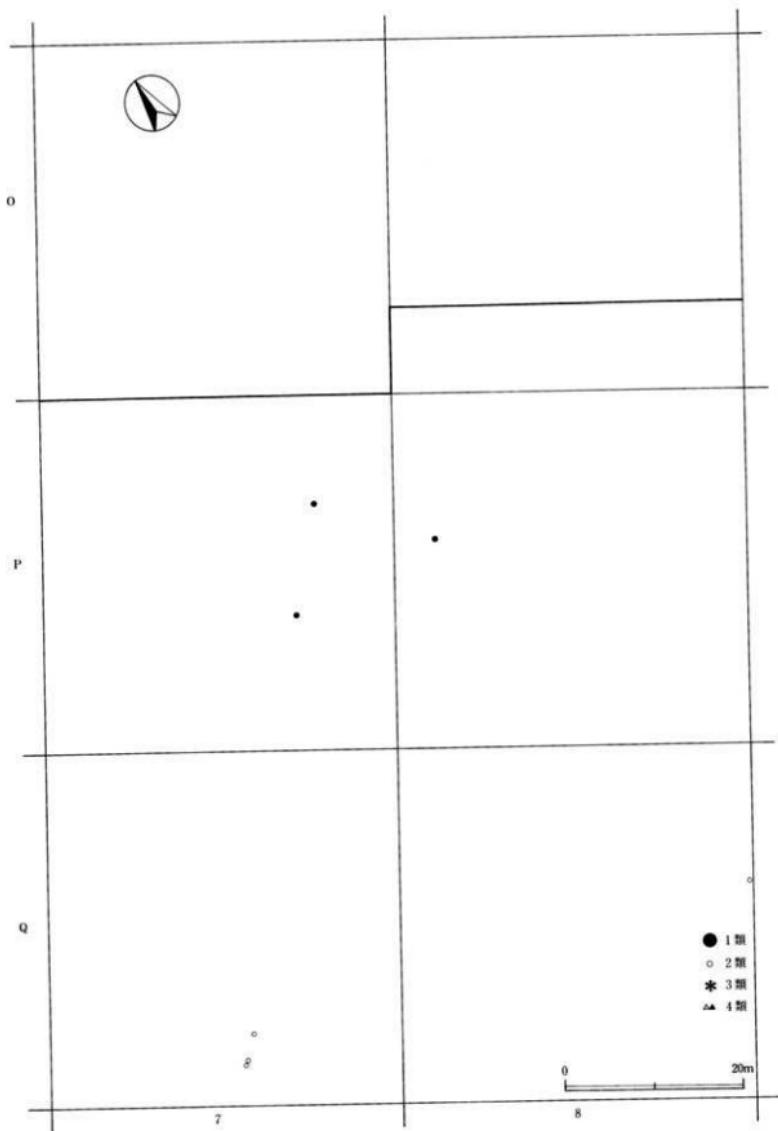
- ① 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内湾し、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する。下剥峯式土器の基本的器形を呈するタイプの土器（a類土器）。
 - ② 口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまるく削られており、見かけ上、口縁部の内湾形態が強調されている。下剥峯式土器の基本的器形の定義からはずれるタイプの土器（b類土器）。
- の2タイプに分けることができることをこの項では指摘しておく。



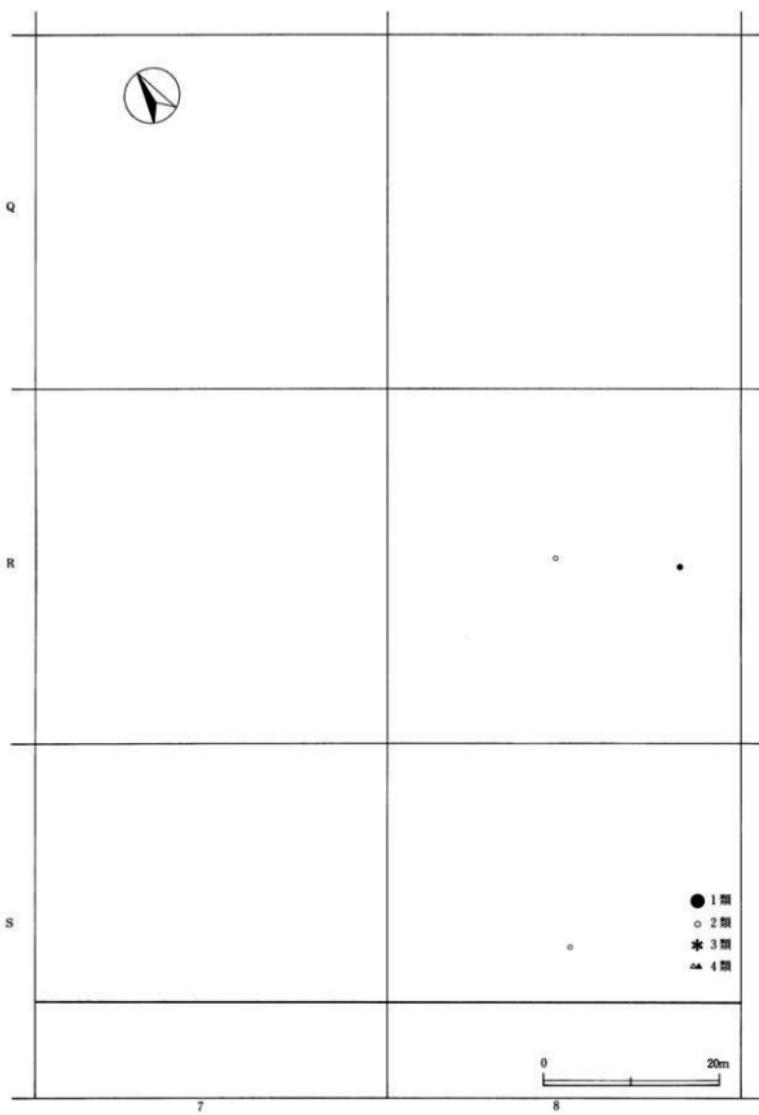
第9図 下剥墓式土器出土状況全体図



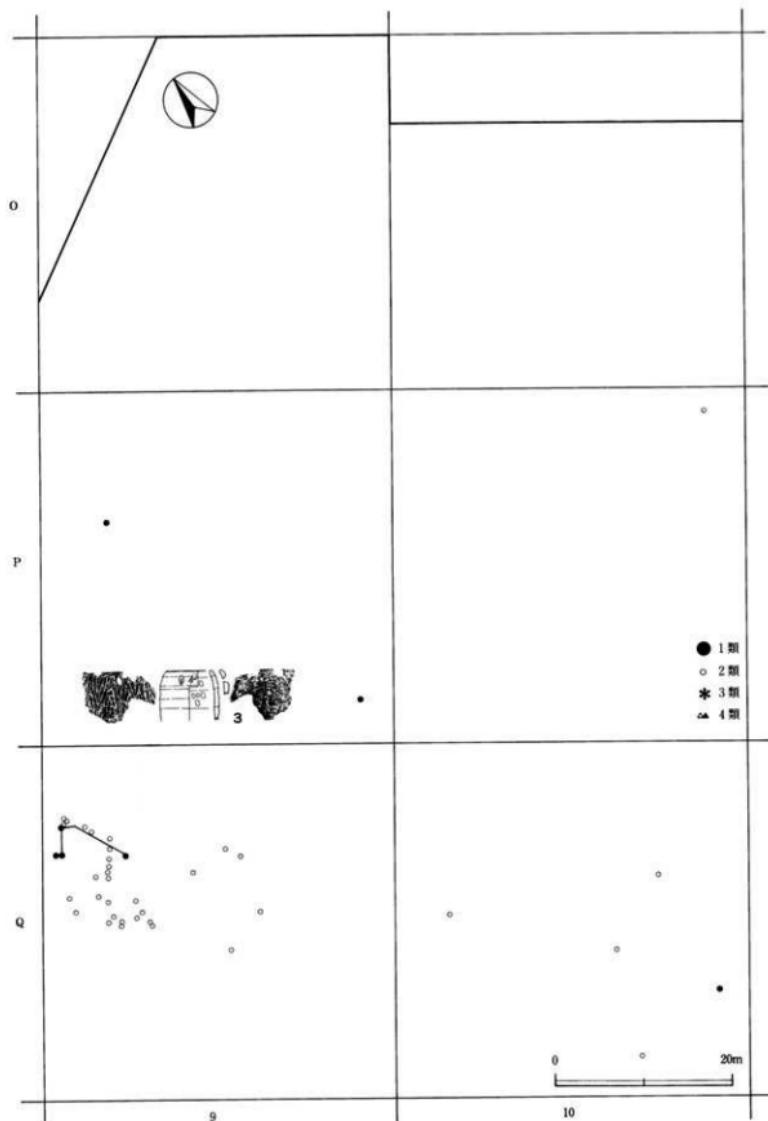
第10図 下剥基式土器1,000件出土状況全体図



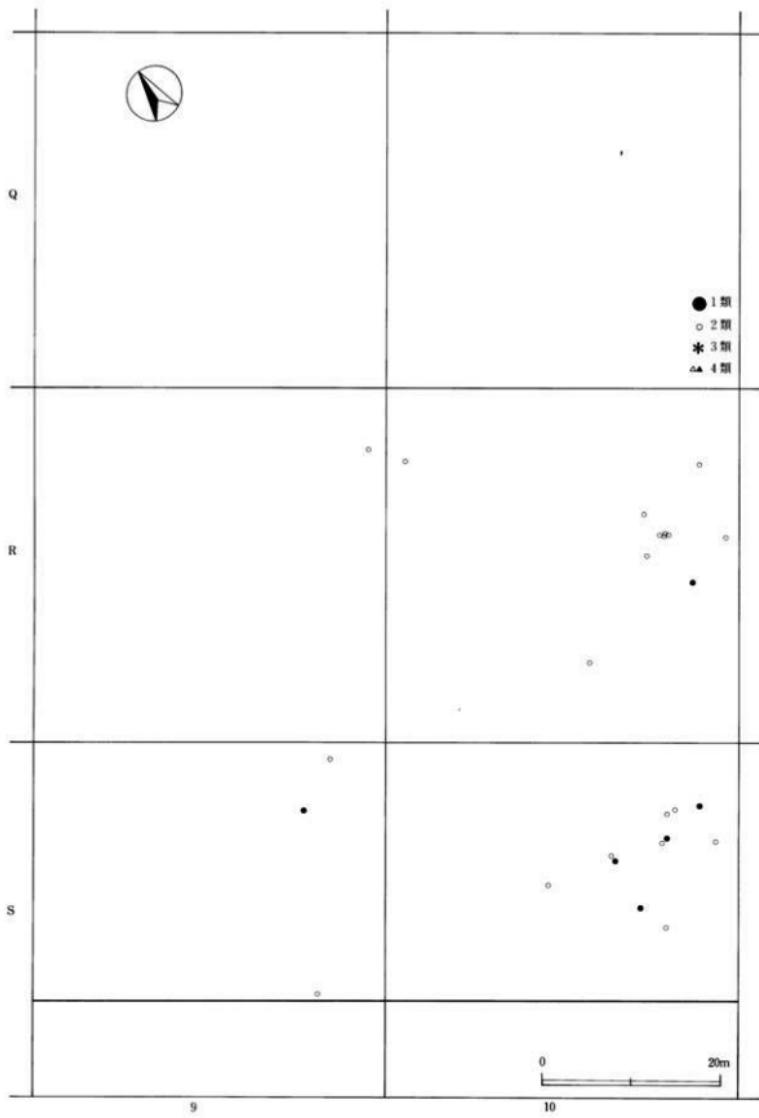
第11図 下剥峯式土器 1類出土状況図1 (O・P・Q-7・8区)



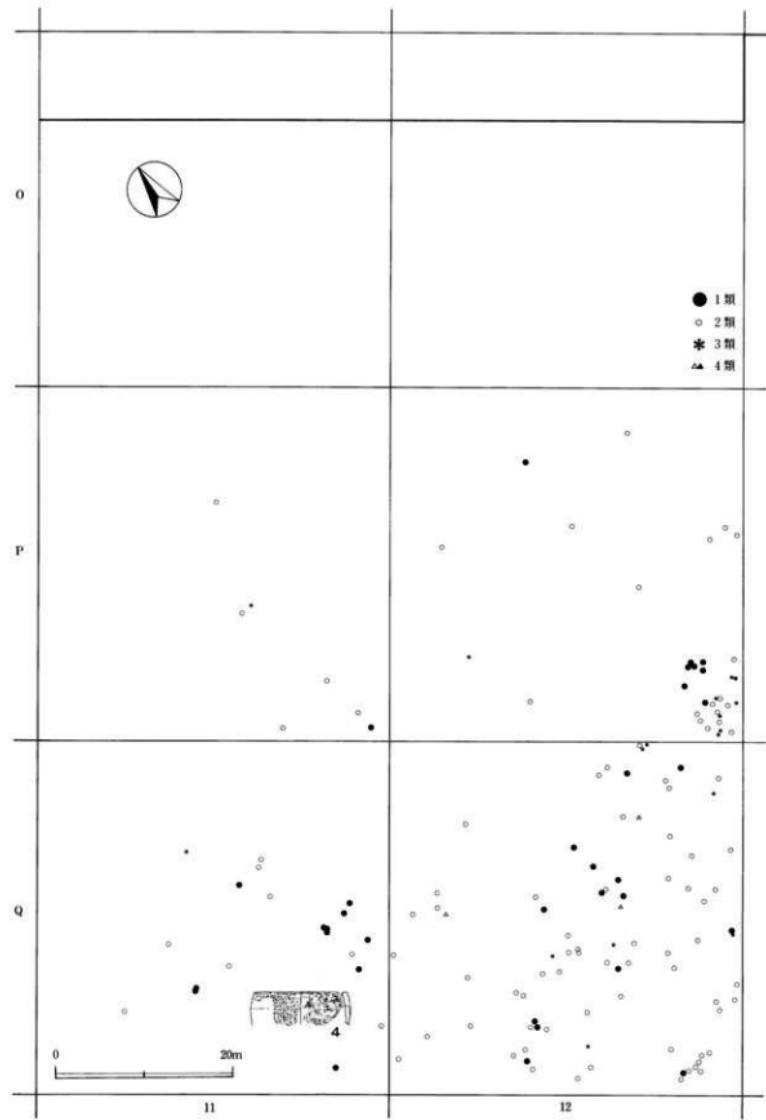
第12図 下剥峯式土器 1類出土状況図 2 (R・S-7・8区)



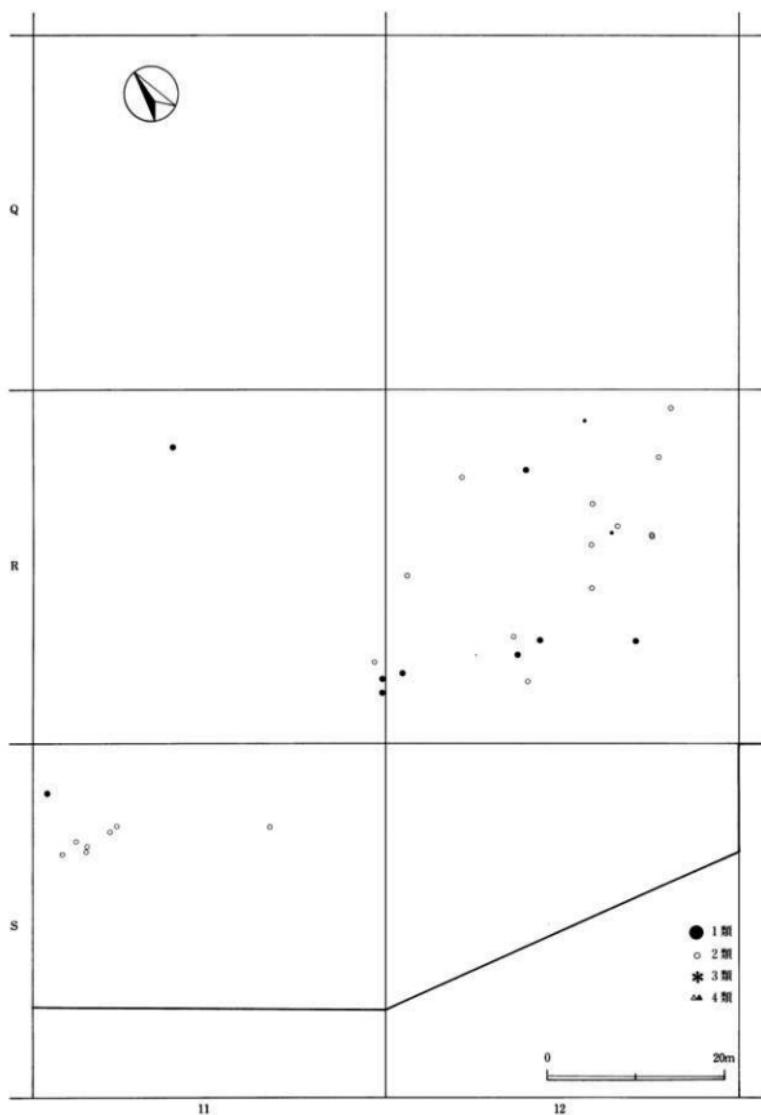
第13図 下剥塗式土器 1類出土状況図 3 (O・P・Q・9・10区)



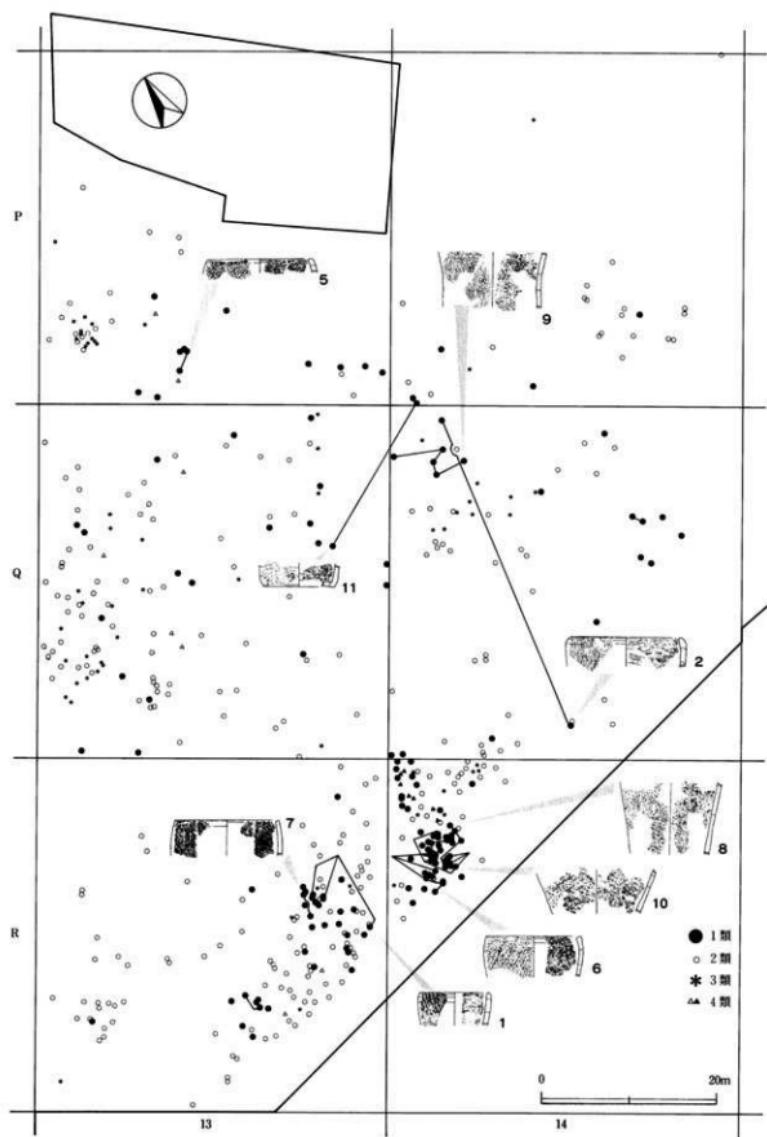
第14図 下剥峯式土器 1類出土状況図 4 (R・S・9・10区)



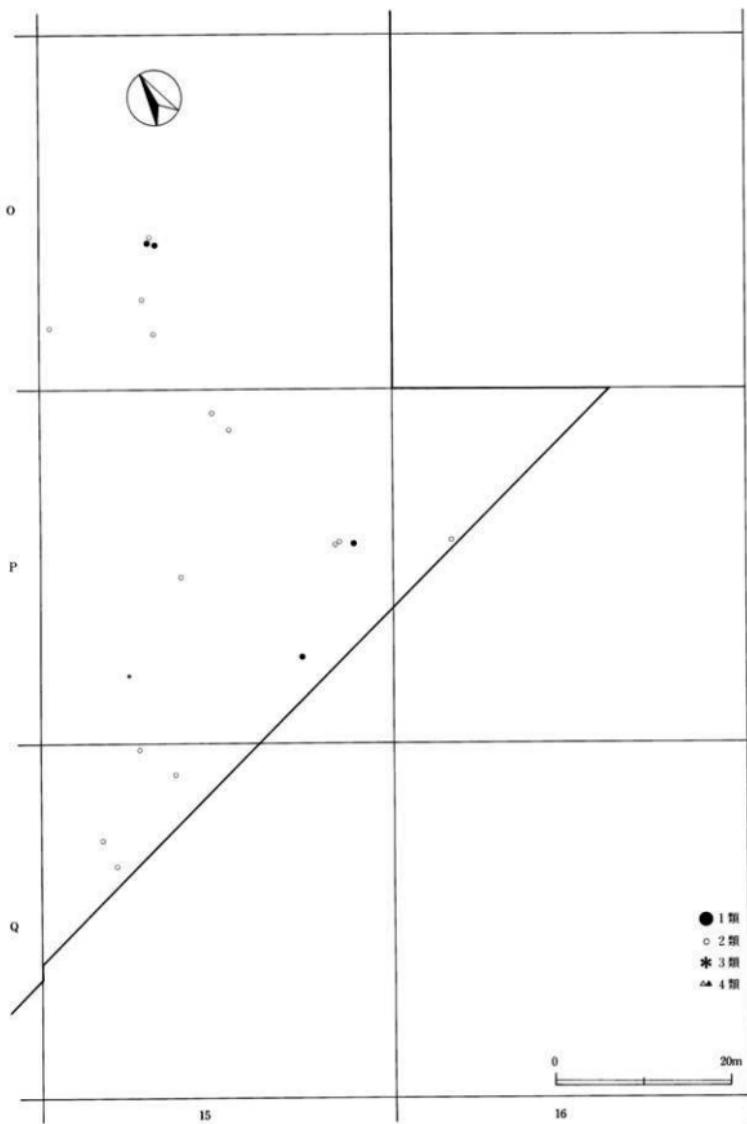
第15図 下剥峯式土器1類出土状況図5(O・P・Q-11・12区)



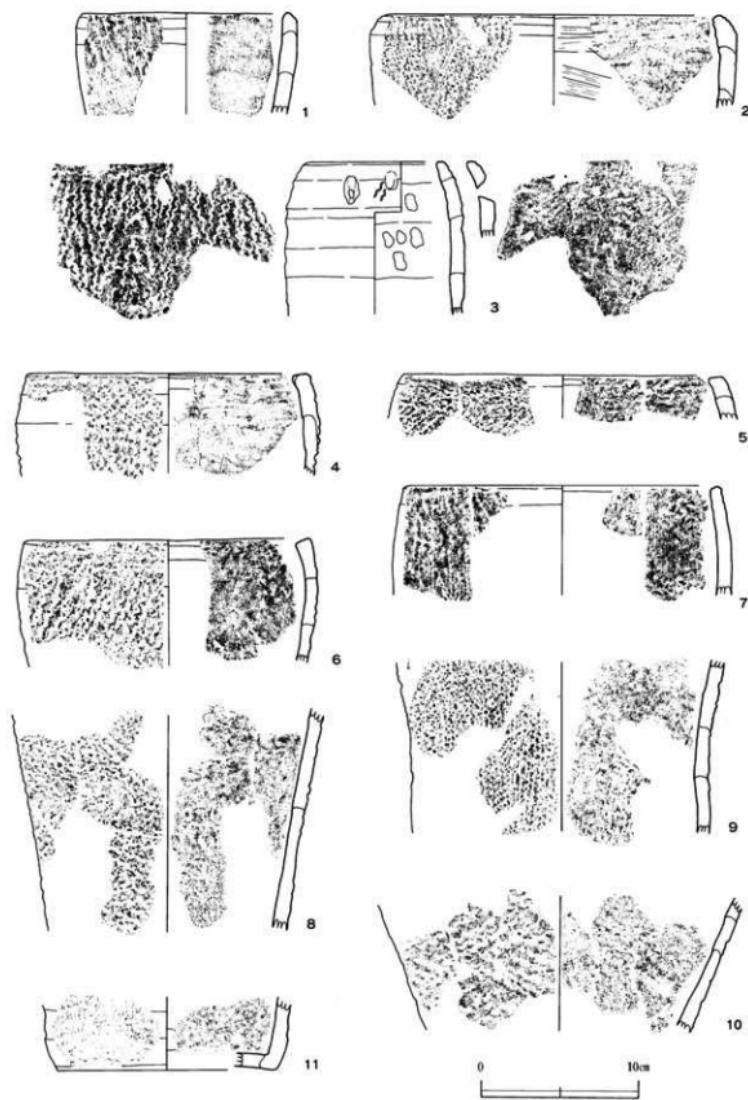
第16図 下剥峯式土器1類出土状況図6(R・S-11・12区)



第17図 下剥峯式土器 1類出土状況図 7 (P・Q・R-13・14区)



第18図 下剥塗式土器 1類出土状況図 8 (O・P・Q-15・16区)



第19図 下剥峯式土器1類実測図

下剥式土器 1 類土器觀察表

種類	品目	規格	原産地	販売量	単位	備考	出荷量			内訳	内訳	備考
							在庫	販売	出荷			
1	S-1-2	2500	120	出荷	120	新規・既製	○	○	△	新規・既製	ハタチナガ	ハタチナガ
	S-1-2	2500	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ハタチナガ	ハタチナガ
2	S-1-4	2800	127	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガナガ
	S-1-4	2800	127	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガナガ
3	S-2-8	2500	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガナガ
	S-2-8	2500	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガナガ
4	S-2-11	2150	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガナガ
	S-2-11	2150	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガナガ
5	S-2-12	1800	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ハタチナガ	ハタチナガ
	S-2-12	1800	120	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ハタチナガ	ハタチナガ
6	S-2-14	960	127	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
	S-2-14	960	127	出荷	120	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
7	S-2-14	960	120	出荷	120	新規・既製	○	○	△	新規・既製	ハタチナガ	ハタチナガ
	S-2-14	960	120	出荷	120	新規・既製	○	○	△	新規・既製	ハタチナガ	ハタチナガ
8	S-2-14	2800	134	出荷	280	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
	S-2-14	2800	134	出荷	280	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
9	S-2-14	2800	130	出荷	280	新規・既製	○	○	△	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
	S-2-14	2800	130	出荷	280	新規・既製	○	○	△	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
10	S-2-14	2800	130	出荷	280	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
	S-2-14	2800	130	出荷	280	新規・既製	○	○	○	新規・既製	ナガ	ハタチナガ
11	S-2-14	130	出荷	130	新規・既製	○	○	△	新規・既製	ナガ	ハタチナガ	

②-2 第2群（下剥臺式土器）2類

(第20圖～第32圖)

i) 概要

第2群2類に属すると判断した土器片は、452点出土し、そのうち27個体・74点を資料化した。

第2群2類は、土器の器形的特徴および文様構成の特徴から、口縁部から腹部にかけての土器について、さらに2つに分けることが可能である。

まず、第2群2類aに属する土器器形の特徴は、第2群1類bに属する土器の器形と概ね同じである（第29図12～第31図24）。すなわち、口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまるく削られており、見かけ上、口縁部の内湾形態が強調されている。胴部は円筒形で、胴部下半で心持ちすぼまり、底部は平底を呈する土器である。この類の土器に施された文様構成の特徴としては、ヘラ状工具を用いて縱位方向に施す刺突文を、口縁（上端部に横位方向に数条巡らし、胴部全面には貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）で、縱位方向に茅状文を施す点が挙げられる。

一方、第2群2類bに属する土器器形の特徴は、以下のとおりである（第31図25～29）。

すなわち、口縁形態は波状口縁を呈し、口縁上面觀

は略方形を呈する土器である。口唇部は水平平坦面を作出している。口縁部は弯曲しながら外反するタイプの土器である。この類の土器に施された文様構成の特徴としては、ヘラ状工具を用いて、口縁上半部には横位方向に連続刺突文を数条巡らす一方で、口縁下半部には縱位方向に網麗文を施文する、点が挙げられる。

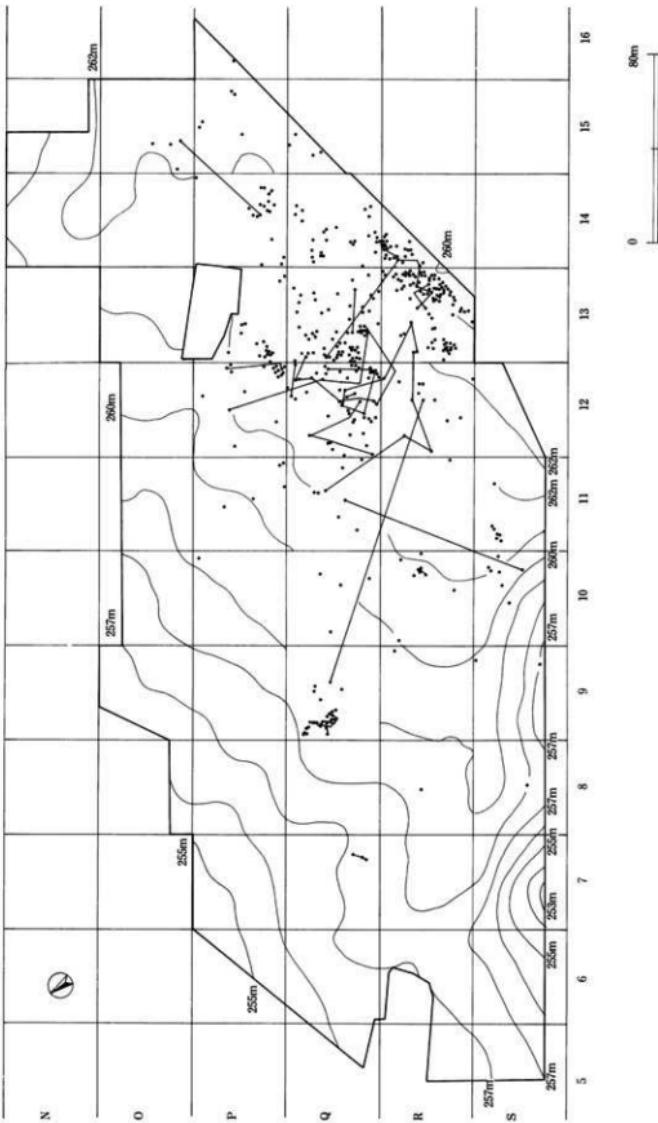
さて、第2群2類の土器胎土中に含まれる鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成される土器と、主に石英・長石・クロウンモで構成される土器とがあった。しかし、土器胎土による分類と、形態および施文方法による分類との間には、相關関係は見られなかつた。

また、土器の調整方法は外器面ではナデ調整を行なうことが主流であるが、中には木製工具を使用したと考えられるハケ目調整の後にナデ調整を行う土器も見られた。内器面ではミガキ調整や丁寧なナデ調整を行なった土器も見られたが、ハケ目調整の後にナデ調整を行なった土器が主流であった。

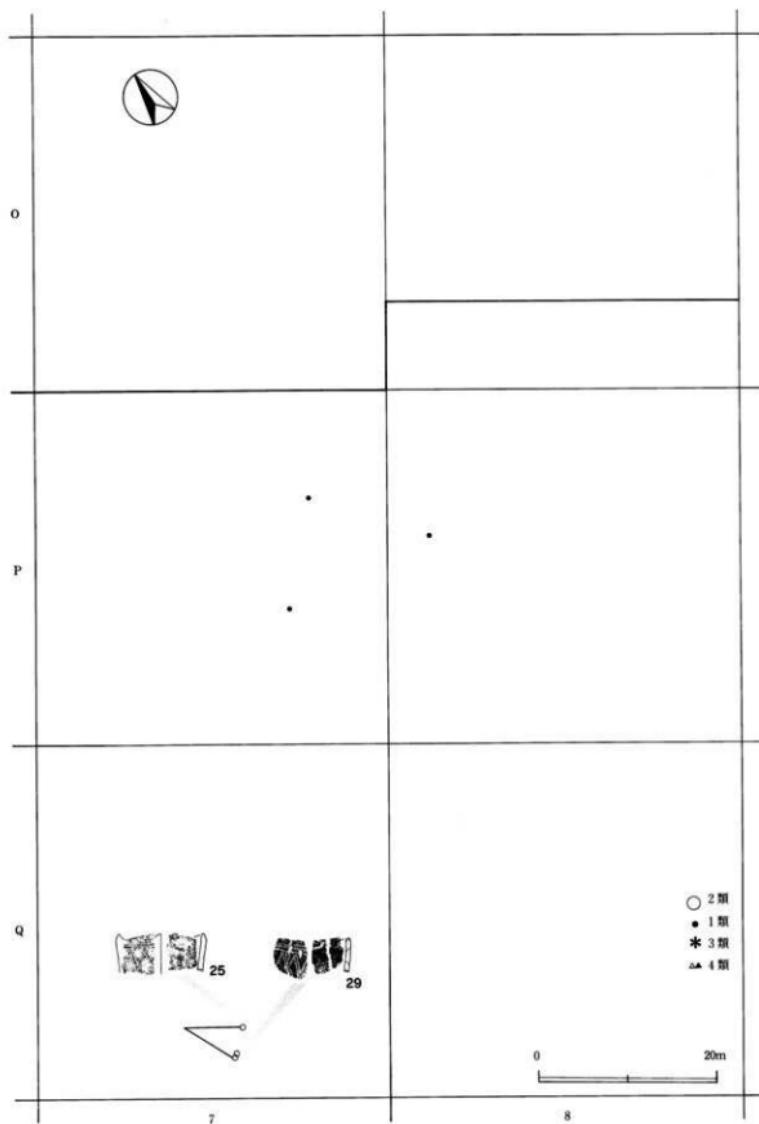
一方、土器の色調は外器面、内器面共に暗茶褐色から茶褐色を呈する土器が主流であった。

ところで、第2群2類に属する土器の出土状況全図（第20図）を概観すると、

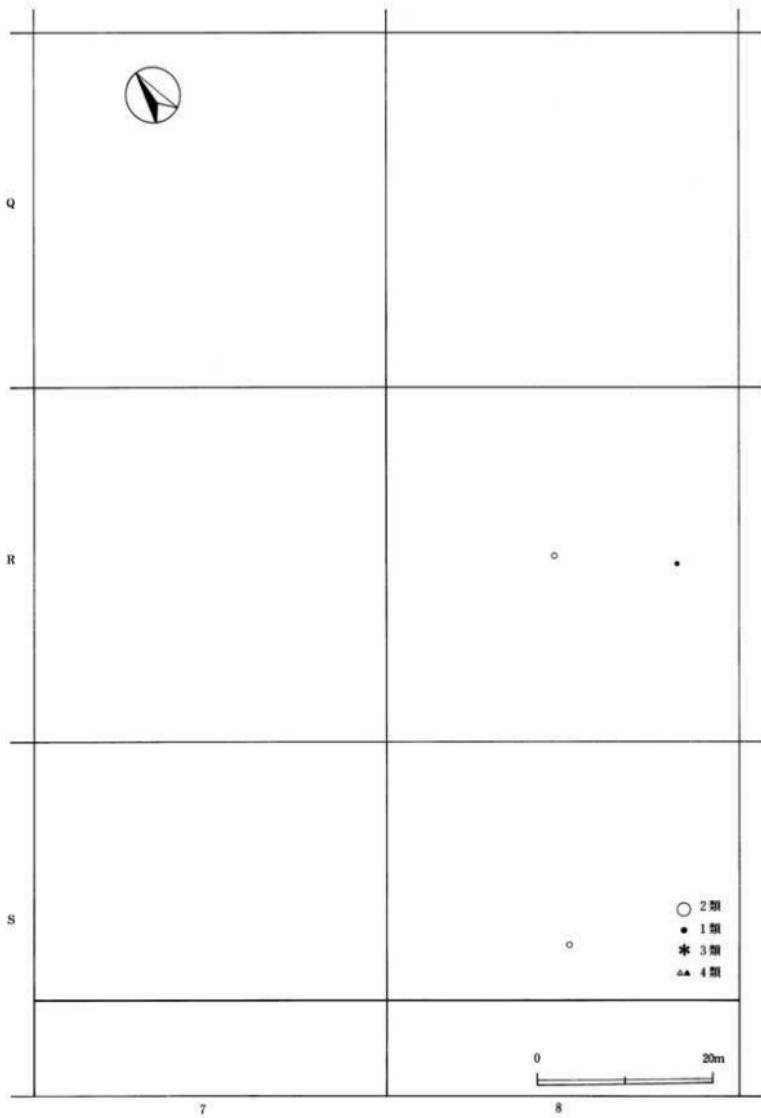
① R-13区からR-14区にかけての区域



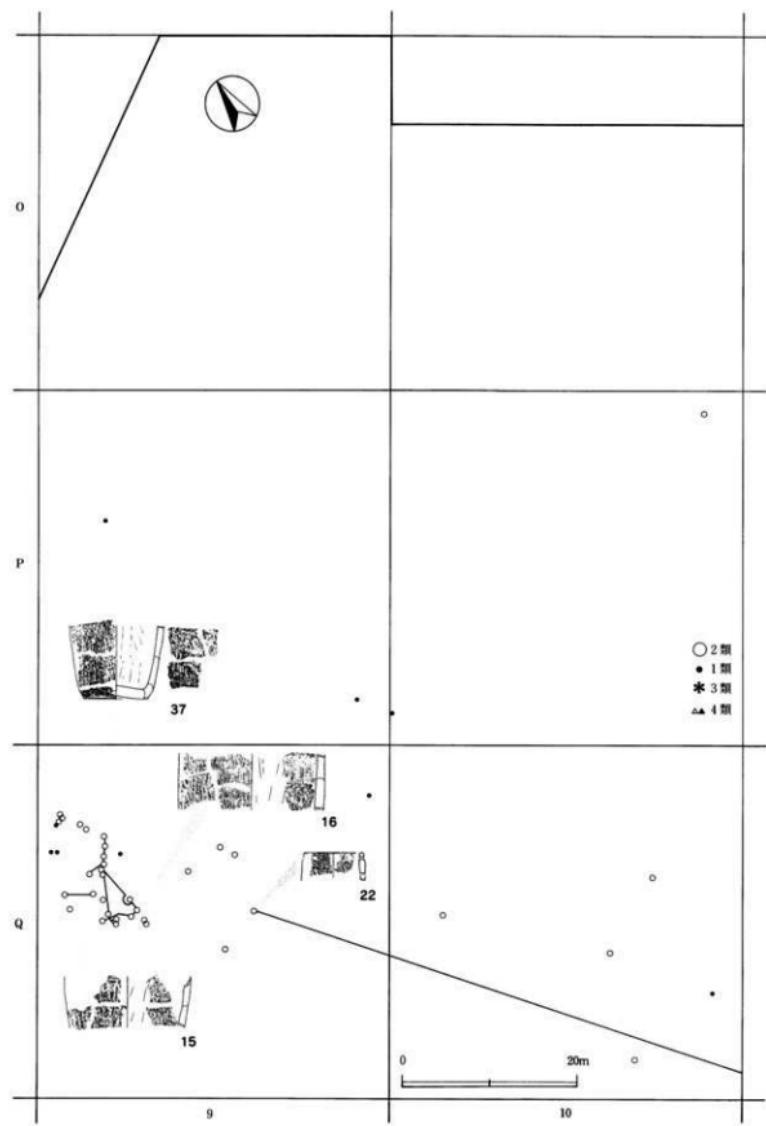
第20図 下刷葉式土器2類出土状況全図



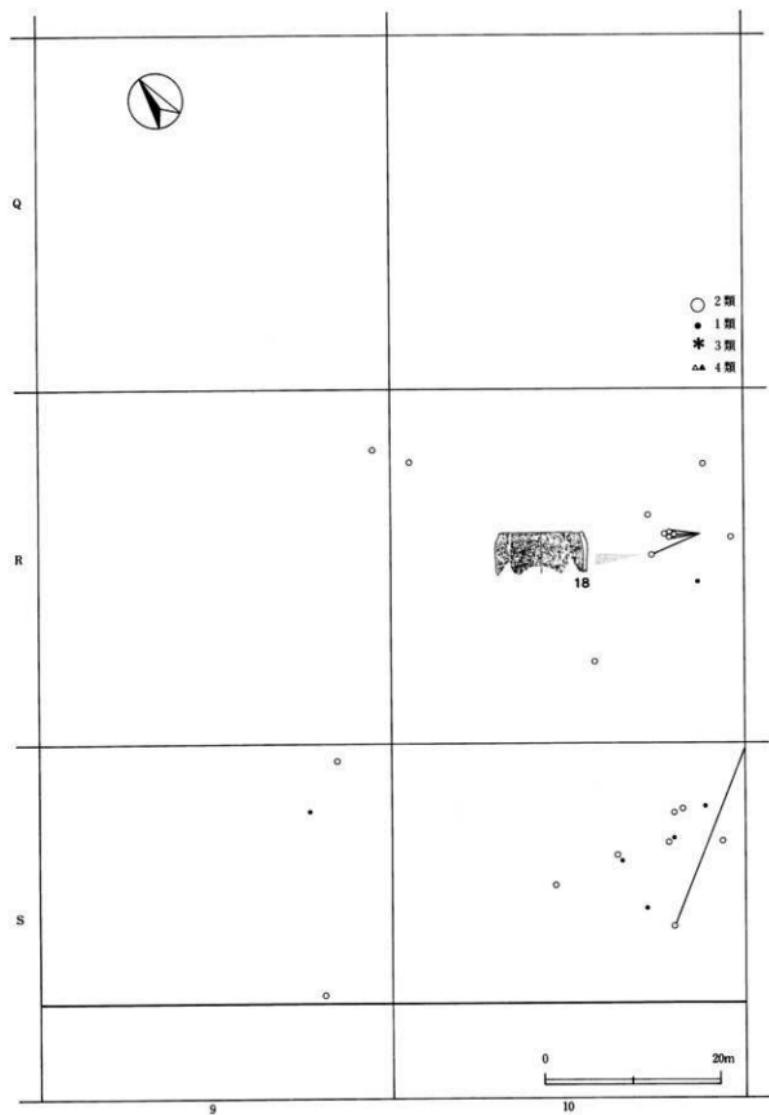
第21図 下剥峯式土器 2類出土状況図1 (O・P・Q・7・8区)



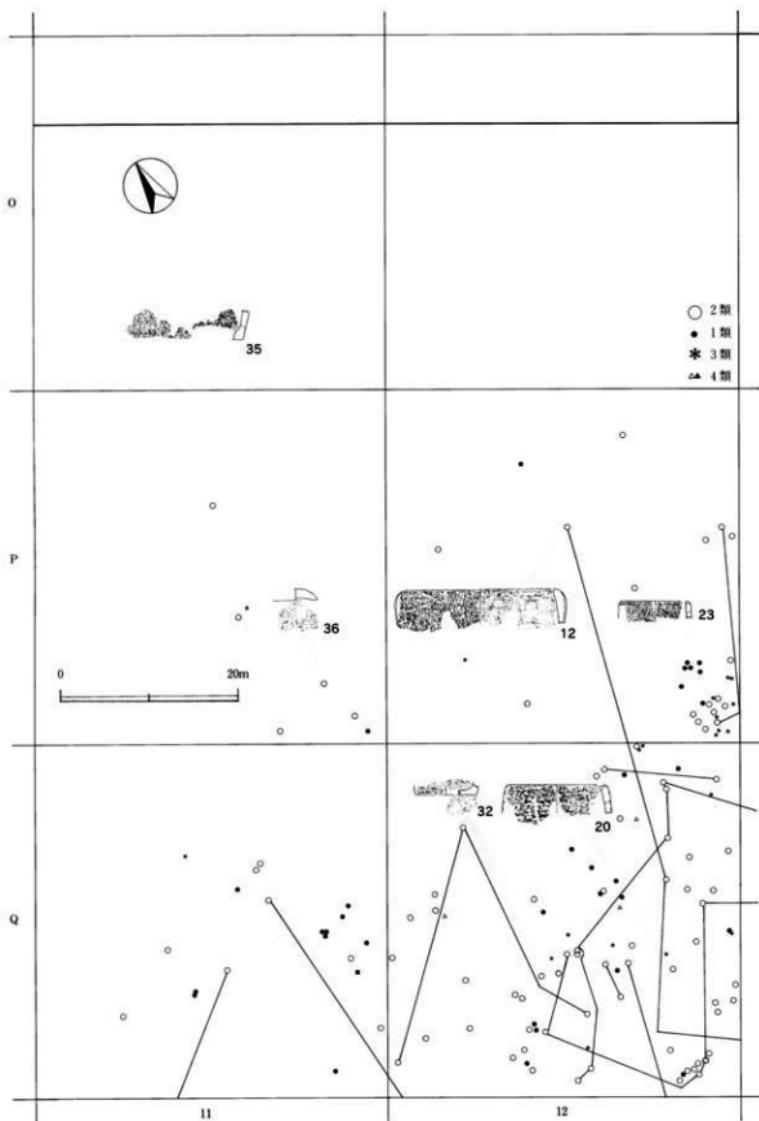
第22図 下剥峯式土器 2類出土状況図 2 (R・S・7・8区)



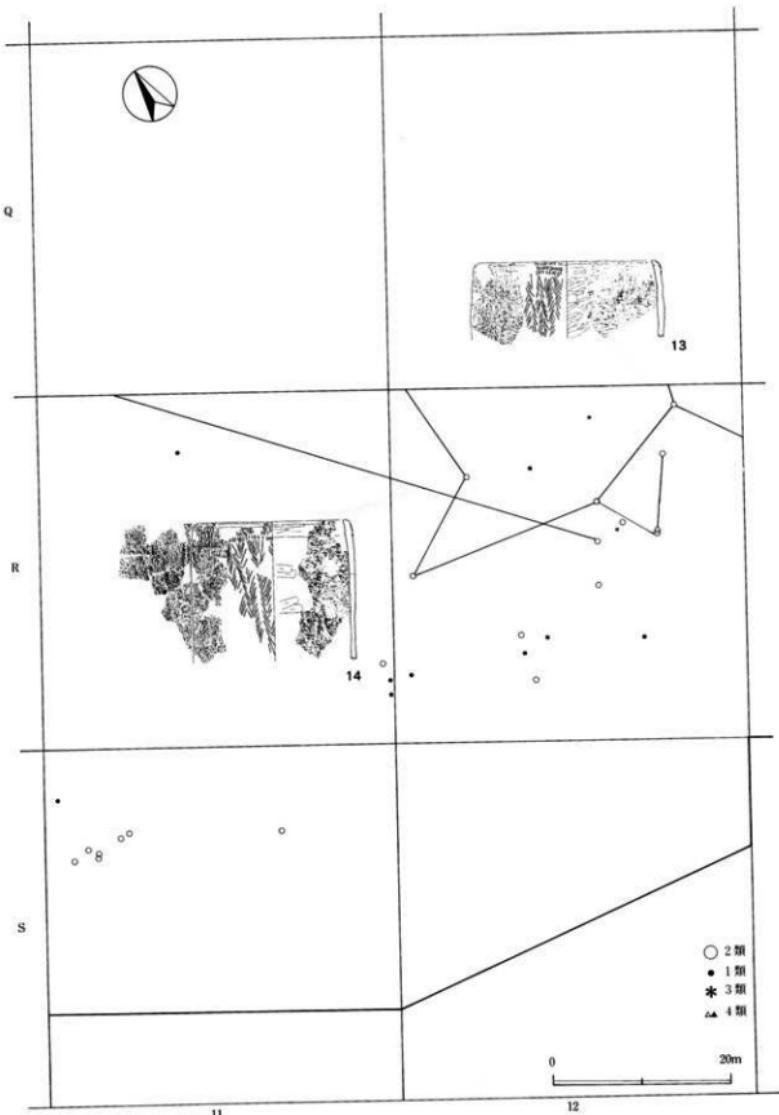
第23図 下剥峯式土器 2類出土状況図 3 (P・Q - 9・10区)



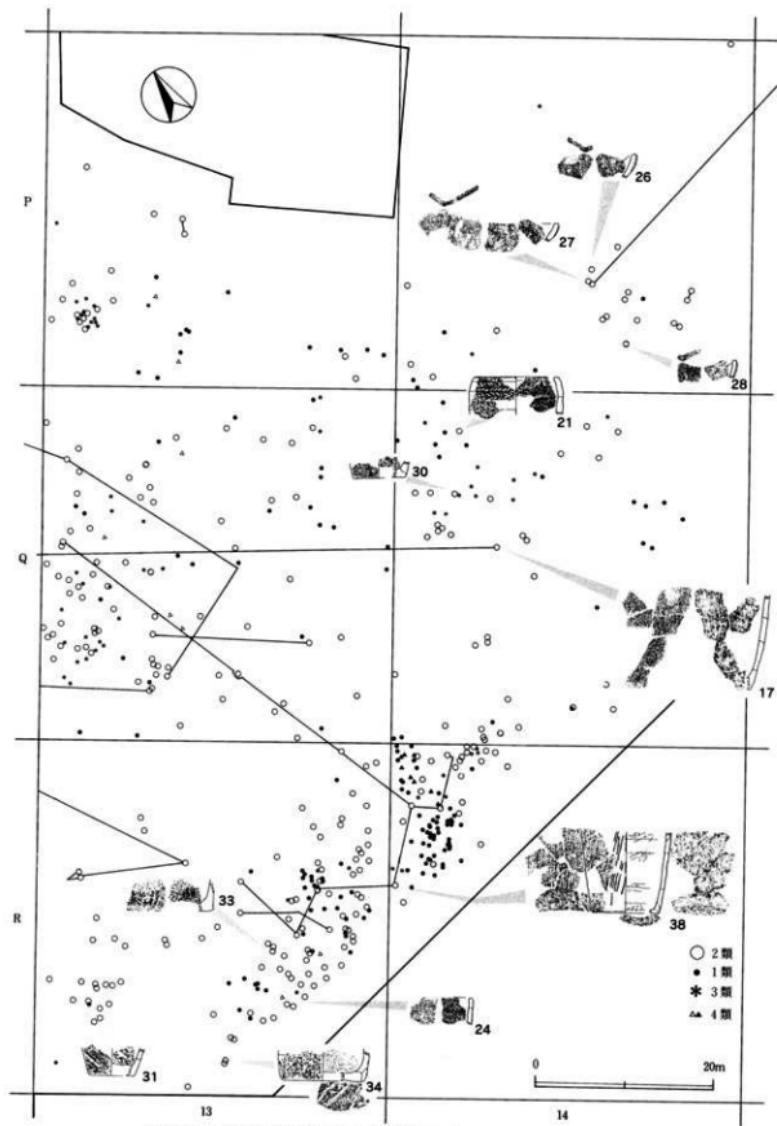
第24図 下剥峯式土器 2類出土状況図 4 (R・S-9・10区)



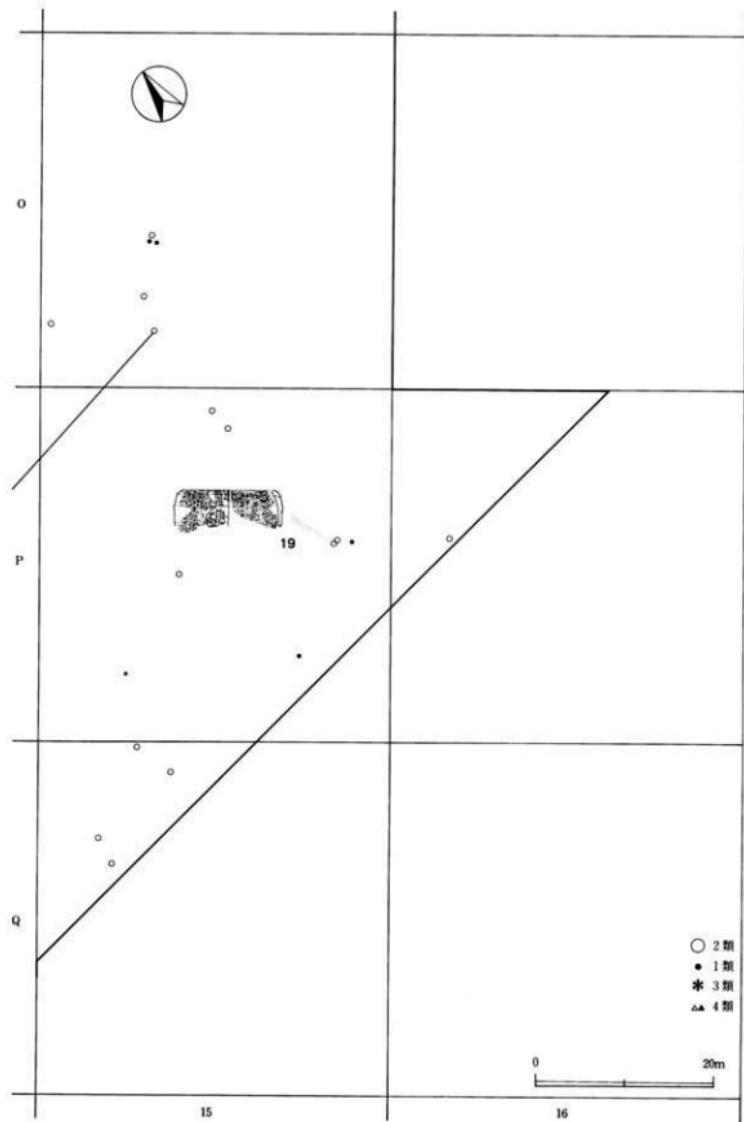
第25図 下剥峯式土器 2類出土状況図 5 (O・P・Q-11・12区)



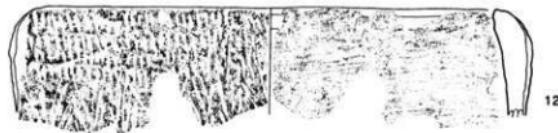
第26図 下剥峯式土器 2類出土状況図 (R・S-11・12区)



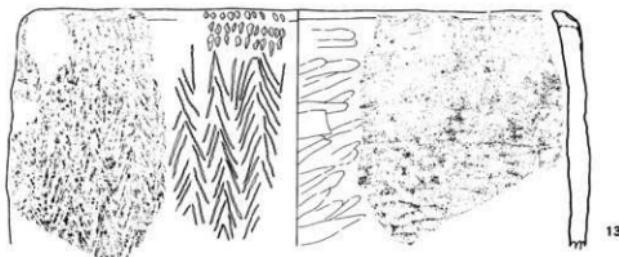
第27図 下剥峯式土器 2類出土状況図 7 (P・Q・R-13・14区)



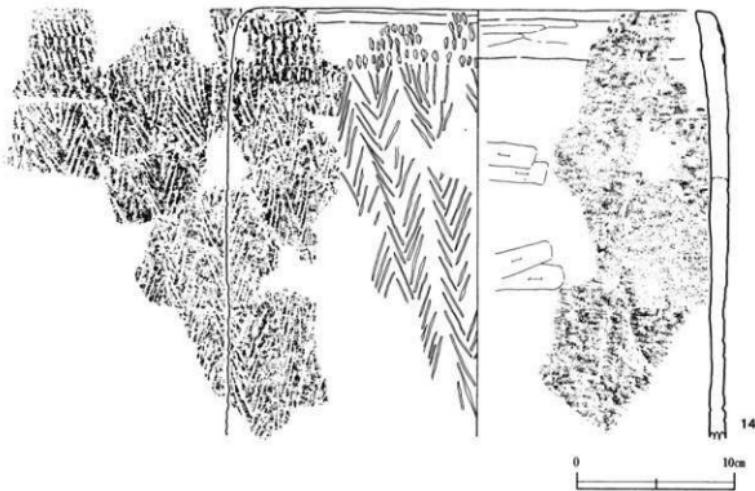
第28図 下剥塗式土器 2類出土状況図 8 (O・P・Q-15・16区)



12



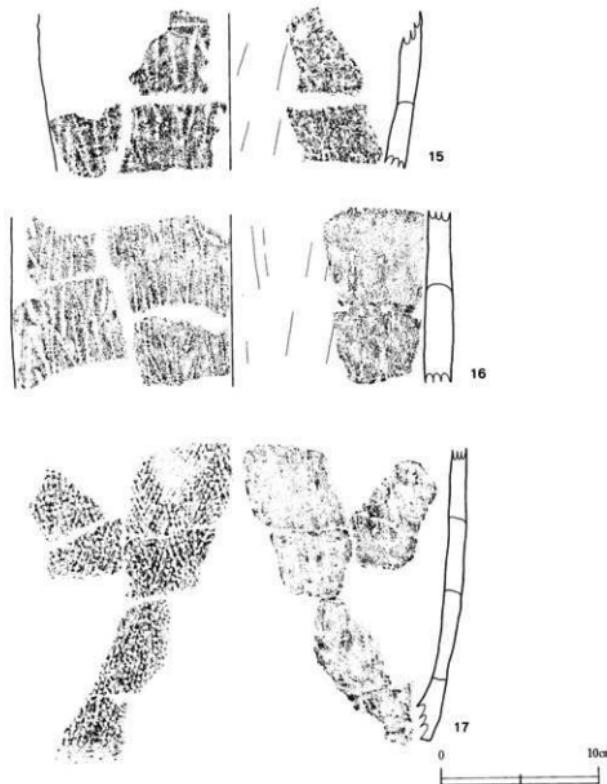
13



14

0 10cm

第29図 下剥峯式土器 2類実測図（1）



第30図 下剥峯式土器 2類実測図（2）

(p.34から続く)

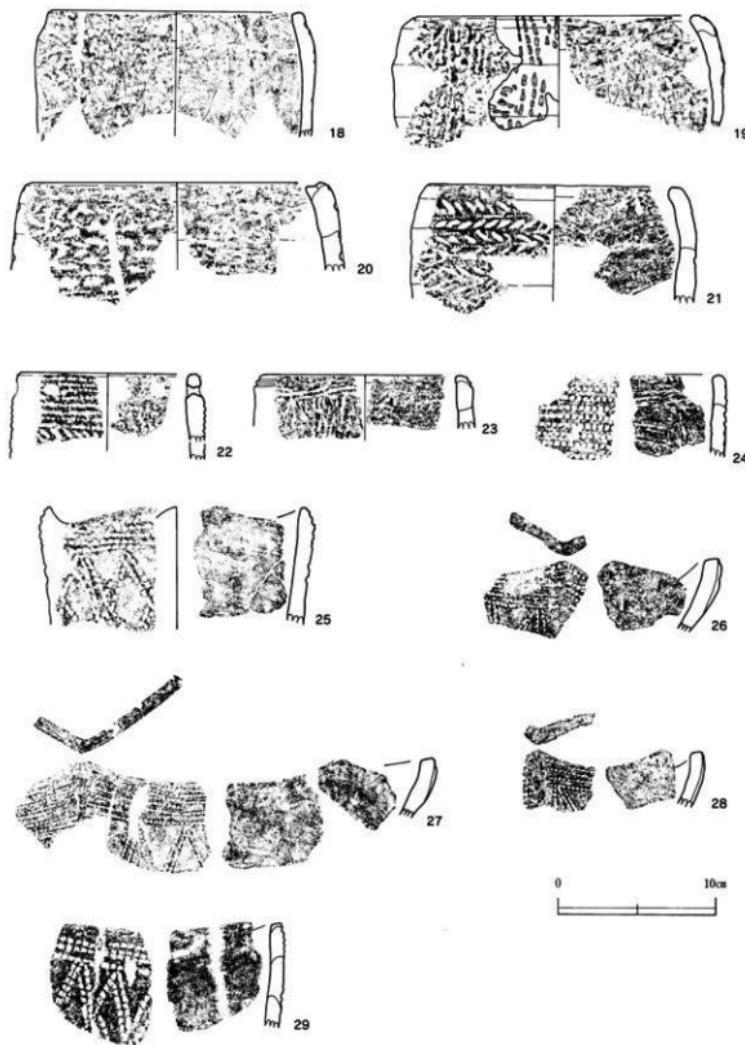
- ② Q-12区からQ-13区にかけての区域
- ③ Q-9区

の3箇所に集中区域があり、その周囲に散布地域がめぐる状況を概観できる。特に①(R-13・14区)の集中区域に属する土器と、②(Q-12・13区)の集中区域に属する土器とは接合関係にあることから、両集中区域は密接な関係にあったと推察できる。

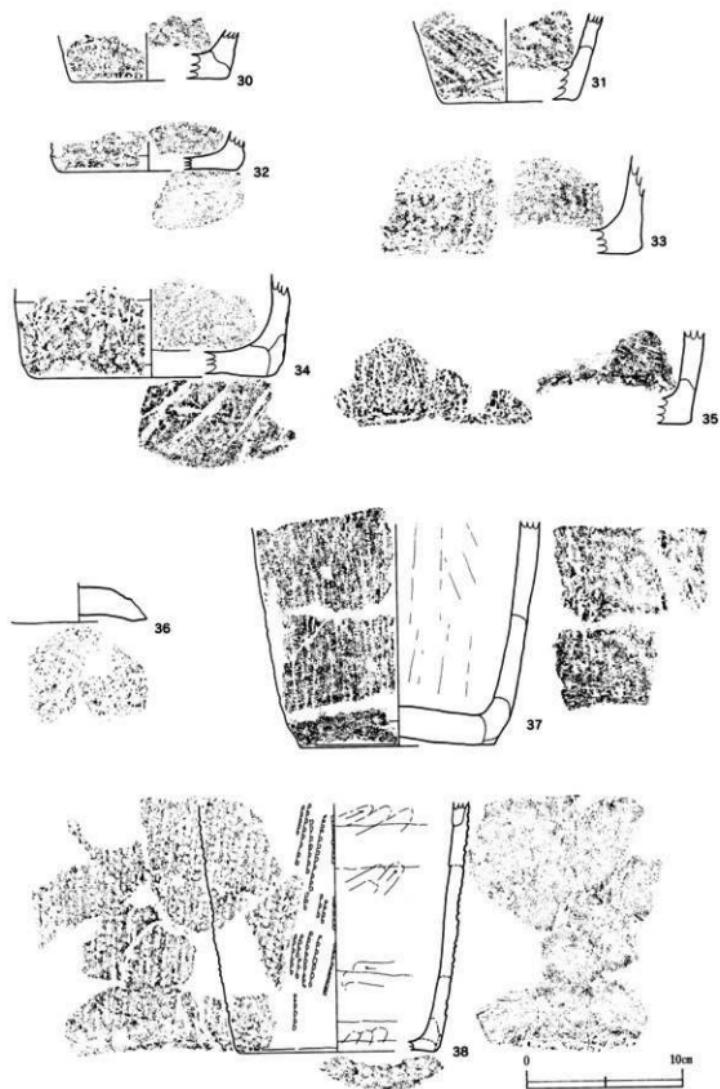
特に②(Q-12・13区)の集中区域に属する土器は、周囲の散布地域に属する多くの土器とも接合関

係にある。このことからこの区域は、当時の人々が生活する場であったと考えられる。

さて最後に、(34)の土器と(36)の土器に注目する。(34)の底部土器は、底面外面に板状工具を用いて切り離した痕跡が観察できる、珍しい土器である。一方、(36)の土器は、底面に穿孔が見られる底部土器である。煮炊きの用途を想定している深鉢形土器の底面に、穿孔しても土器を使用したこととは、土器が本来もつ用途を捨て、異なる用途への転換を意味するものであり、注目できる土器である。



第31図 下剥峯式土器2類実測図（3）



第32図 下剥峯式土器 2類実測図 (4)

下副式十器 2 類十器觀察表

②-3 第2群（下剥臺式土器）3類

(第33回～第39回)

i) 概要

第2群3類に属すると判断した土器片は、88点出土し、そのうち6個体・37点を資料化した。

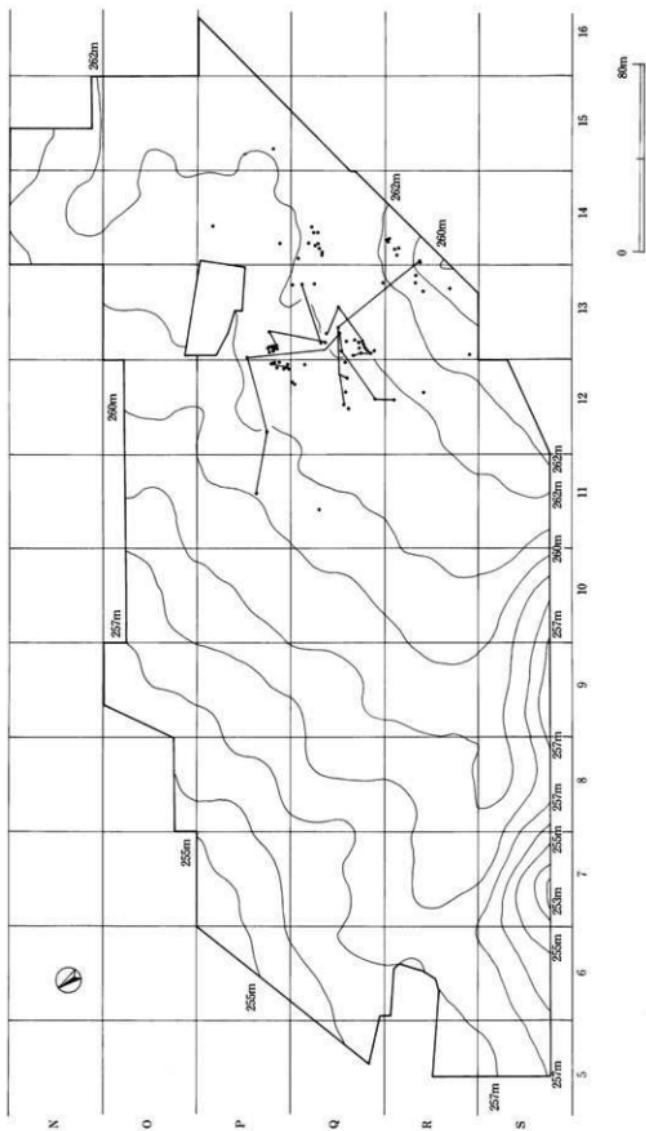
第2群3類に属する土器の器形的特徴は次のとおりである。まず、口縁部については第2群の口縁部の基本的器形と概ね一致する。すなわち口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内湾し、口唇部は内傾する平坦面を作出する、という特徴を擧げることができる。次に、胴部形態では直線的にそばまる土器(41・43・44)と、弯曲しながらそばまる土器(42)

との2つのタイプに分けることが可能である。さらに底部形態では上野原遺跡第10地点においては、明瞭に第2群3類に属すると判断できる底部は出土しなかったものの、平底を呈すると考えられる。

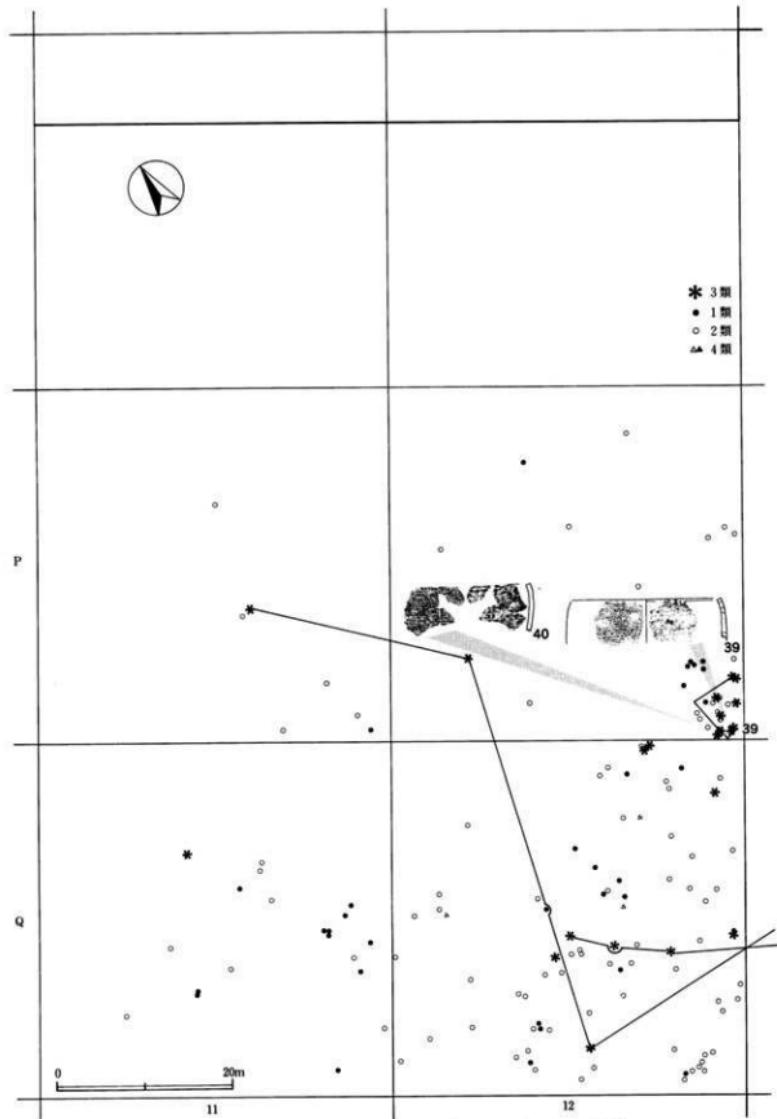
以上のことから第2群3類の土器器形は、下剥率式土器の基本的器形に近いと考えられる。

さて、第2群3類に属する土器の施文方法の特徴としては、口縁（上端）部から胴部上半には、ヘラ状工具を用いて、横位方向に施す羽状文と横位方向に3~4条巡らした連続押し引き文とを交互に施文する点を擧げることができる（第38図39~41）。

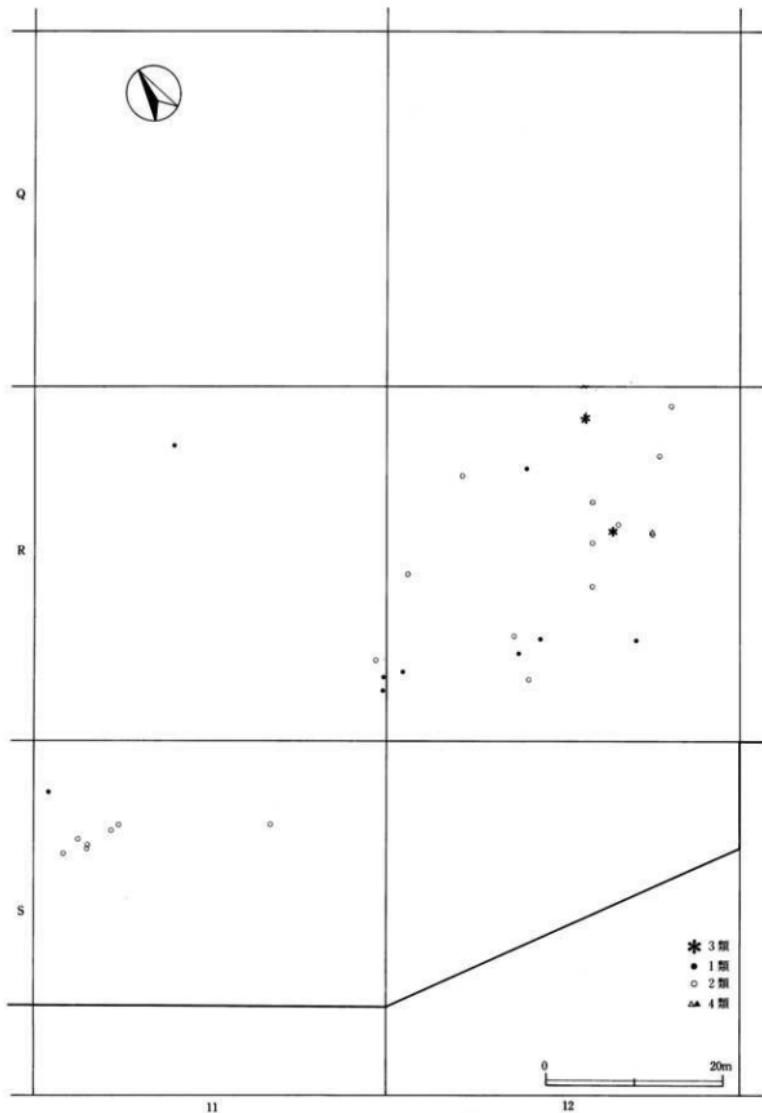
(p.54へ続く)



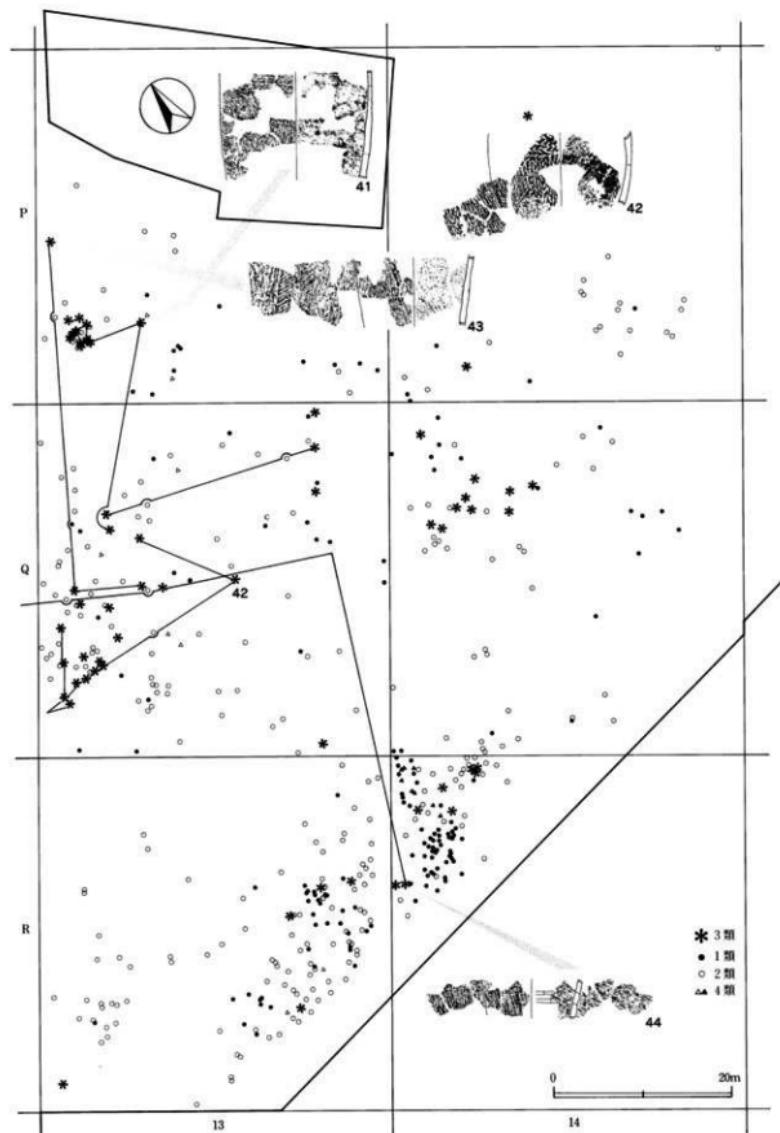
第33圖 下刷筆式土器3類出土狀況全體圖



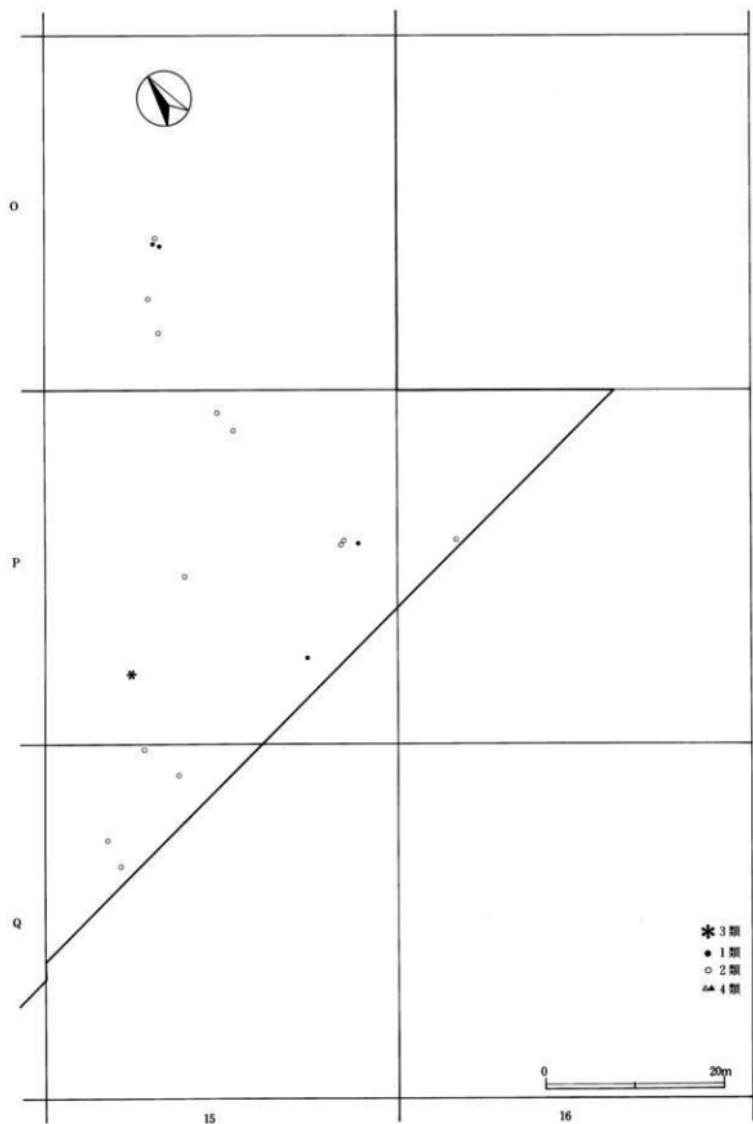
第34図 下剥峯式土器3類出土状況図1 (O・P・Q-11・12区)



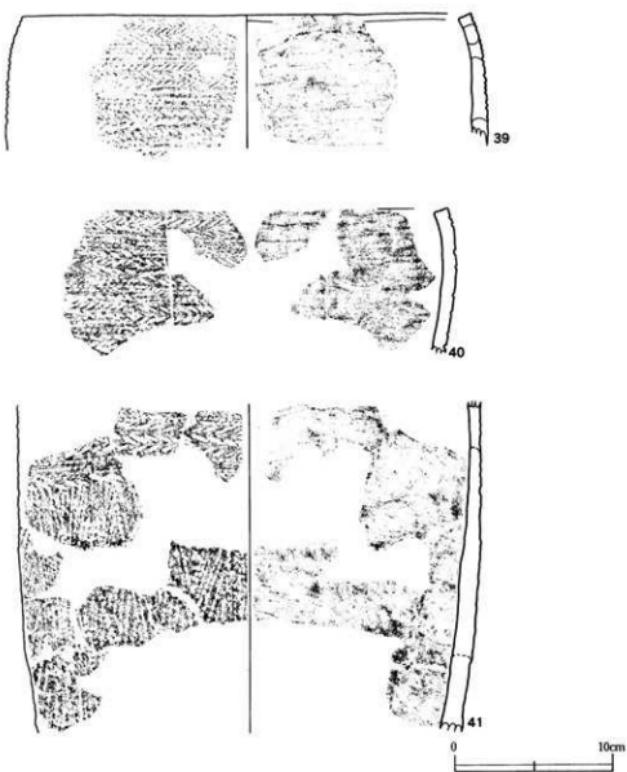
第35図 下剥峯式土器 3類出土状況図 2 (R・S-11・12区)



第36図 下剥塗式土器 3類出土状況図 3 (P・Q・R-13・14区)



第37図 下剥峯式土器 3類出土状況図 4 (O・P・Q-15・16区)



第38図 下割峯式土器 3類実測図（1）

(p.48から続く)

さらに脣部下半には、貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）により縦位方向に羽状文を施文する部分と、ヘラ状工具を用いて縦位方向に羽状文や連続押し引き文を施文する部分とを、交互に施しながら脣部全面に横位方向に施文している点を挙げることができる（第38図41、第39図42～44）。

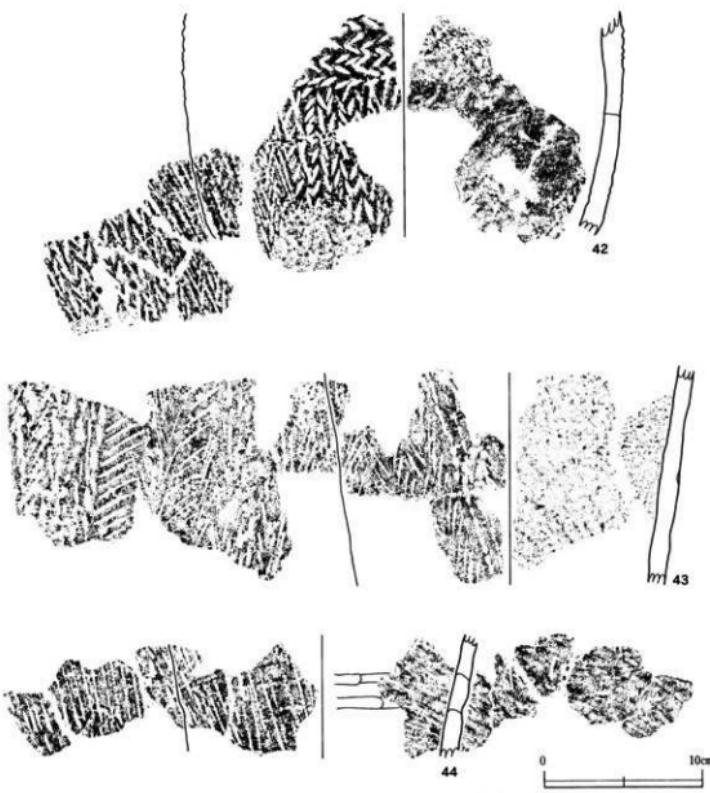
この第2群3類の文様構成は非常に珍しいタイプの土器である。

さて、第2群3類の土器胎土中に含まれる鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成される土器と、主に

石英・長石・クロウンモで構成される土器とがあつた。しかし、土器胎土による分類と、器形による分類との間には、相関関係は見られなかつた。

また、土器の調整方法は外器面ではナデ調整を行うことが主流であるが、中には木製工具を使用したと考えられるハケ目調整の後にナデ調整を行う土器も見られた。内器面ではミガキ調整やケズリ調整を行う土器も見られたが、ハケ目調整の後にナデ調整を行う土器が主流であった。

(p.55へ続く)



第39図 下剥峯式土器3類実測図(2)

(p.54から続く)

さて、土器の色調は外器面、内器面共に茶褐色や暗茶褐色が主流であった。

ところで、第2群3類に属する土器の出土状況全体図(第33図、第36図)を概観すると、

- ① P-13区南側を中心とする区域
- ② Q-13区南側を中心とする区域

の2箇所に集中区域が見られる。この双方の集中区域に属する土器は、その周辺に散布する土器と接合関係にある。のことからこの両集中区域は、当時の人々が生活する場であった、と言えよう。

ii) 小結

第2群3類に属する土器は、次の特徴を指摘できる。

- ① 第2群3類に属する土器器形は、ほぼ下剥峯式土器の範疇に属する器形である。
- ② 文様構成では、口縁部から胴部上半部の文様帶には横位方向の施文を、胴部下半の文様帶には全面にわたり縱位方向の施文を、施す点は下剥峯式土器の範疇にはいる。

(p.56へ続く)

下剥峯式土器3類土器観察表

器形 番号	器名 番号	径寸 (mm)	内縁形 状態	縁幅 (mm)	縁構 造	縁部 形	底部 形	施文 具	施文 部位	外縁部 特徴	色調		備考	
											外底面	内底面		
39	P-1-2 2713	152	見 底体	口縁-側面	○	○	○	無	無	ヨコハターナグ	ケズワーナグ	暗茶褐色-深褐色	茶褐色-黒褐色	口縫径2.8cm
	P-1-2 2651													
40	P-1-2 2715	150	見 底体	口縁-側面	○	○	○	無	無	ナグ	ミダカ、ハケーナグ	茶褐色-黒褐色	茶褐色-黒褐色	
	P-1-2 2527													
41	P-1-3 277	151												
	P-1-3 1331													
	P-1-3 1320													
	P-1-3 1321													
	P-1-3 1327													
42	P-1-3 1336	146	見 底体	側面	○	○	○	無	無	ナグ	ハテーナグ	茶褐色-暗茶褐色	暗茶褐色-暗褐色	側縫径2.2cm
	T-1-3 1349													
	P-1-3 2648													
	P-1-3 2649													
	P-1-3 2650													
	Q-1-3 753													
43	Q-1-3 5712	151												
	Q-1-3 5713													
	Q-1-3 5692													
	Q-1-3 5752													
	Q-1-3 6067	150	見 底体	側面	○	○	○	無	無	ナグ	ヨコハターナグ	茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	側縫径2.4cm
	Q-1-3 6068													
	Q-1-3 6069													
	Q-1-3 6070													
	Q-1-3 11099													
44	P-1-2 1253	151												
	P-1-2 1254													
	P-1-2 1255													
	P-1-2 1256													
	P-1-2 1257													
	P-1-2 1258													
	P-1-2 1259													
	P-1-2 1260													
	P-1-2 1261													
	P-1-2 1262													
	P-1-2 1263													
	P-1-2 1264													
	P-1-2 1265													
	P-1-2 1266													
	P-1-2 1267													
	P-1-2 1268													
	P-1-2 1269													
	P-1-2 1270													
	P-1-2 1271													
	P-1-2 1272													
	P-1-2 1273	150	見 底体	側面	○	○	○	無	無	ハターナグ	ハテーナグ	茶褐色-暗褐色	茶褐色-暗褐色	側縫径2.5cm
	P-1-2 1274													
	P-1-2 1275													
	R-1-4 1117													

(p.55から続く)

以上、2点のことから第2群3類に属する土器群を下剥峯式土器の範疇として分類した。しかし、以下の点は下剥峯式土器の範疇とは異なる。

- ③ 第2群の基本的施文工具は貝殻を使用するのに対して、第2群3類に属する土器は、ヘラ状工具と貝殻とを使用する。

この点については、①の点と②の点とをより重視した結果、第2群3類の土器群は下剥峯式土器の範疇にはいる、と判断した。

さらにこの③の点は、第2群2類と共に通する要素である。しかし、施文具と施文部位との関係に注目すると、第2群2類に属する土器ではヘラ状工具の使用が口縁部文様帶に限られる。それに対して、第2群3類に属する土器ではヘラ状工具の使用が下位の文様帶にまで及んでいる。この違いは重要な違いであると認識する。

②-4 第2群(下剥峯式土器)4類

(第40図～第43図)

i) 概要

第2群4類に属すると判断した土器片は、20点出土し、そのうち2個体・12点を資料化した。

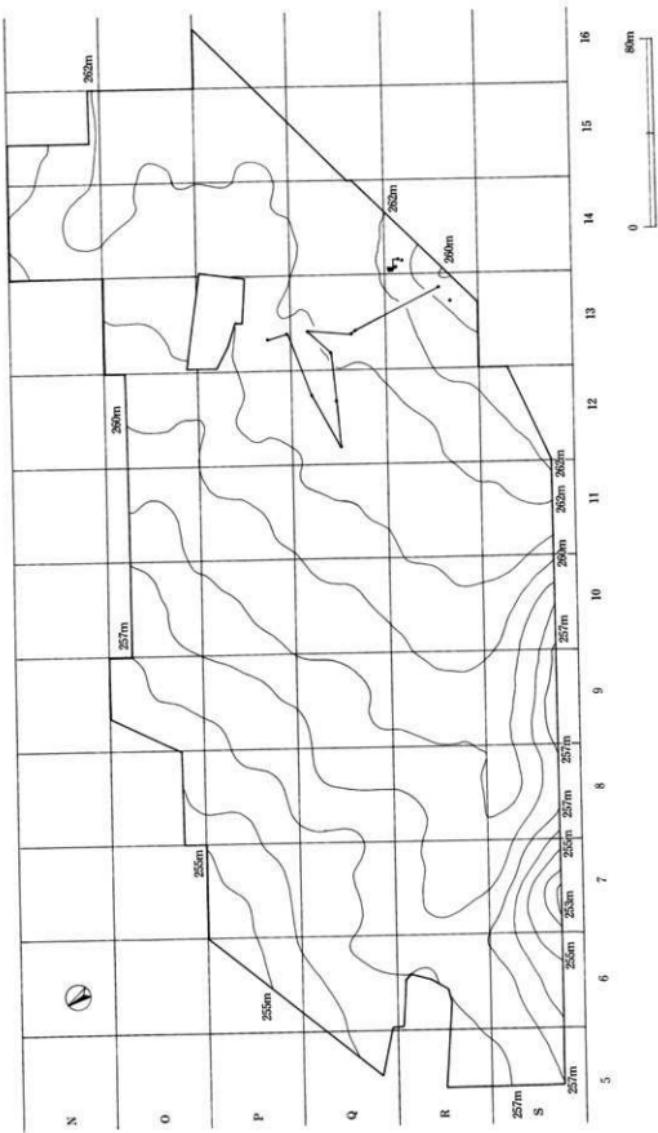
第2群4類に属する土器の器形的特徴としては、口縁形態は平口縁を呈する。(45)は口縁部が若干内湾し、口縁上端部外面はほぼ45°の角度で丸く削られ、口縁部の内湾形態がさらに強調されている。胴部は直線的にすぼまる器形を呈する。一方、(46)は口縁部はほぼ直行し口唇部は水平な平坦面を作出する。胴部は弯曲しながらすぼまる。

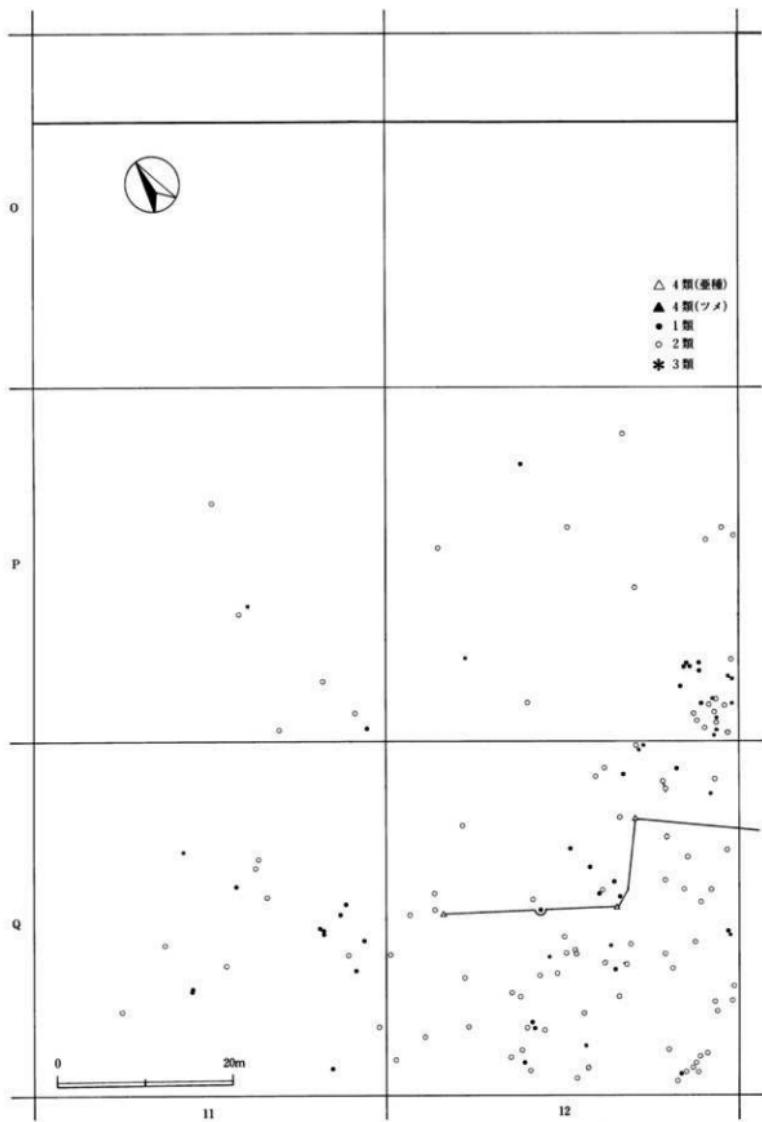
施文の特徴としては、先述したように、ヘラ状工具を用いて口縁(上端)部から胴部全面にかけて、縱位方向に押し引き文を施したり、横位方向に鋸歯文を施す点を挙げることができる。

以上の特徴は、施文具の種類を除いて、第2群1類の特徴と同様の特徴である。従って本類は、第2群1類の亜種と考えることが可能であるが、施文具の違いは属性上大きな違いであり、新たな類をたてた。

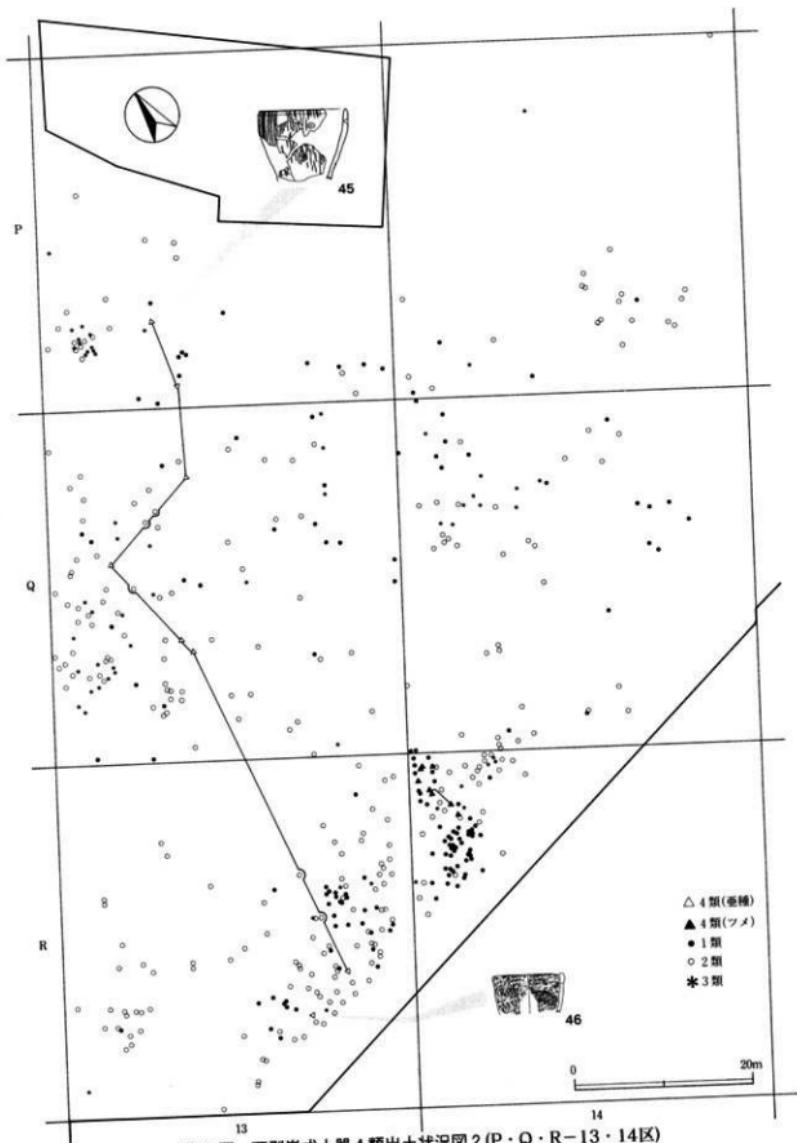
本類について類例の増加を待ちたい。

第40圖 下刷篆式土器 4 類出土狀況全體圖

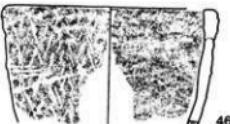
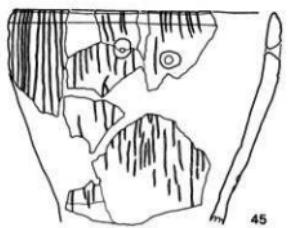




第41図 下剥峯式土器 4類出土状況図1 (P・Q-11・12区)



第42図 下剥峯式土器4類出土状況図2(P・Q・R・13・14区)



第43図 下剥峯式土器 4類実測図

③ 第3群 桑ノ丸式土器（第44図～第56図）

i) 概要

第3群に属すると判断した土器片は、196点出土し、そのうち23個体・72点を資料化した。

第3群は、「器形は口縁部が内窓し、口縁形態は平口縁を呈し、口唇部は内傾し、底部は平底を呈し、胴部に移行するにしたがってかなりふくらみをもつ土器である。施文は、貝殻状の施文具で櫛描状に沈線文を施す」と、定義されている、新東見一氏により設定された土器である。鹿児島県姶良郡溝辺町に所在する桑ノ丸遺跡から出土した第3類土器を標識とする土器である。

本類に分類した土器の器形的特徴は、概ね定義した範囲に入る土器群である。一方、本報告では文様構成の違いを種類の豊富さと捉え、特に細分を行わなかった。

しかし、概ね以下の3類に分けることができる。

a：施文的特徴として、口縁部から胴部にかけて全面に施文し、施文具として貝殻腹縁部を使用し、まず口縁端部に右下がりの押し引き文を横位方向にある程度の回数にわたり施文した後に、そのまま左下がりの押し引き文を横位方向に施文することで、見かけ上、羽状文を施す土器である（第53図1～7）。

b：施文的特徴として、口縁部から胴部にかけて全面に施文し、施文具として貝殻腹縁部を使用し、施文は底部側から口縁部側へ押し引く土器である（第54図8～13）。この類に属する土器の器形的特徴として、口唇部が内傾するという基本的器形は共通するが、口縁部が内窓する土器の他に、外反する土器や直行する土器などがある。

c：施文的特徴では口縁部から胴部にかけて、貝殻腹縁部を使用して、口縁部側から底部側に向けて流水状に押し引く土器である（第55図14～18）。器形的特徴は、基本的器形の土器である。

以上の3類に分類できた。

さて、第3群の土器胎土中の鉱物は、概ね石英・長石・角閃石で構成されており、クロウンモを含む土器はわずかであった。また、土器の調整方法は外器面はナデ調整が主流であった。一方、内器面はミ

ガキ調整に近い丁寧なナデ調整が主流であったが、ケズリ調整を行った後にナデ調整を行う土器や、木製工具を使用した横方向のハケ目調整を行った後に丁寧なナデ調整を行う土器も、見受けられた。また、土器の色調は外器面では茶褐色を、内器面では暗茶褐色を呈する土器が主流であった。

ところで、出土状況全体図を概観すると、第3群土器のうちa類土器とc類土器とは、主に標高260mから258mにかけての、R・S-9区を中心とする発掘区画南側の区域に集中して出土する傾向がある（第44～51図参照）。この区域は、北向きの緩傾斜地の中程の区域で、台地が鹿児島湾（錦江湾）に落ち込む南側急斜面の、縁辺部にあたる区域である。

一方、b類土器は標高262mの標高が一番高いデラ地西側にあたる、O・P-15区を中心とする区域に集中する傾向が見られた（第52図参照）。

さらに重要なことは、a類土器やc類土器が集中して出土した地域は、第6群の山形押型文土器や第7群の楕円押型文土器などの土器群が集中して出土した地域と重なっていることである。

その一方で、b類土器が集中して出土した地域には早期中葉の時期に属する土器がほとんど出土しておらず、他の土器型式とは分布域を異にしている、特異な土器群であることが指摘できる。

ii) 小結

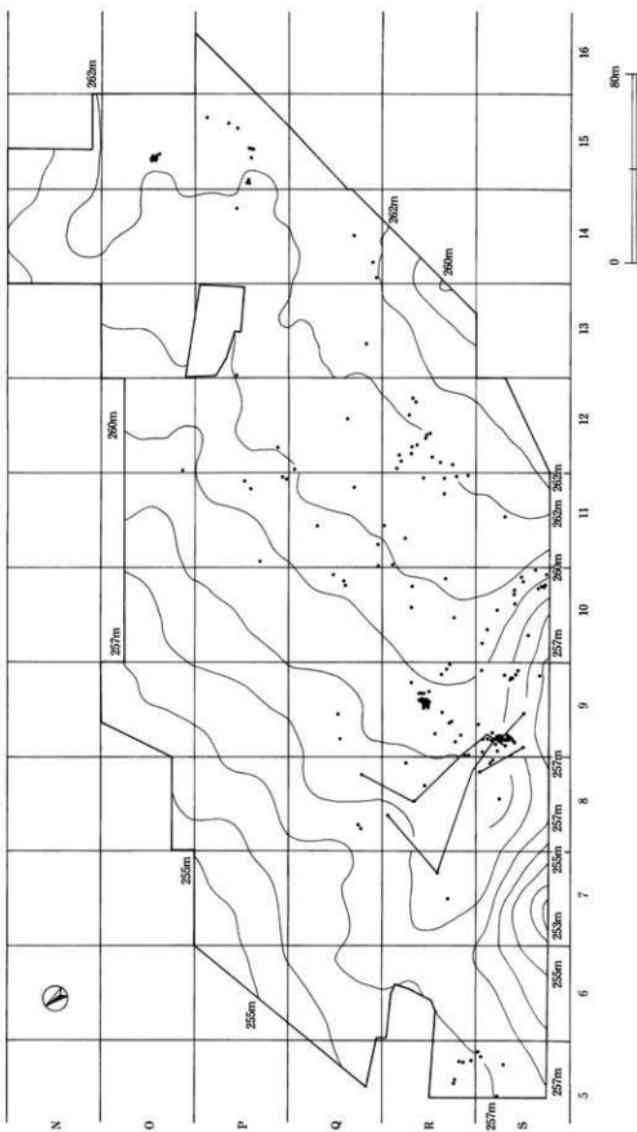
第3群に属する土器は、次の特徴を指摘できる。

① 第3群は、貝殻などの施文具で、櫛状に押し引いて施文する土器である。文様構成から羽状文を施すa類土器と、搔き上げによるスタレ状の文様を施すb類土器と、そして流水状の文様を施すc類土器とに、分けられる。

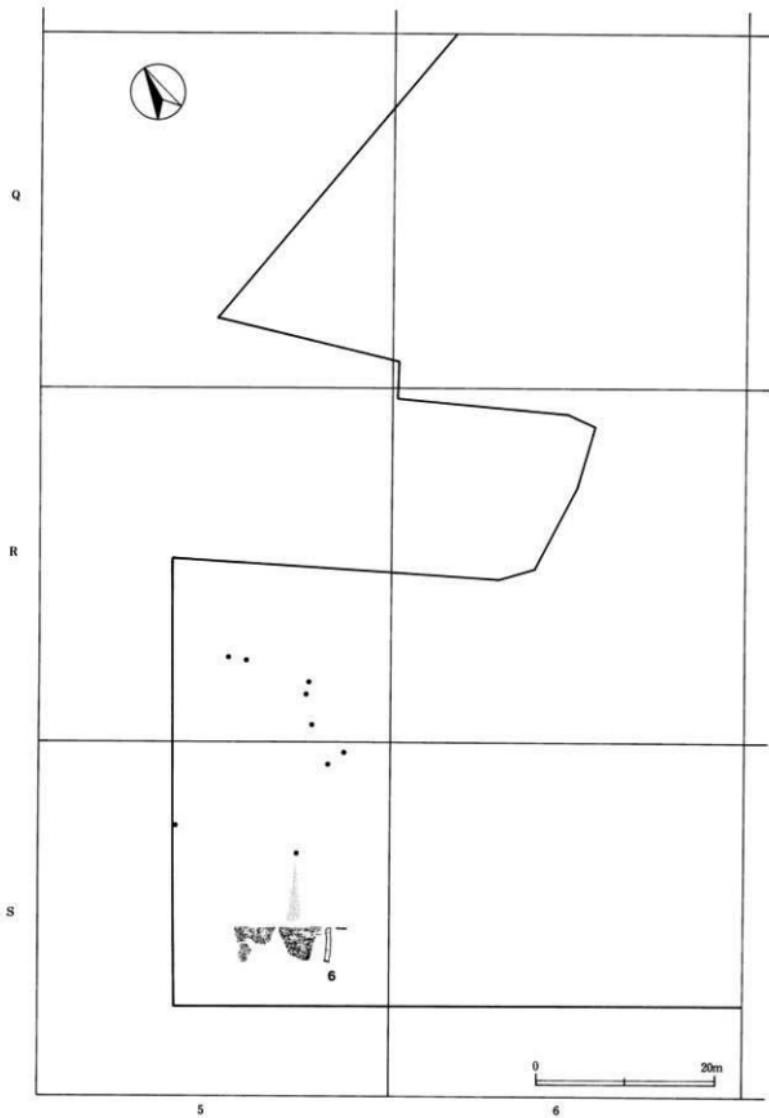
② 第3群土器の出土分布の状況から、

- ・ a類土器やc類土器を使用した人々は、主に発掘区画南側のR・S-9区を中心とする区域に生活の場を設けていたこと、
- ・ b類土器を使用した人々は、主に発掘区画西側のO・P-15区を中心とする区域に生活の場を設けていたこと、

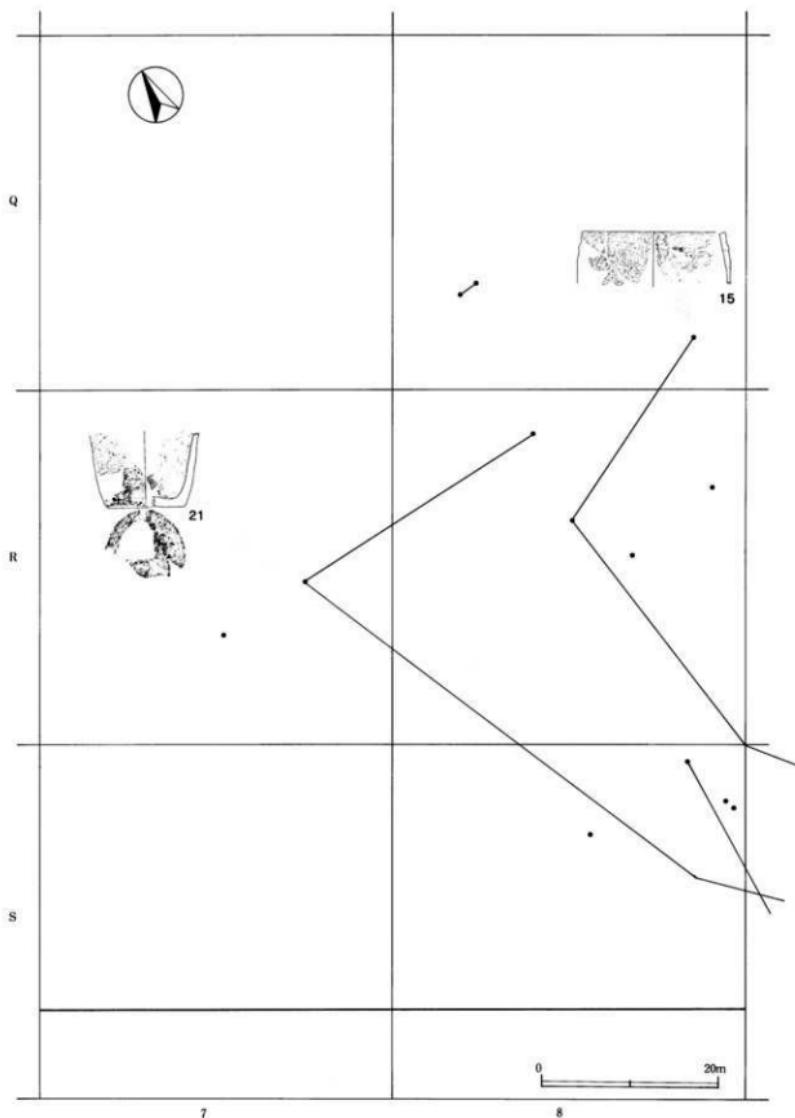
が想定できることをこの項では指摘しておく。



第44図 桑ノ丸式土器出土状況全図



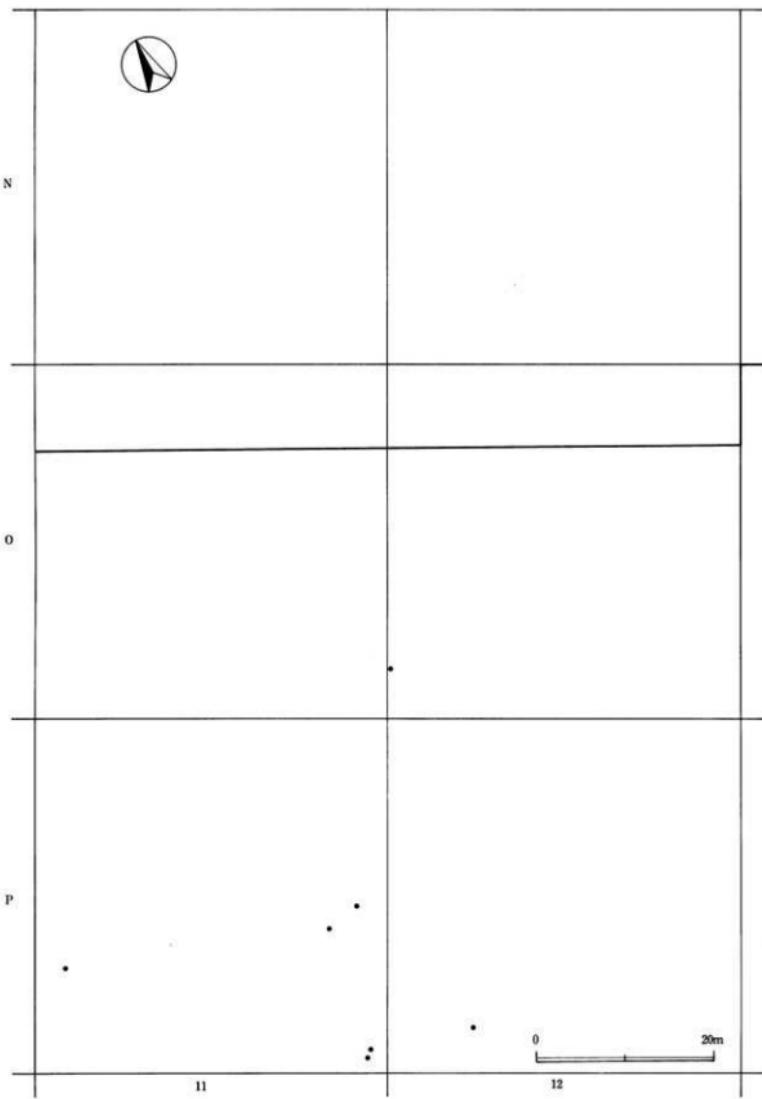
第45図 桑ノ丸式土器出土状況図1 (Q・R・S・S-5・S-6区)



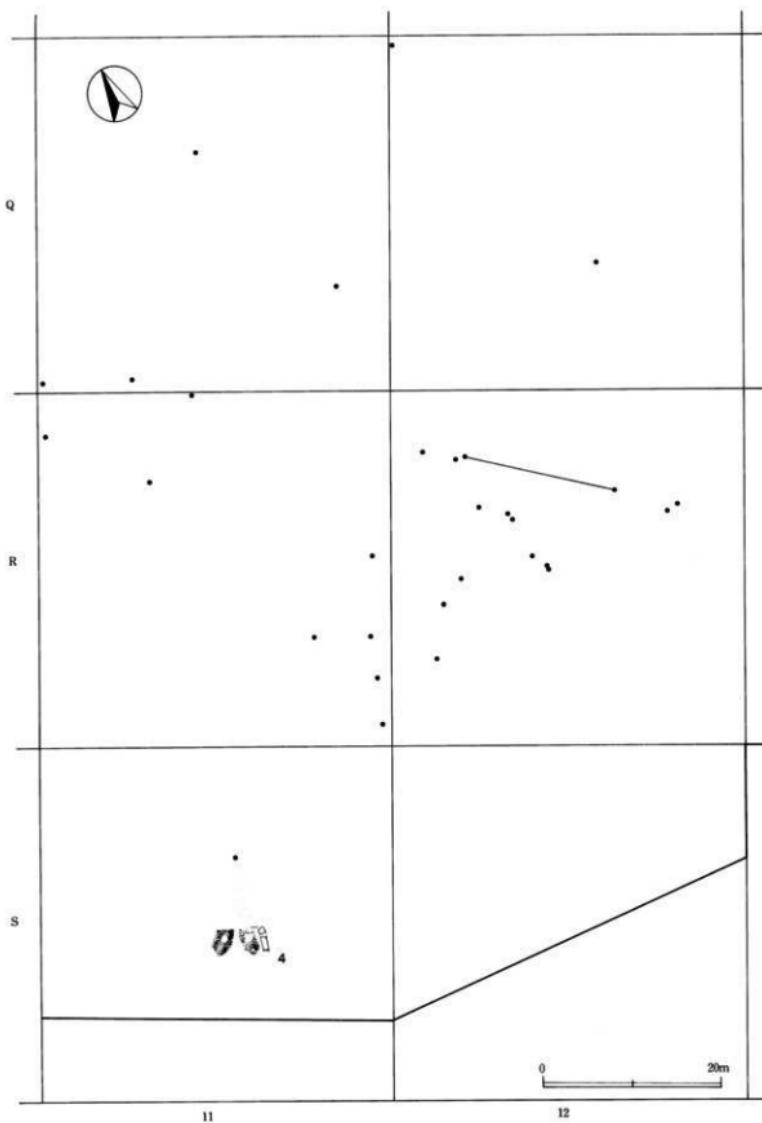
第46図 桑ノ丸式土器出土状況図2(Q・R・S-7・8区)



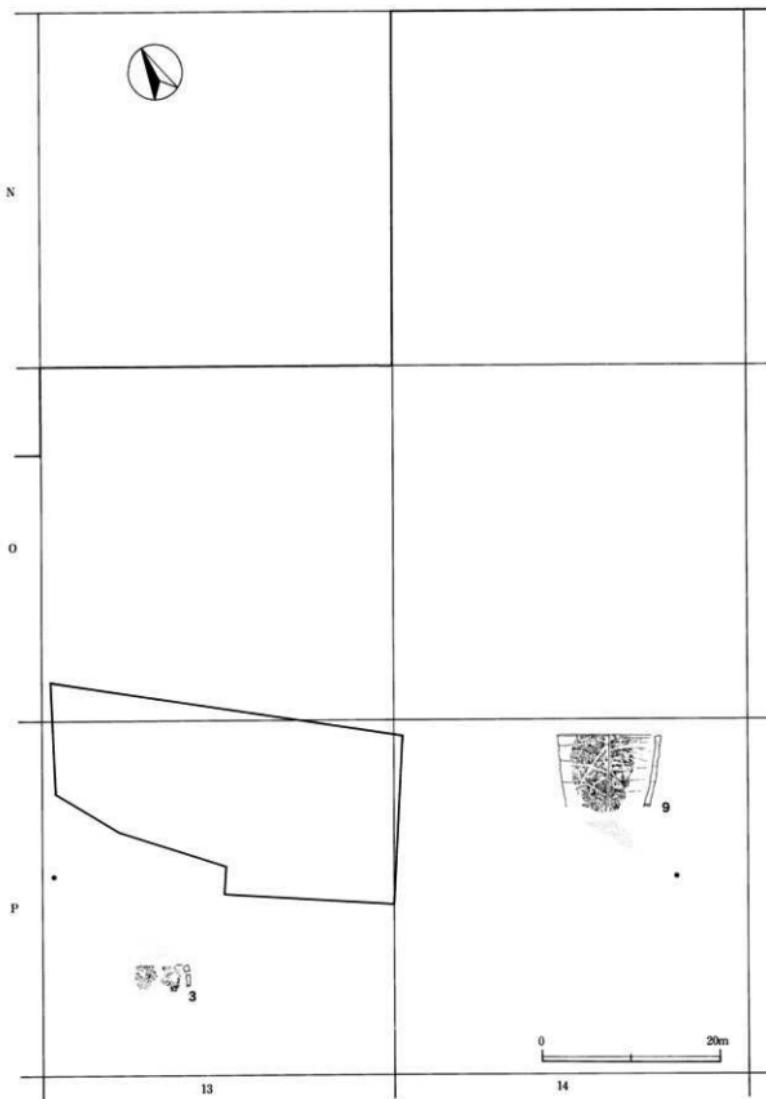
第47図 桑ノ丸式土器出土状況図3 (Q・R・S-9・10区)



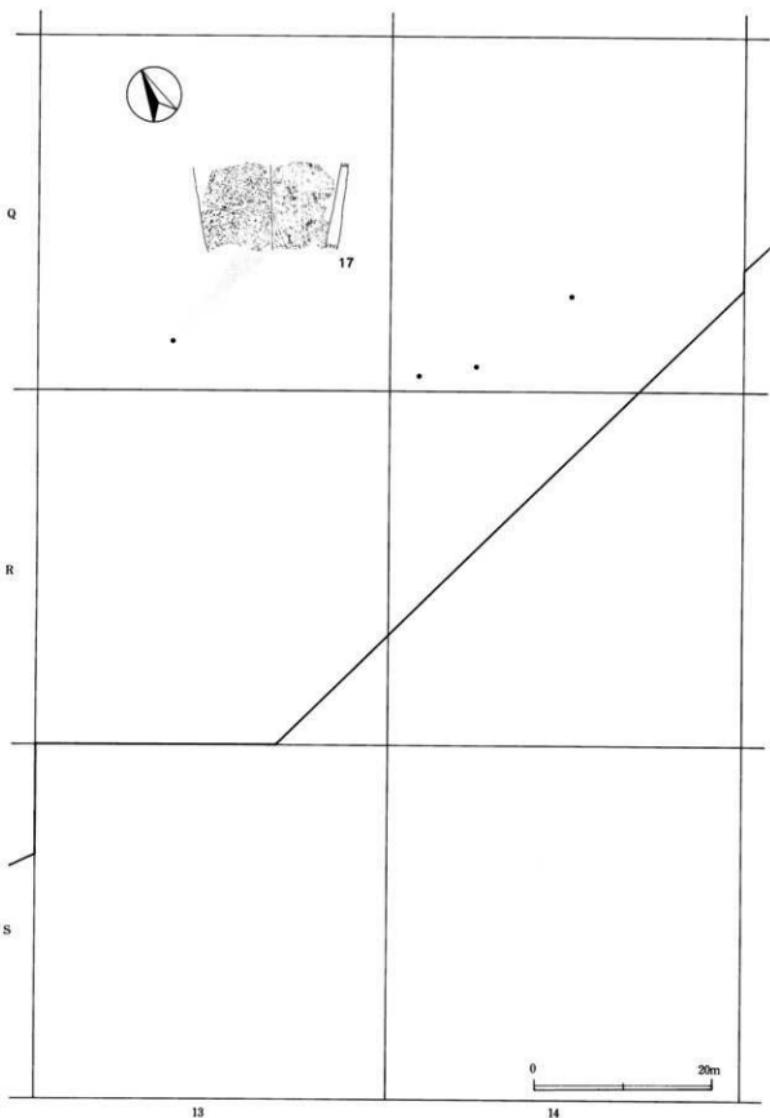
第48図 桑ノ丸式土器出土状況図 4 (N・O・P-11・12区)



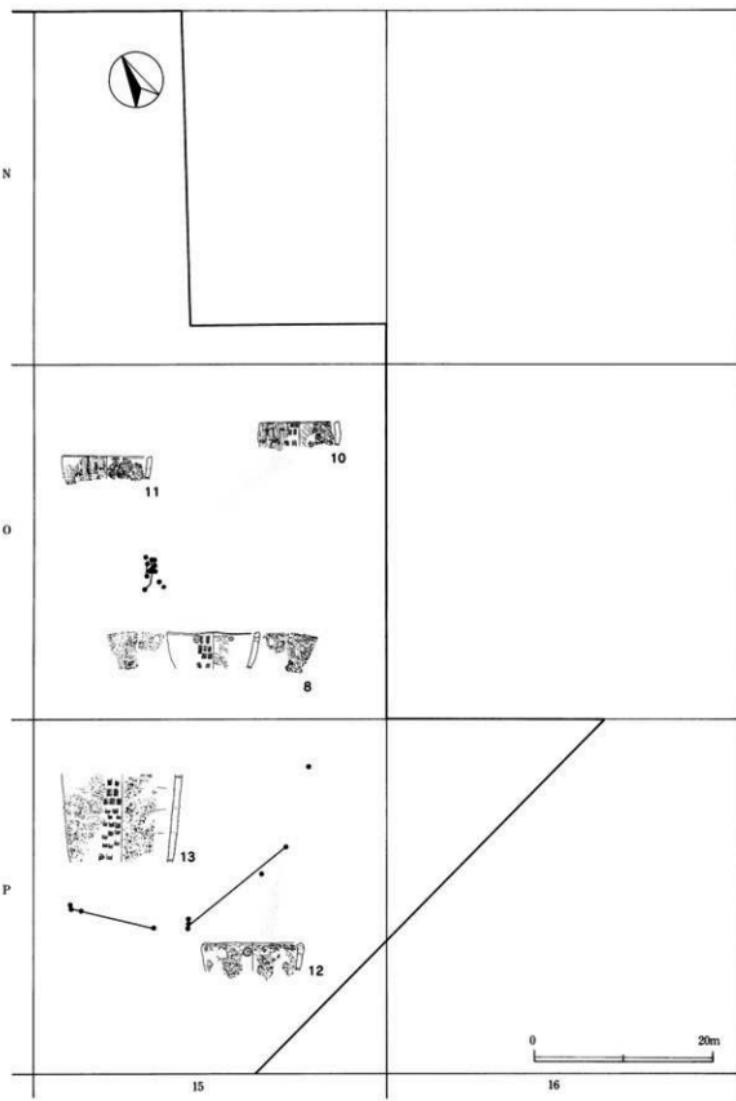
第49図 桑ノ丸式土器出土状況図5 (Q・R・S-11・12区)



第50図 桑ノ丸式土器出土状況図 6 (N・O・P-13・14区)



第51図 桑ノ丸式土器出土状況図7 (Q・R・S-13・14区)



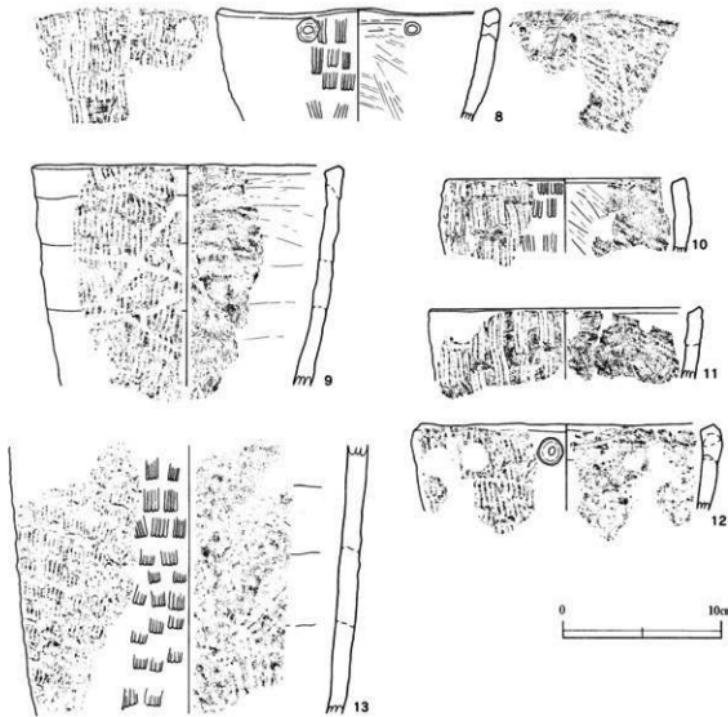
第52図 桑ノ丸式土器出土状況図8 (N・O・P-15・16区)



第53図 桑ノ丸式土器実測図（1）

桑ノ丸式土器観察表（1）

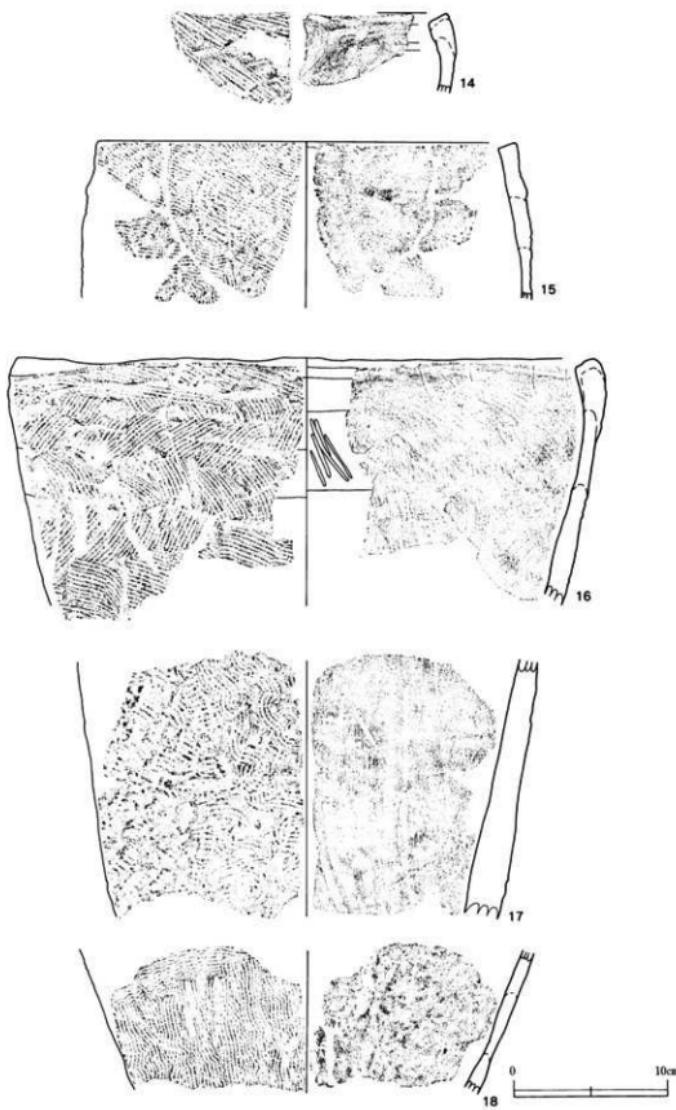
品種名	品種番号	由来	日本名	英訳名	量	母株	父株	株上			内蔵部	内蔵部	外観部	外観部	備考	
								高さ	葉色	花色						
新 53 36	1	Q-1-5	2199	103	V	深緑	口締	○	○	○	新梢を含む	ナゲ	ヨコハマ-丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	緑葉黒化	口締24.0cm
	2	E-1-1	2199	119	V	深緑	口締・新梢	○	○	○	新梢を含む	ナゲ	ヨコハマ-丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	暗緑化～若葉色	口締25.5cm ヌメ付近
	3	P-1-3	1520	103	V	深緑	口締	○	○	○	新梢を含む	ヨコハマ-ナゲ	ヨコハマ-丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	暗緑化～若葉色	口締26.0cm ヌメ付近
	4	S-1-1	221	102	V	深緑	口締	○	○	○	新梢を含む	ナゲ	ヨコハマ-丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	暗緑化	口締25.0cm
	5	S-1-3	221	102	V	深緑	口締	○	○	○	新梢を含む	ナゲ	ヨコハマ-丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	暗緑化	口締25.0cm
	6	S-1-5	221	102	V	深緑	口締	○	○	○	新梢を含む	ナゲ	ヨコハマ-丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	暗緑化	口締25.0cm
	7	S-1-9	4024	118	V	深緑	口締・新梢	○	○	○	新梢を含む	ナゲ	丁寧なナゲ	深緑色～暗緑色	暗緑化～若葉色	口締26.2cm 大木付近



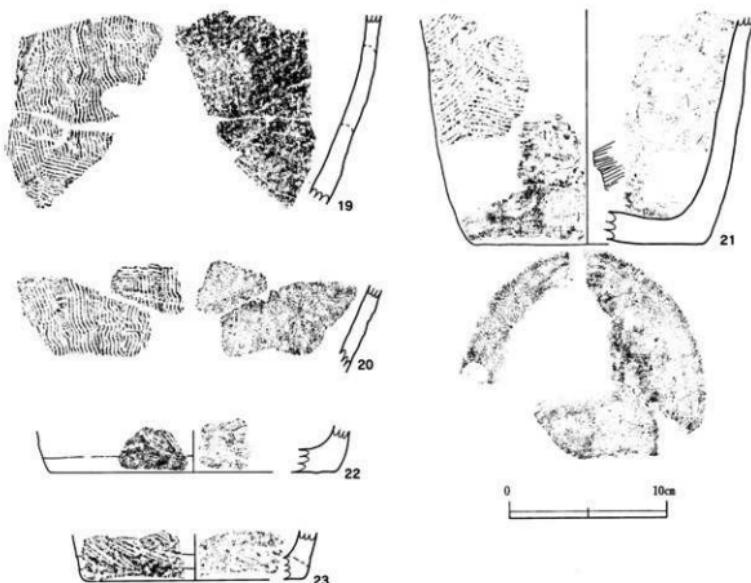
第54図 桑ノ丸式土器実測図（2）

桑ノ丸式土器観察表（2）

測定 番号	測定 番号	出土 地點	出 品 番 号	実測用 番号	幅 寸	高 さ	底径	施 土			内部面 調整	色 調		備 考
								右側	左側	底内側 クロラシキ		左側	内側面	
8	O-1.5	394		184	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・丁寧なナゲ 縫隙細か・系帯色 和褐色・黒褐色 スヌ付箋	口徑17.5cm 縫隙孔あり
	O-1.5	396		186	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・ナゲ 縫隙細か・系帯色 和褐色・黒褐色	口徑17.5cm 縫隙孔あり スヌ付箋
	Q-2.5	412												
9	P-1.4	2220194427	184	186	縫隙	13mm-18mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・ナゲ 縫隙細か・系帯色 和褐色・黄白色 地上番号220号集石		
	O-1.5	395		185	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・ナゲ 縫隙細か・系帯色 和褐色	口徑15.5cm
10	O-1.5	396		187	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・ナゲ 縫隙細か・系帯色	口徑15.5cm
	O-1.5	399		188	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・ナゲ 縫隙細か・系帯色 和褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり、スヌ付箋
11	O-1.5	400		189	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙・縫跡	ナゲ	ナズカ・ナゲ 縫隙細か・系帯色 和褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり、スヌ付箋
	P-1.5	112		120	見	縫隙	13mm	○	○	○	縫隙を含む	ナゲ	丁寧なナゲ 黄白色・黄褐色 和褐色・褐褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり
12	P-1.5	394		185	見	縫隙	縫隙	○	○	○	縫隙を含む	ナゾハナナゲ	ナゾハナナゲ 和褐色・黄褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり
	P-1.5	393		186	見	縫隙	縫隙	○	○	○	縫隙を含む	ナゲ	和褐色・黄褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり
13	P-1.5	399		185	見	縫隙	縫隙	○	○	○	縫隙を含む	ナゾハナナゲ	ナゾハナナゲ 和褐色・黄褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり
	P-1.5	1002		186	見	縫隙	縫隙	○	○	○	縫隙を含む	ナゲ	和褐色・黄褐色	口徑15.5cm 縫隙孔あり



第55図 桑ノ丸式土器実測図（3）



第56図 桑ノ丸式土器実測図（4）

桑ノ丸式土器観察表（3）

測定 番号	直径 cm	高さ cm	片側 厚さ mm	実測径 mm	量 目	基盤 種類	底径 mm	地 土			外表面 調査	内表面 調査	色 調	備考
								石英	長石	角閃石	クワウンモ	砂糖		
14	S - 0.9	696	1	696	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
	R - 0.8	2163	1	2163	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
15	S - 0.8	1020	2	1020	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	口徑27.3cm
	S - 0.9	349	2	349	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
	S - 0.9	1525	2	1525	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
16	Q - 0.9	1793	2	1793	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	口徑26.0cm
	R - 0.9	4086	2	4086	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
	S - 0.9	371	2	371	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
	S - 0.9	442	2	442	良	底盤	114	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色
17	Q - 1.3	2068	24	2163	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青白色 - 鮎青色
	S - 0.9	1154	4	1154	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	口徑20.2cm
18	S - 0.9	1163	4	1163	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色 - 黒褐色
	S - 0.9	1163	4	1163	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	口徑21.8cm
19	S - 0.9	693	25	693	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色 - 黒褐色
	S - 0.9	1521	25	1521	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色 - 黒褐色
20	S - 0.8	1493	28	1493	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色 - 鮎青色
	S - 0.9	1875	28	1875	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色 - 鮎青色
21	R - 0.7	324	2	324	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	底徑15.0cm
	R - 0.8	1078	2	1078	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
22	S - 0.9	130	2	130	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
	S - 0.9	675	2	675	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
23	S - 0.9	677	2	677	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
	S - 0.9	680	2	680	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
24	S - 0.9	683	2	683	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
	S - 0.9	1495	2	1495	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
25	S - 0.9	1875	2	1875	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
	S - 0.9	2579	2	2579	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	暗青色
26	R - 0.9	4206	190	190	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	皮厚1.2cm
	R - 0.9	4833	180	180	良	底盤	218	○	○	○	○	ナゲ	ナゲ	皮厚1.3cm

④ 第4群 円筒形条痕文土器 (第57図～第64図)

i) 概要

第4群に属すると判断した土器片は107点出土し、そのうち18個体・48点を資料化した。

第4群は、土器の全体器形が、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形で、底部は平底を呈する厚手土器である。施文は口縁部から胴部にかけて貝殻紋様を用いて、横位方向に十数条巡らす土器である。なお、横位方向の貝殻押し引き文を施す以前に、縱位方向の貝殻条痕を施していたことが窺える。本類に属する土器は、水ノ江和同氏が「一野式」として、さらに木崎康弘氏が「中原式」として、提唱している土器群である。

本類に分類した土器は、器形的特徴から概ね以下の3類に分けることができる。すなわち、

- a : 口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が外反し、唇部はわずかに膨らむ土器 (1, 2)。
- b : 口縁形態が平口縁を呈し、口縁部から胴部にかけて直行する土器 (3～13)。
- c : 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部が内湾し、口唇部は内傾する土器 (19, 20, 21)。

さらに、b類に分類した土器は、口唇部を水平な平坦面にする土器 (3, 9, 10)と、口唇部を外傾させた平坦面にする土器 (5～8, 11)とに、分類することができる。

一方、施文的特徴からは、概ね以下のように分けることができる。すなわち、

- A) : 二枚貝の腹縁部を使用して、まず縱位方向に条痕文を施した後に、横位方向に条痕文を巡らした土器 (1, 2, 13～16)。
 - B) : 二枚貝の腹縁部を使用して、まず縱位方向に条痕文を施した後に、横位方向に押し引き文を施した土器 (4～11, 19～21)。
 - C) : 叉状工具を使用して、横位方向あるいは斜位方向に押し引いた土器 (3, 12)。
- さて、第4群の土器胎土中の鉱物は、概ね石英・長石・角閃石で構成されていた。特に角閃石を多く含む土器が主流であったのに対して、クロウンモを含む土器はわずかであった。また、土器の調整方法は外器面はナテ調整が主流であった。一方、内器面

は丁寧なナテ調整を行う土器が多かった。また、木製工具を使用したハケ目調整を行った後にナテ調整を行う土器も見受けられた。また、土器の色調は外器面では暗黄褐色～暗褐色を、内器面では暗黄褐色～茶褐色を、呈する土器が主流であった。

さて、出土状況全体図から第4群は、主にP・Q-13・14区を中心とする、標高262mから260mにかけての、発掘区画東側の区域に集中して出土している(第57図参照)。この区域は、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩やかな傾斜地にあたる区域である。

したがって第4群の出土分布の状況から、これらの土器を使用した人々はこの区域に生活の場を設けていたことが想定できる。

さらに重要なことは、第4群が集中して出土した地域は、下剥峯式土器や微細山形押型文土器、変形撫糸文土器、手向山式土器が集中して出土した地域と重なっている。その一方で、桑ノ丸式土器や山形押型文土器、梢円押型文土器が集中して出土した、R・S-9区などの区域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

ii) 小結

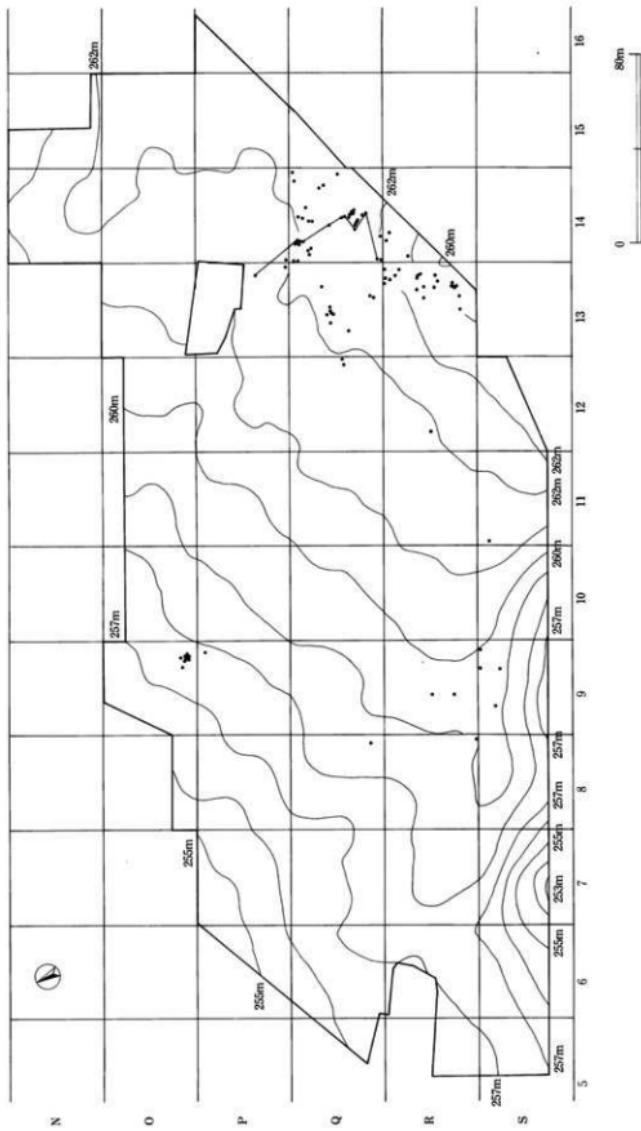
第4群に属する土器は、器形的特徴のうち口縁部の形態から、

- ①口縁部が外反する土器 (a類土器)。
- ②口縁部が直行する土器 (b類土器)。
- ③口縁部が内湾し、口唇部が内傾する土器 (c類土器)。

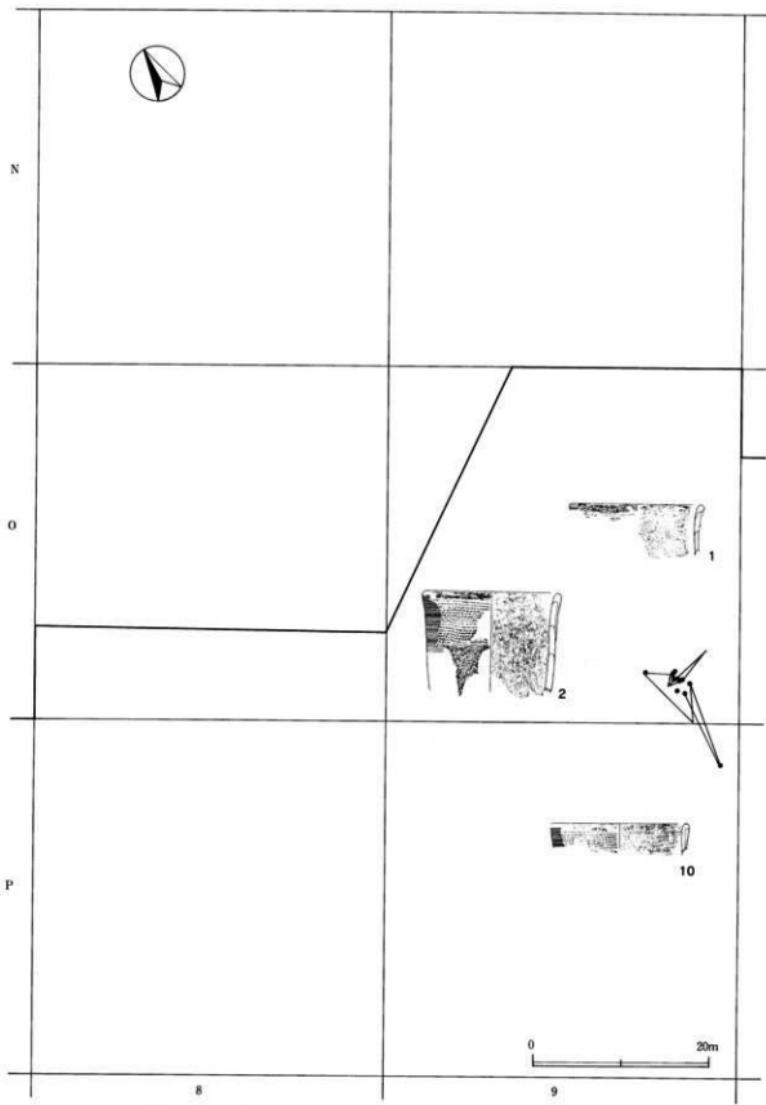
の3類に分類できた。

先行研究と比較すると、②に属する土器が水ノ江氏の一野式土器に、木崎氏の中原Ⅲ式土器に、①に属する土器が木崎氏の中原Ⅳ式土器におむね比定できる。

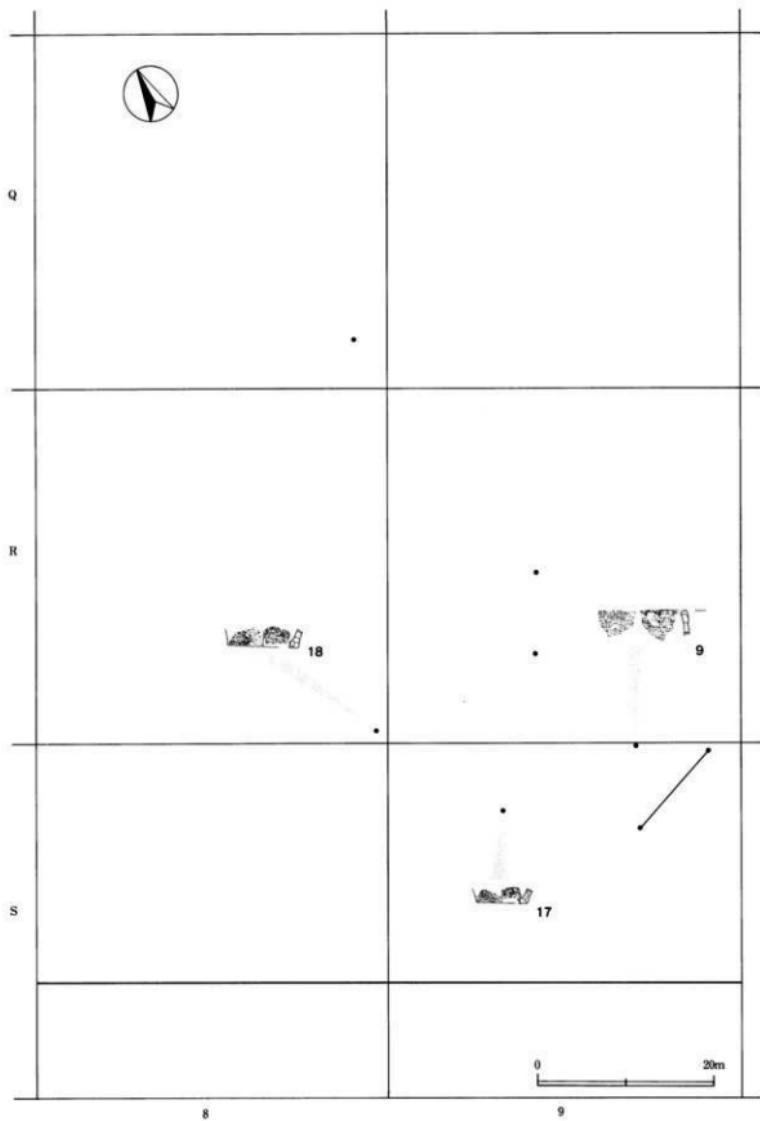
また、出土した土器片の点数が少ないとからも、第4群土器は本遺跡では客体的な存在であったことが指摘できる。



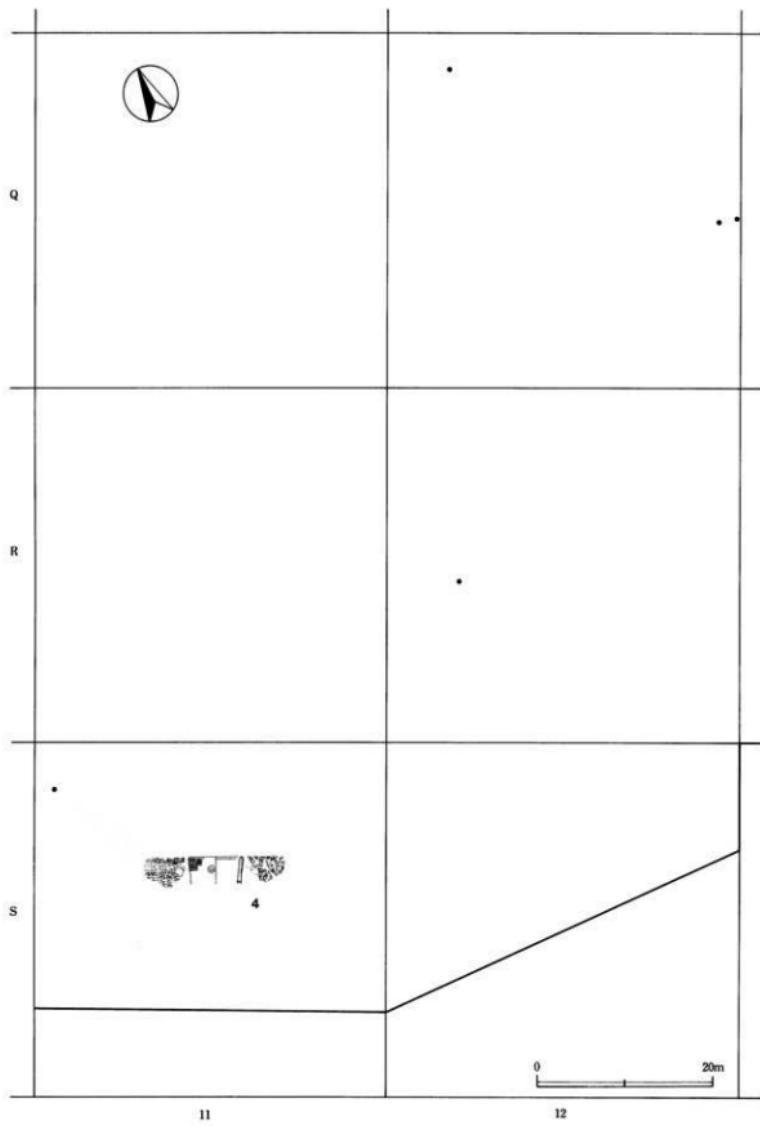
第57図 円筒形条痕文土器出土状況全体図



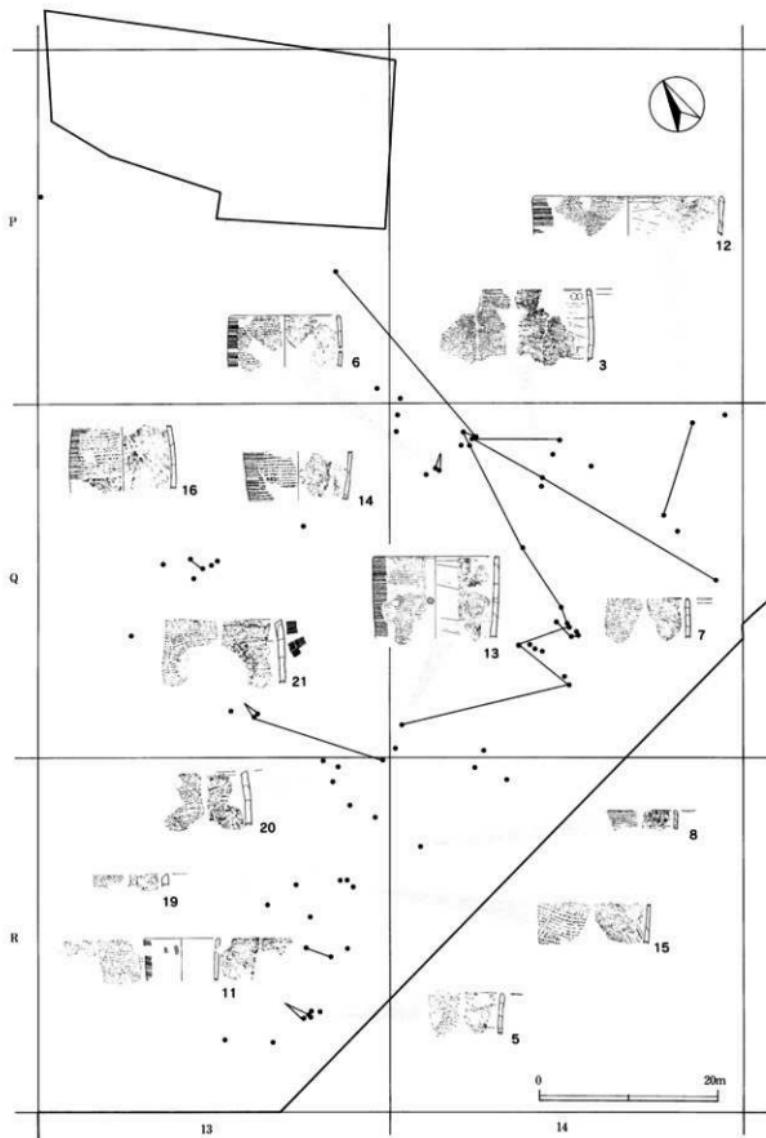
第58図 円筒形条痕文土器出土状況図1 (O・P-8・9区)



第59図 円筒形条痕文土器出土状況図2 (Q・R・S-8・9区)



第60図 円筒形条痕文土器出土状況図3 (Q・R・S-11・12区)



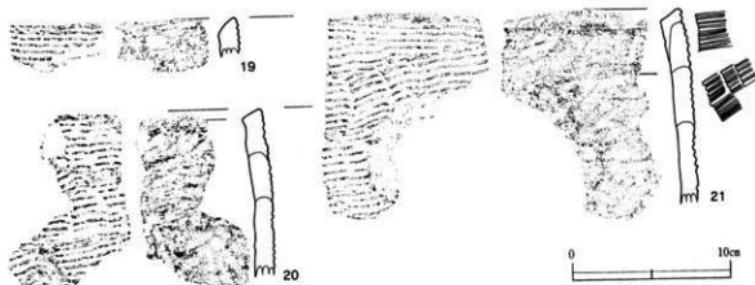
第61図 円筒形条痕文土器出土状況図4 (P・Q・R-13・14区)



第62図 円筒形条痕文土器実測図（1）



第63図 円筒形条痕文土器実測図（2）



第64図 円筒形条痕土器実測図（3）

円筒形条痕土器観察表

測定番号	測定位置	測定長さ	測定幅	表面状況	縦	横	底	内側縫合部	外側縫合部	内側縫合部	外側縫合部	内側縫合部	外側縫合部	縫合部	
					直角	斜角	直角	斜角	直角	斜角	直角	斜角	直角	斜角	
1	Q-0-0.9	10	110	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	口縫24.5cm
	Q-0-0.9	8	9	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	
2	Q-0-0.9	11	111	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	口縫26.8cm
	Q-0-0.9	13	13	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	
	Q-0-0.9	15	15	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	
	Q-0-0.9	23	23	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	暗赤褐色	
3	Q-1-4	979	979	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
	Q-1-4	2611	112	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
	Q-1-4	2075	2075	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
	Q-1-4	1336	1336	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
4	S-1-5	569	569	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	暗赤褐色 (口縫2.5cm, 縫合孔あり, ハラ付)
	Q-1-4	1525	1525	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～褐褐色	暗赤褐色	
	Q-1-4	2329	2329	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	暗赤褐色	口縫26.5cm
6	Q-1-4	2096	12	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	暗赤褐色	口縫26.5cm
	Q-1-4	2453	2453	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	暗赤褐色	口縫26.5cm
7	Q-1-4	1143	1143	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	ハケ一ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
	Q-1-4	1142	1142	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
	Q-1-4	1136	7	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
8	Q-1-4	1142	1142	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	口縫26.5cm
	Q-1-4	1136	7	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
	Q-1-4	1136	7	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	
10	Q-0-0.9	15	22	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	口縫26.5cm
	Q-0-0.9	923	923	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	口縫26.5cm
11	R-1-3	4837	12	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	口縫26.5cm
	Q-1-4	5159	12	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色～暗赤褐色	口縫26.5cm
12	Q-1-4	2697	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	口縫26.5cm
	Q-1-4	2561	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
	Q-1-4	2636	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
	Q-1-4	2323	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
	Q-1-4	323	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
13	Q-1-4	647	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	口縫26.5cm
	Q-1-4	1798	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
	Q-1-4	2697	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
	Q-1-4	2614	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
	Q-1-4	2629	122	可	縫合	口縫一側縫	○	○	○	縫合・縫合	ナデ	ハケ一ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色～茶褐色	
14	Q-1-3	5477	140	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
	Q-1-3	1530	140	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
15	R-1-2	8695	120	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
16	Q-1-2	5662	120	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色	茶褐色		
17	Q-1-2	1160	120	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
	Q-1-2	1160	120	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
	Q-1-2	2892	120	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
	Q-1-2	1584	120	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む		暗赤褐色～褐褐色	暗褐色～茶褐色		
44	Q-1-2	2346	8	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色	縫合孔あり
45	Q-1-2	1241	8	可	縫合	縫合	○	○	○	縫合を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色～茶褐色	茶褐色	

⑤ 第5群 微縫山形押型文土器（第65～68図）

i) 概要

第5群に属する土器は、28点の土器片が出土し、その内の10点、9個体を資料化した。

第5群は、土器全体の器形が不明であるものの、「帯状施文」と呼ばれる文様構成で施文した土器の一群であり、特徴は以下のとおりである。

まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は舌状形を呈する。口縁は直行し、胴部下半部はすぼまる器形である。胴部上半部と底部の器形は不明であるが、ほぼ砲弾形か想定できる。

土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは0.8cmあり、押型文土器群の中では特に薄めである。

文様が施される部位は、出土している口縁部と胴部下半部との器外面であり、器内面は出土している範囲内では施されておらず無文である。そのうち器外面の文様は、原体を横位にころがしてつけたもので、原体の幅は広めである。その下位に相対的に幅が狭い無文部を設けて、再び微細な山形押型文を施し、下位に向けて有文部と無文部とを繰り返し施文している。この特徴が本類の指標である。

土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石で構成されており、クロウンモは確認できなかった。一方、土器の調整方法は器外面、器内面共にナデ調整が主流である。土器の色調は器外面が茶褐色から暗茶褐色、器内面が黒褐色から茶褐色・暗茶褐色であった。

さて、出土状況全体図から第5群は、主に標高262mから260mにかけての、R-13区を中心とする発掘区画東側の区域に集中して出土している（第65図参照）。この区域は、発掘区画の境界近くであるため詳細な地形は不明であるが、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩やかな傾斜地にあたる地域である。

さらに重要なことは、第5群が集中して出土した地域は、下剥離式土器や円筒形条痕文土器が集中して出土した地域と重なっている一方で、桑ノ丸式土器や第6群に分類した山形押型文土器、第7群に分類した梢円押型文土器が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

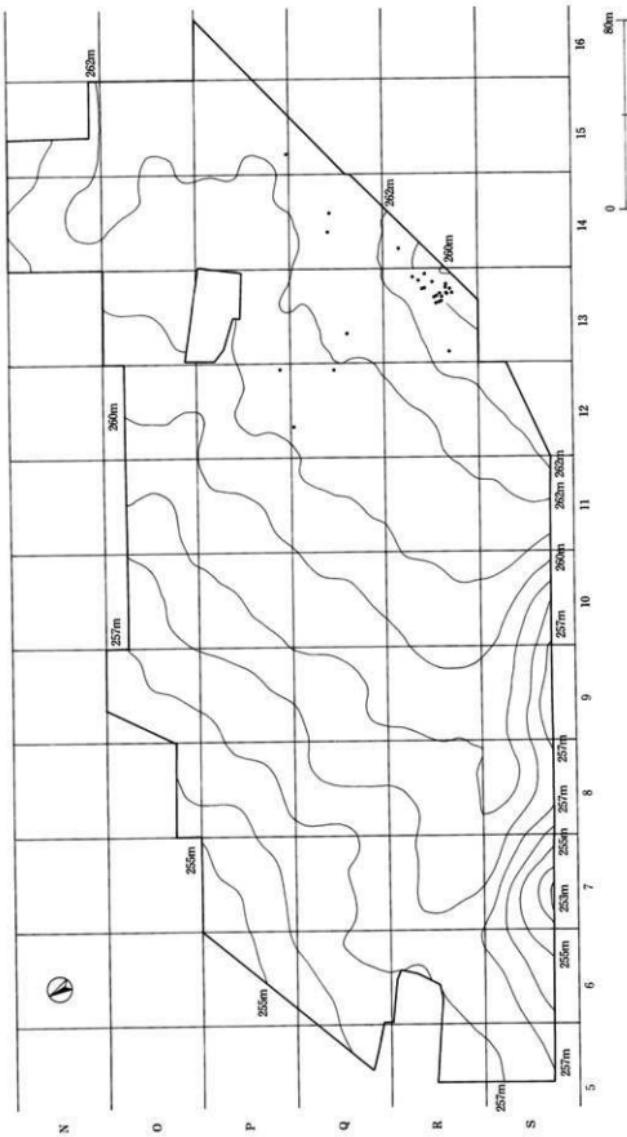
ii) 小結

この第5群の主な特徴を挙げると、

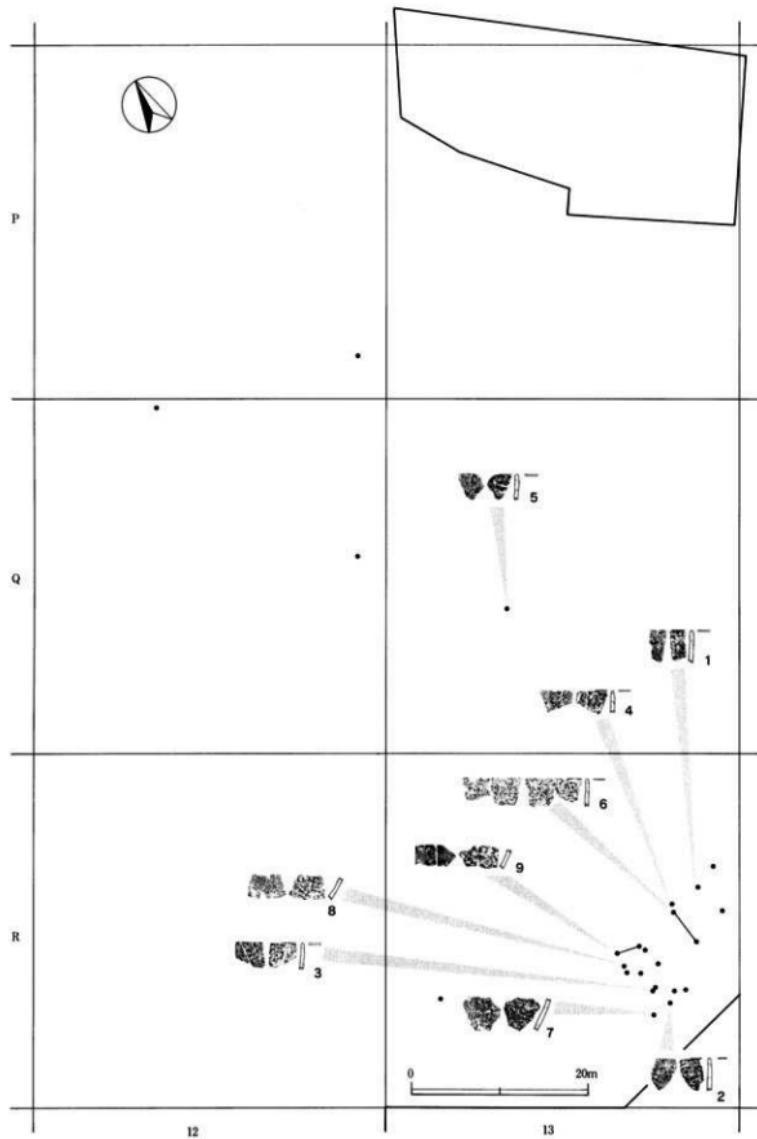
- ① 口縁が直行すること。
- ② 带状施文が行われていること。
- ③ 器内面に原体条痕が施されていないこと。

の3点を指摘できる。これらの土器の特徴だけを、東九州を含めた北部九州の押型文土器段階年と比較すると、第5群は福荷山式・川原田式土器段階の中でも無文部が狭くなる、より新しい段階に比定できるようである。

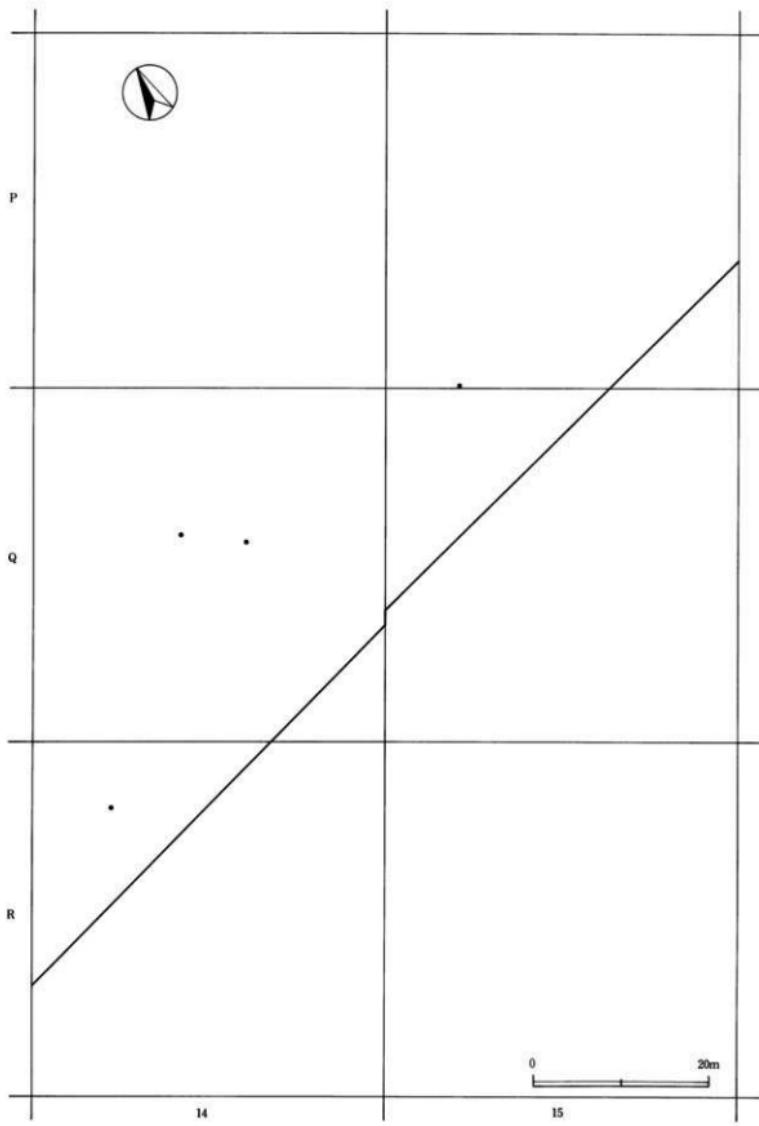
しかしながら、北部九州では福荷山式・川原田式土器段階では無文土器の存在が卓越しているのに対して、上野原遺跡第10地点では同じ器形をした無文土器は1点も出土しておらず、その内容には較差があることが指摘できる。また、出土した土器片の点数が28点と極めて少ないとからも、第5群は本遺跡では客体的な存在であり、土器としては一過性の存在であったことが指摘できる。



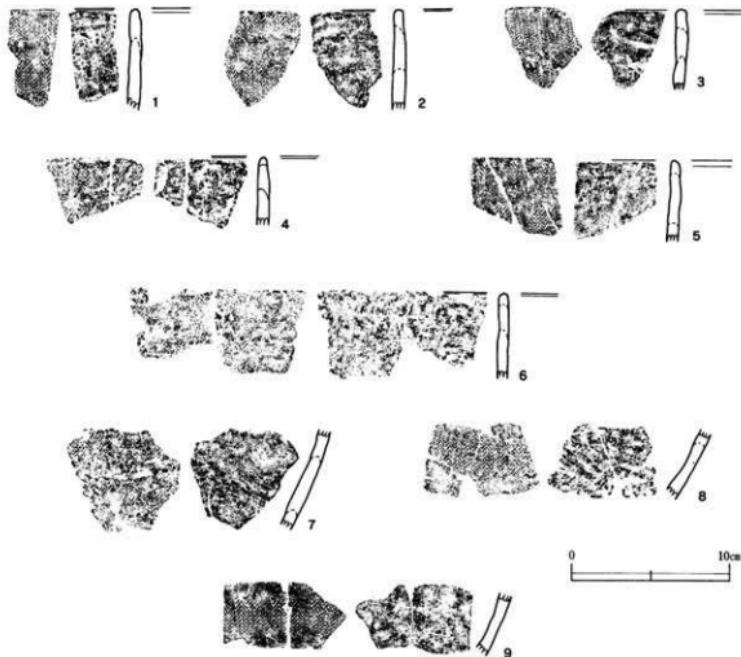
第65図 機細山形神型文土器出土状況全体図



第66図 微細山形押型文土器出土状況図1 (P・Q・R-12・13区)



第67図 微細山形押型文土器出土状況図2 (P・Q・R-14・15区)



第68図 微細山形押型文土器実図

微細山形押型文土器観察表

層 番 号	種 名	出土 位 置	江 戸 記 号	実測 寸 数	備 考	器種	部位	胎 土			外表面 調査	内表面 調査	色 調	備 考	
								石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂粒			
第 68	1	R-1-3	8958	40	V. 滑鉢口縁	○	○	○				砂粒を含む	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	2	R-1-3	9476	37	V. 滑鉢口縁	○	○	○				細砂・微砂	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	3	R-1-3	7776	34	V. 滑鉢口縁	○	○	○				細砂・微砂	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	4	R-1-3	9752	36	V. 滑鉢口縁	○	○	○				細砂・微砂	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	5	Q-1-3	4996	33	V. 滑鉢口縁	○	○	○				細砂・微砂	ナデ	茶褐色 茶褐色	
回	6	R-1-3	6722	35	V. 深鉢口縁	○	○	○				細砂・微砂	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	7	R-1-3	9937	35	V. 深鉢口縁	○	○	○				砂粒を含む	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	8	R-1-3	8381	37	V. 滑鉢口縫	○	○	○				細砂・微砂	ナデ	茶褐色 茶褐色	
	9	R-1-3	2359	38	V. 滑鉢口縫	○	○	○				砂粒を含む	ナデ	茶褐色 茶褐色	
		R-1-3	2290	41	V. 深鉢朝部	○	○	○					ナデ	茶褐色 茶褐色	
		R-1-3	4727												

⑥ 第6群 山形押型文土器（第69～76図）

i) 摘要

第6群に属する土器は、47点の土器片が出土し、その内の34点、20個体を資料化した。

第6群は、器表面に山形押型文を施す土器である。器形と施文方法から2類に分けられる。

第1類に属する土器器形の特徴は以下のとおりである（第74図1～10）。

まず、口縁部形態は平口縁を呈し、口縁部は外反し、胴部下半部はすぼまり、底部は直径約4～8cmの平底となる器形である。ところで、口縁部内面の形態には稜を形成するタイプ（1～3）と形成しないタイプ（4）がある。胴部上半部の器形は不明であるが、ほぼ直線的に立ち上がる器形が想定できる。土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約1cmである。

第1類土器で文様が施される部位は、出土している口縁部と胴部下半部との外器面と口縁部内面とである。そのうち外器面の文様は、原体を横位にころがしてつけたもので、本類の指標である。口縁部内面の文様は、上段に刺突点文を、下段に山形押型文を施すもの（1～3）と、上段に原体条痕を、下段に山形押型文を施すもの（4）とに分けられる。

土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石およびクロウンモで構成されている。一方、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流である。土器の色調は外器面が暗茶褐色から暗赤褐色、内器面が暗褐色から暗茶褐色・暗黄褐色であった。

次に第2類に属する土器の器形的特徴は以下のとおりである（第75・76図11～20）。

まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は平坦面を作り出す。口縁部は外側に開き、胴部は直線的にすぼまり、底径は直径約27cmを測る大きめの平底となる器形である。ところで、口縁部内面の形態には、第1類と同様に稜を形成するタイプ（15～18）と稜を形成しないタイプ（11、19、20）がある。

土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約1cmである。

第2類土器の文様が施される部位は、口縁部上端から胴部下端までの外器面全面で、内器面は無文である。

ある。そのうち外器面の文様は、原体を縦位にころがしてつけたもので、本類の指標である。

土器胎土中の鉱物は石英・長石で構成されており、口縁部内面に稜を形成するタイプの土器にはさらに角閃石が含まれている。しかしクロウンモは確認できなかった。一方、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流であるが、内器面調整では工具によるハケ調整が観察できる土器がある。土器の色調は外器面が暗茶褐色から暗赤褐色、内器面が暗褐色から暗茶褐色・暗黄褐色であった。

さて、出土状況全体図から第6群土器は、主に標高262mから259mにかけての、R・S-9区からS-11区を中心とする発掘区画南側の区域に集中して出土している（第69図参照）。この区域は、上野原台地が鹿児島湾に向かう南側急斜面の落ち際にあたる区域である。

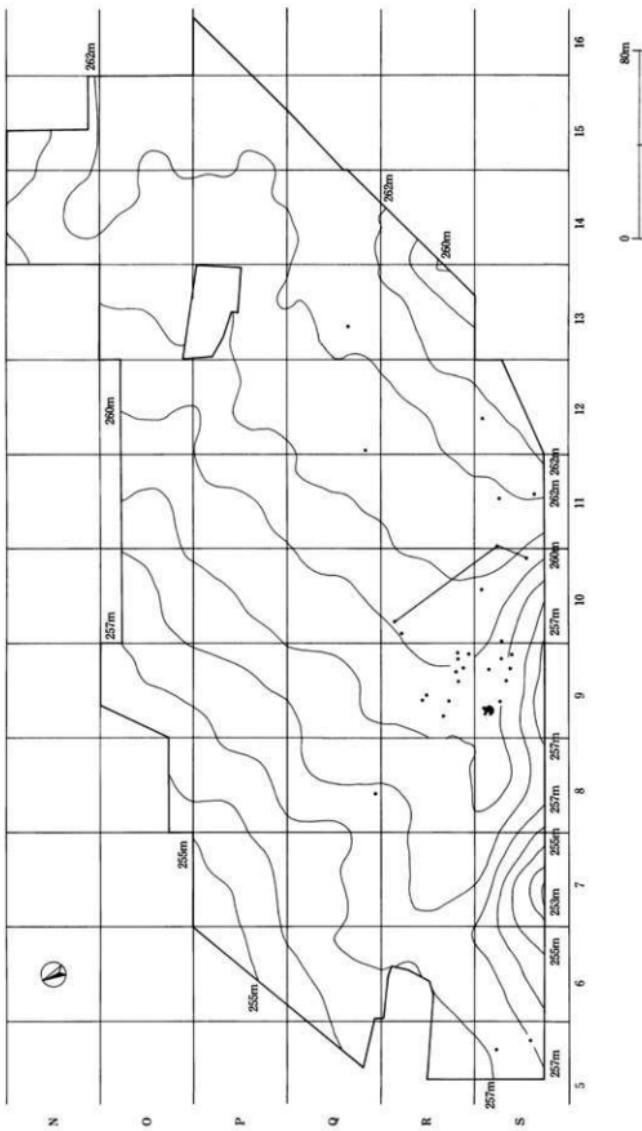
さらに重要なことは、第6群土器が集中して出土した地域は、第3群に分類した桑ノ丸式土器などが集中して出土した地域と重なっている一方で、第2群に分類した下剥峯式土器や第4群に分類した円筒形条痕文土器が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

ii) 小結

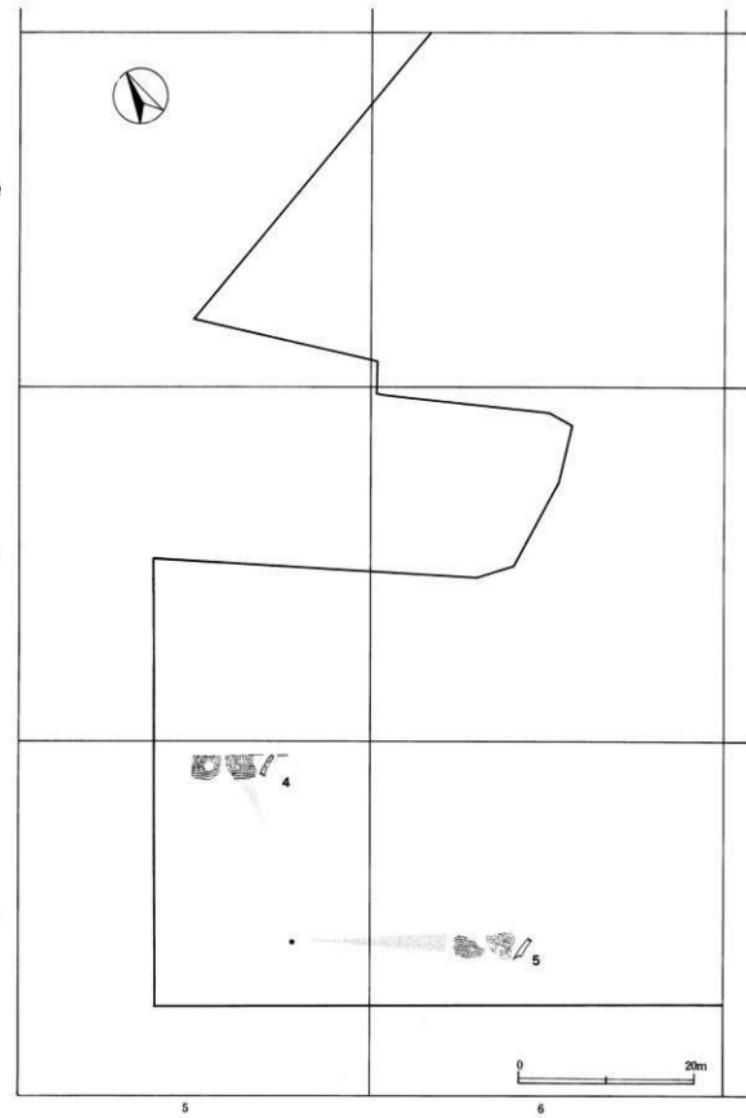
この第6群の特徴を挙げると、

- ① 外器面に横走する山形押型文を施し、稜を形成しない口縁部内面には上段に原体条痕を下段に横走する山形押型文を施すタイプの土器（4）。
- ② 外器面に横走する山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面には上段に刺突点文を下段に横走する山形押型文を施すタイプの土器（1～3）。
- ③ 外器面に縦走する山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面および胴部内面には文様を施さないタイプの土器（15～18）。
- ④ 外器面に縦走する山形押型文を施し、稜を形成しない口縁部内面および胴部内面には文様を施さずに、口唇部に平坦面を形成するタイプの土器。（11～14、19、20）

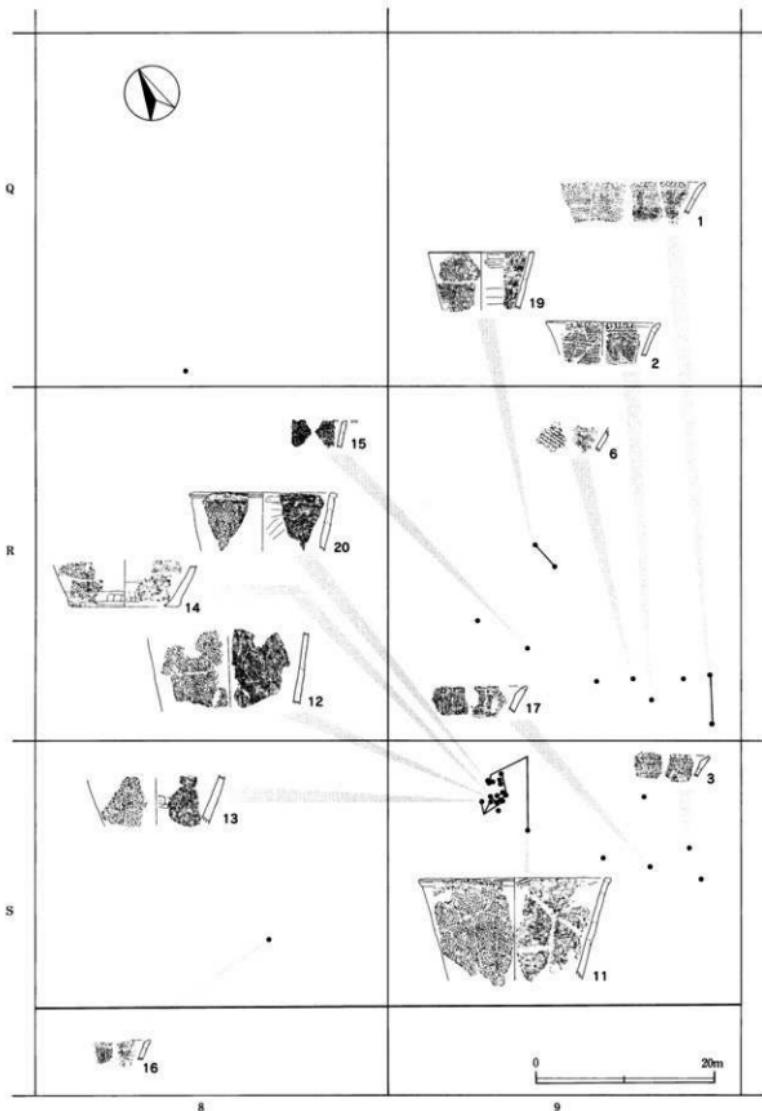
に分けることができそうであることをこの項では指摘しておく。



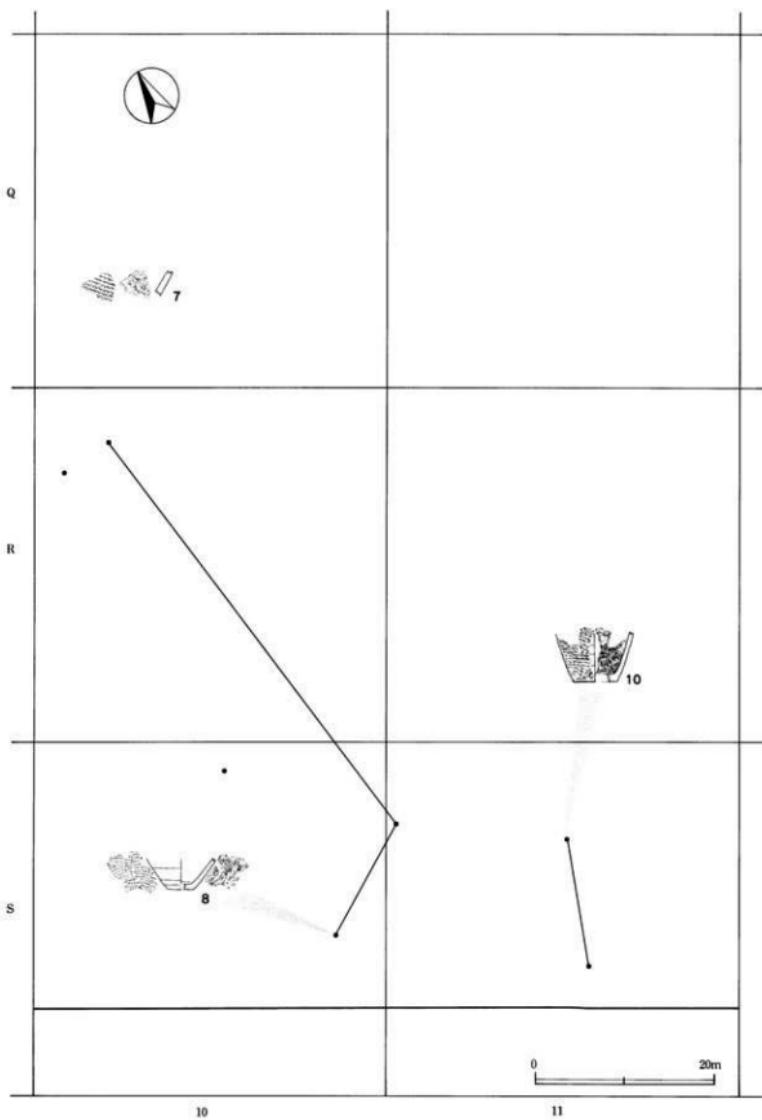
第69図 山形押型文土器出土状況全図



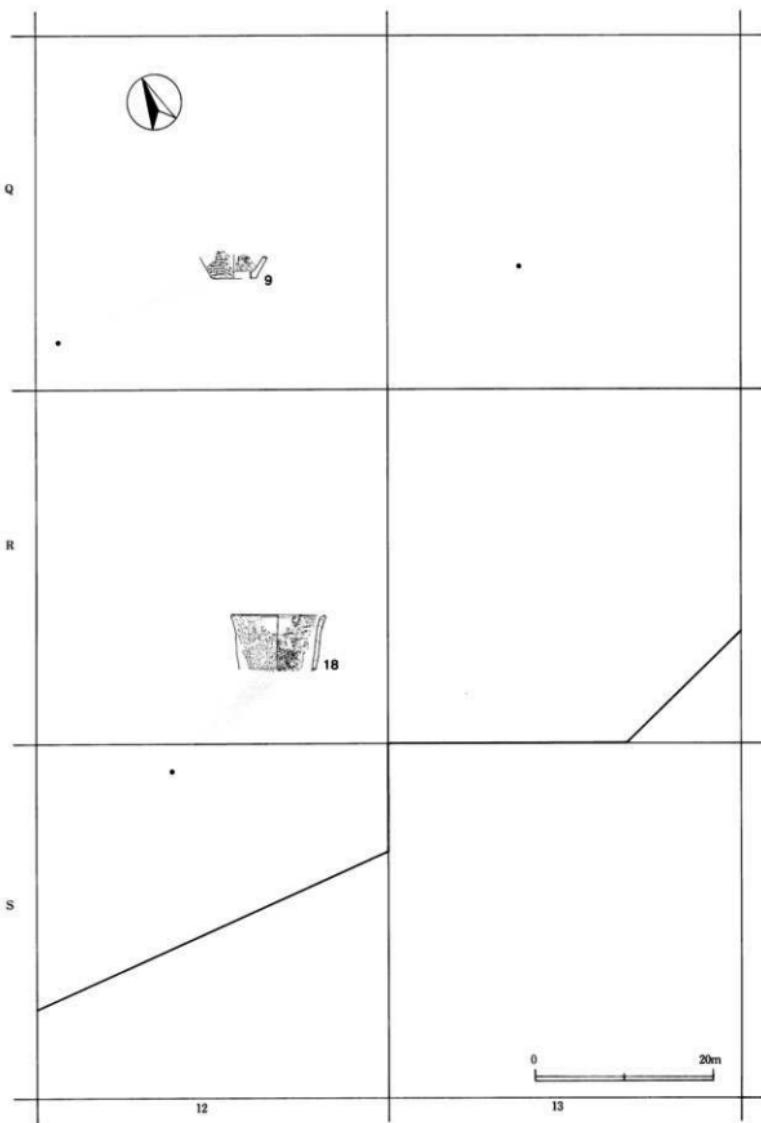
第70図 山形押型文土器出土状況図1 (Q・R・S-5・6区)



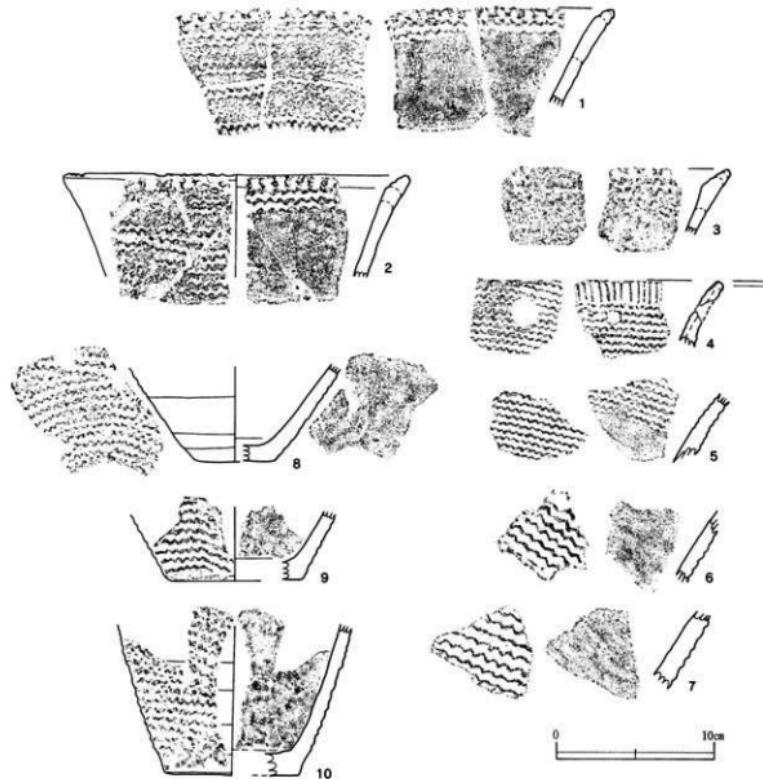
第71図 山形押型文土器出土状況図2 (Q・R・S-8・9区)



第72図 山形押型文土器出土状況図3 (Q・R・S-10・11区)



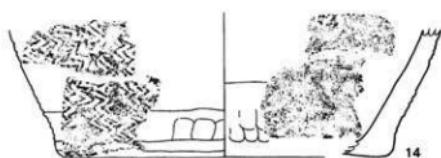
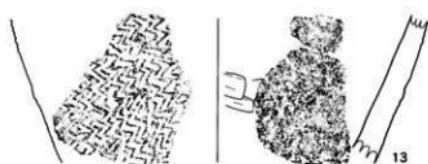
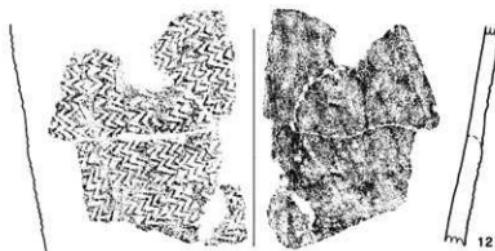
第73図 山形押型文土器出土状況図4 (Q・R・S-12・13区)



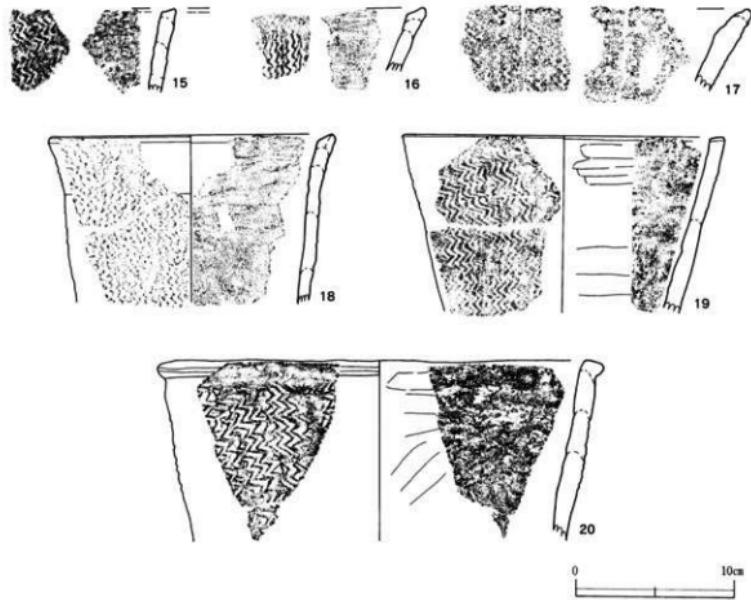
第74図 山形押型文土器実測図（1）

山形押型文土器観察表（1）

番号	標名	出土 所	柱記 号	実測圖 番号	厚 さ	部位	勘 土				外表面 調査	内表面 調査	色 調	備考	
							石高	瓦石	角閃石	クロラント					
第 74	1	E-0.9	4549	62	V1	深鉢	口縁	○	○	○	砂粒を含む	剥落	ナデ	緑青褐色	緑青褐色
	2	E-0.9	5681	80	V1	深鉢	口縁	○	○	○	砂粒・鉄粉	ナデ	緑青褐色	緑青褐色	(1782), Cm
	3	S-0.9	948	63	V1	深鉢	口縁	○	○	○	砂粒を含む	剥落	ハケーナデ	緑青褐色	緑青褐色
	4	S-0.5	2441	68	V1	深鉢	口縁	○	○	○	砂粒・鉄粉	ナデ	緑青褐色	緑青褐色	
	5	S-0.5	2104	58	V1	深鉢	剥離	○	○	○	砂粒・鉄粉	ナデ	緑青褐色	緑青褐色	
	6	S-0.9	2441	63	V1	深鉢	剥離	○	○	○	砂粒・鉄粉	ナデ	緑青褐色	緑青褐色	
	7	E-1.0	12905	59	V1	深鉢	剥離	○	○	○	砂粒・鉄粉	ナデ	緑青褐色	緑青褐色	
回 8	E-1.0	8635	V1												
	S-1.0	9028	14	V1	深鉢	底部・脚部下半	○	○			砂粒を含む	ナデ	明黄褐色	黄褐色	直径4.8cm
	S-1.0	9029	11	V1	深鉢	底部	○	○							
	Q-1.2	7503	72	V1	深鉢	底部	○	○			砂粒・微砂	ナデ	暗黃褐色	暗黃褐色	直径5.4cm
	S-1.1	283	15	V1	深鉢	底部・脚部下半	○	○	○		砂粒・微砂	ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	直径5.0cm



第75図 山形押型文土器実測図（2）



第76図 山形押型文土器実測図（3）

山形押型文土器観察表（2）

測定 番号 基 数	出 土 地 点 名	高 さ cm	実測高 さ cm	幅 径 cm	厚 さ cm	底 径 cm	底 形 状	底 位 置	胎 土				外表面 調査	内表面 調査	色 調		備 考
									石英	長石	角閃石	クロウン	砂	滑	青	赤	
11	60号集石 1 60号集石 26	36.1 10.5	10.5	18	滑 跡	口縁	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ハケ→鍛なナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	口径25.6cm
75	1 12	453 458 1144 1153	109	18	滑 跡	底部	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	
13	1 14	1143 1169 2569	105	18	滑 跡	底部	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ハケ→ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径22.4cm
15	R-0.9	2885 3329 1846	195	18	滑 跡	口縁	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ハケ→ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径26.4cm
16	S-0.8	61	1846	18	滑 跡	口縁	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径26.4cm
17	S-0.9	64	17	18	滑 跡	口縁	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径26.4cm
18	S-1.2	81	17	18	滑 跡	口縁	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径26.4cm
19	R-0.9	2889 2891	167	18	滑 跡	底部下半	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径26.4cm
20	S-0.9	60号集石 26	108	18	滑 跡	口縁	○	○	○	滑	滑	滑	ナゲ	ナゲ	暗赤褐色	暗黃褐色	直径26.4cm

⑦ 第7群 楕円押型文土器（第77～88図）

i) 概要

第7群に属する土器は、264点の土器片が出土し、その内の65点、35個体を資料化した。

第7群は、器表面に楕円押型文を施す土器である。器形と施文方法から3類に分けられる。

第1類に属する土器の特徴は以下のとおりである（第88図29～35）。まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は舌状形を呈する。口縁は直行し、胴部下半部はすぼまる器形である。以上のことから胴部上半部と底部の器形は不明であるが、ほぼ平底の砲弾形が想定できる。また、土器の器壁の厚さは約1cmである。以上が本類の指標である。

一方、文様が施される部位は出土している口縁部と胴部下半部との外器面であり、内器面は出土している範囲内では施されておらず無文である。そのうち外器面の文様は、微細な楕円押型文の原体を横位にころがしてつけたものである。

さらに土器胎土中の鉱物は石英・長石・クロウンモで構成されており、角閃石が確認できたのは35の土器だけであった。

ところで土器の調整方法は外器面はナデ調整が、内器面は木製工具によるハケ目調整が主流である。土器の色調は外器面が明黄褐色、内器面が明黄白色が主流であった。

第2類に属する土器の特徴は以下のとおりである（第85～87図2～20、26・27）。まず、口縁部形態は平口縁で、口縁は外反し、胴部中央部で若干膨らむが、胴部下半部ではすぼまり、底部は平底を呈する器形である。また、土器の器壁の厚さは約1.5cmである。

第2類土器の文様が施される部位は、口縁部から胴部下端部までの外器面と口縁部内面とである。そのうち外器面の文様は、粗大な楕円押型文の原体を横位にころがしたもので、本類の指標である。

また、口縁部内面の文様には3種類ある。第1種は、上段に短い原体条痕を下段に横走る楕円押型文を施す土器（2～6、8）で、このタイプの土器には口唇上端部に刺突点文が施されている。次の第2種は、長めの原体条痕を1段のみ施す土器（9

～11）で、このタイプの土器は口唇上端部に文様が施されず無文である。さらに第3種は口縁部内面に文様を施さず無文にする土器で（7）、このタイプの土器は口唇上端部や口縁部上段外側（外反部分）にも文様を施さず無文である。ただし、口縁部下段には横走する楕円押型文を施している。

さて多くの第2類土器では、胎土中に含まれる鉱物は石英・長石・角閃石で構成されており、特に角閃石の含有が顕著であるのが注目できる。ところが、上記の口縁部内面施文において第2種に分類した土器の一群ではクロウンモの含有は確認できたものの、角閃石の含有は確認できなかった。一方、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流である。土器の色調は外器面が黄褐色や暗黄褐色が、内器面が暗黄褐色や暗茶褐色が主流である。

第3類に属する土器の特徴は以下のとおりである（第85～87図1、21～25・28）。まず、口縁部形態は平口縁で、口縁は外反し、胴部下半部は直線的にすぼまり、底部は直径約8～13cmの平底を呈する器形である。また、土器の器壁の厚さは約1cmである。

第3類土器の文様が施される部位は、出土している口唇部から口縁部にかけての内外器面と胴部下半部の外器面とである。そのうち外器面の文様は、粗大な楕円押型文の原体を縦位あるいは斜位にころがしたもので、本類の指標である。

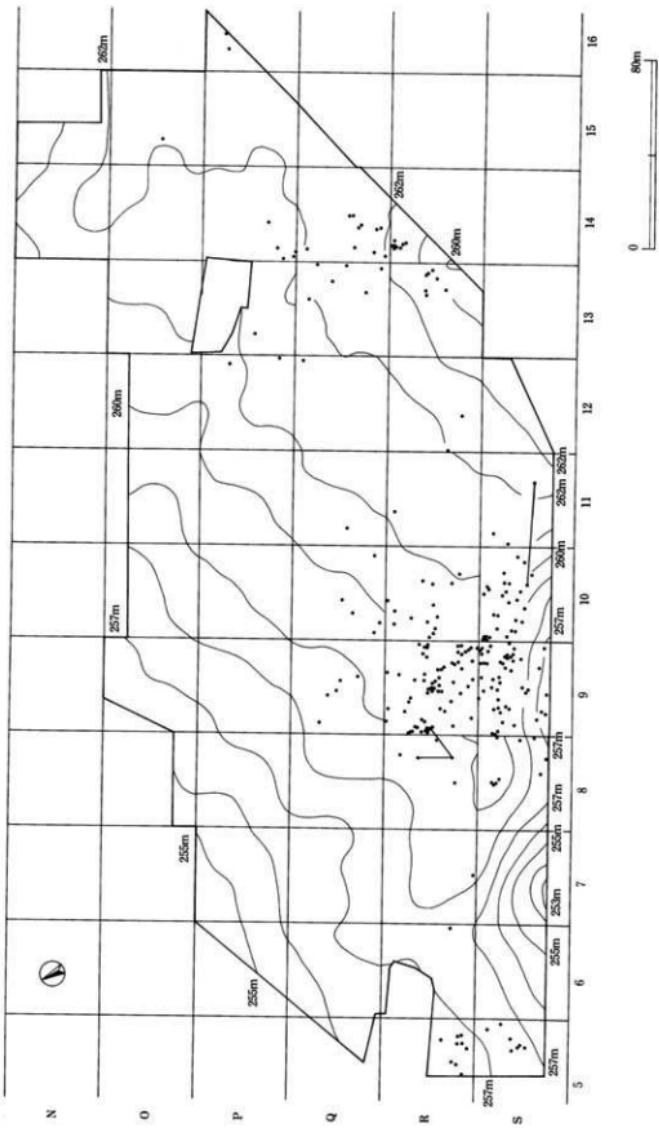
また、出土した口縁部は1点だけで口縁部内器面に施される文様の詳細は不明であるが¹、1の土器は上段に刺突点文を、下段に横走る楕円押型文を施す土器である。一方、口縁部外器面には連珠状の楕円押型文を縦位にころがして文様を付けた土器である。

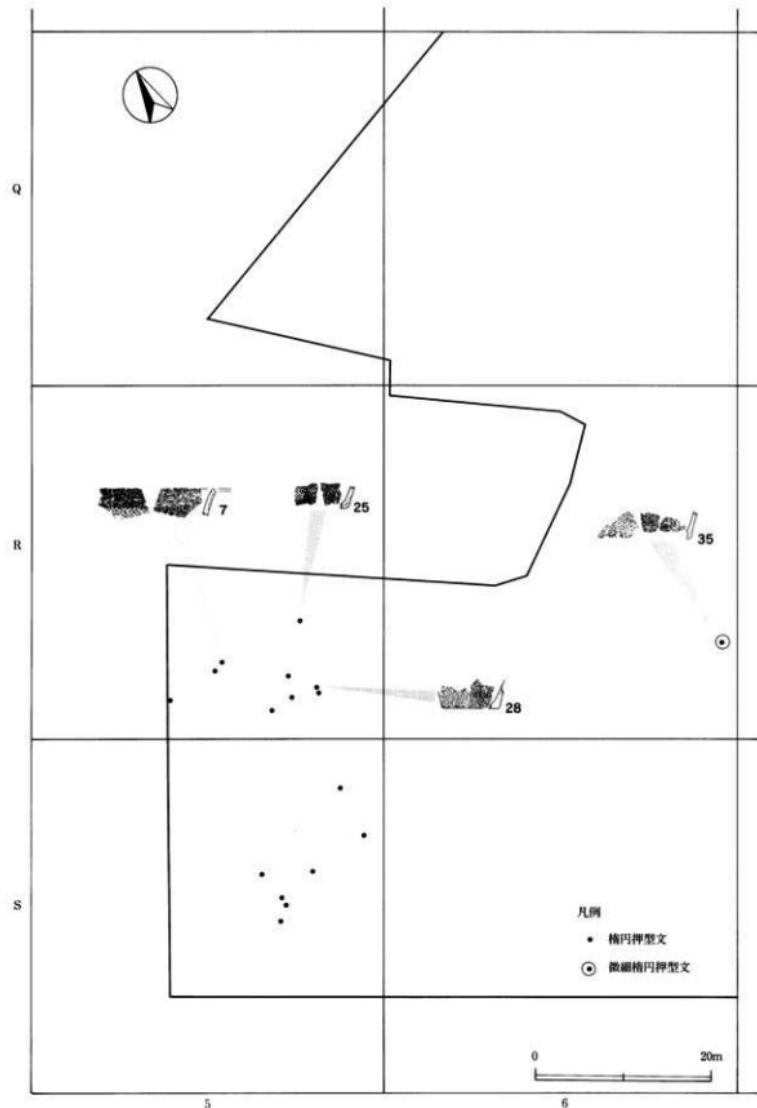
さて、土器胎土中の鉱物は石英・長石の他に、クロウンモや角閃石が含まれる土器があり、有意な差は確認できなかった。

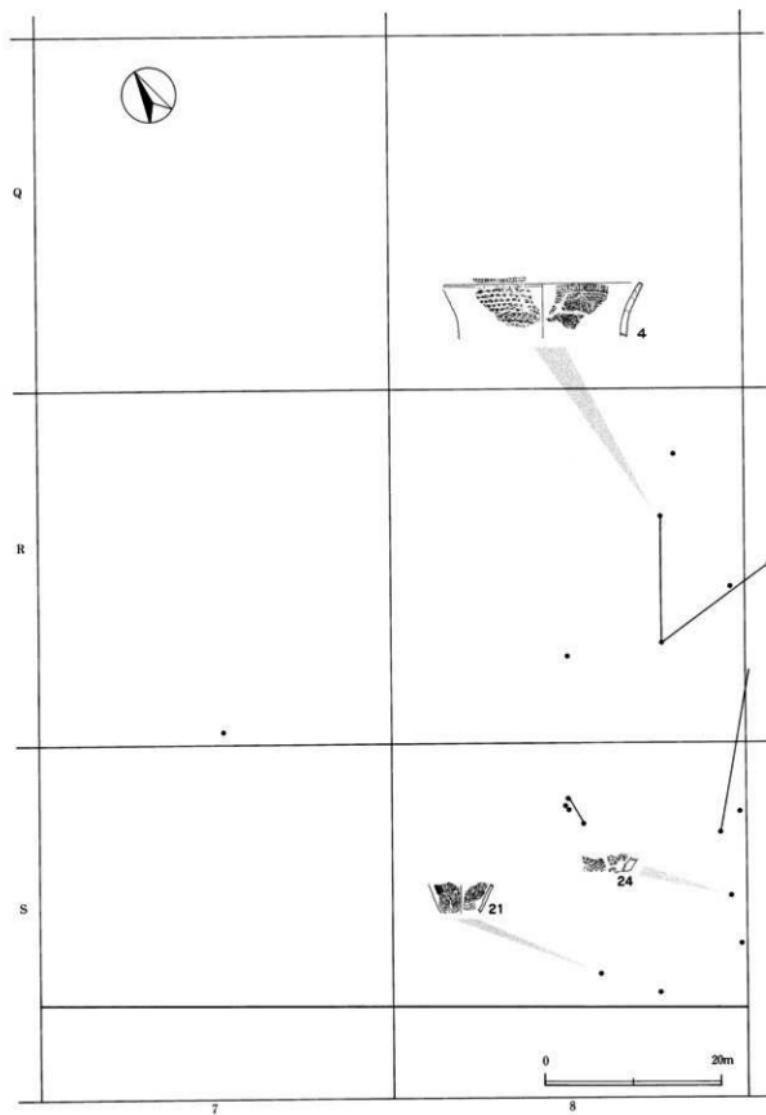
ところで、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流である。土器の色調は暗赤褐色から黄褐色までかなりばらつきが観察できた。

(p.110へ続く)

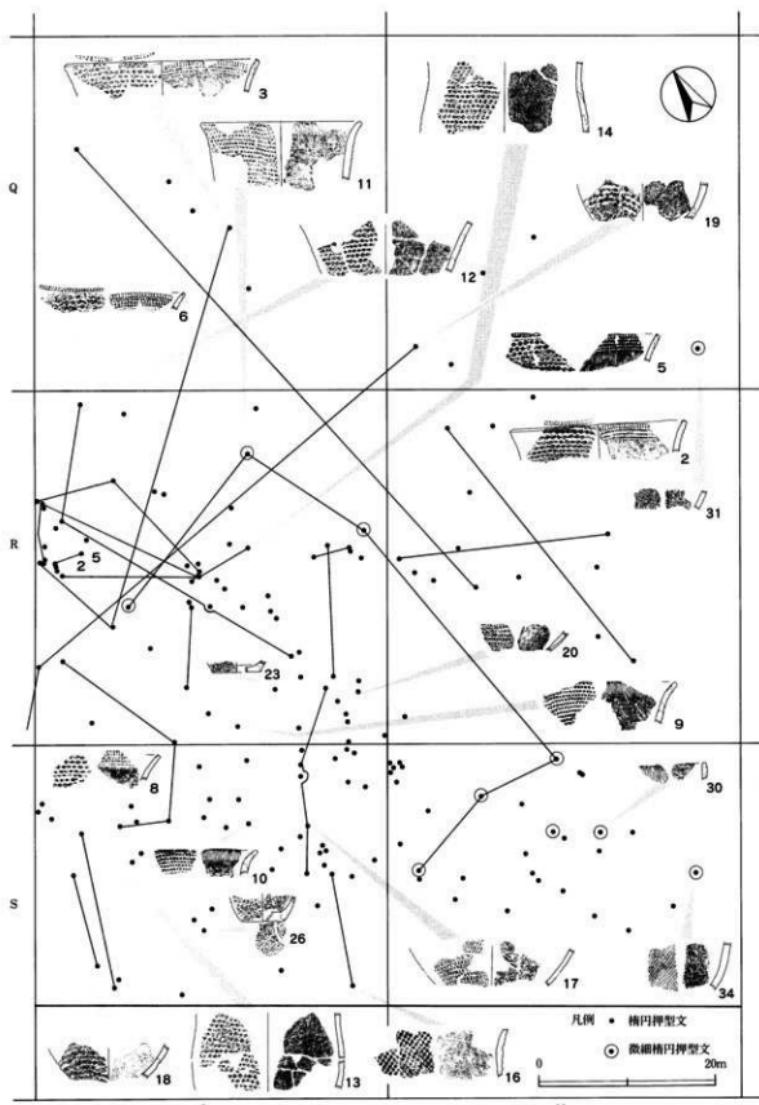
第77圖 楊円押型文土器出土状況全休図



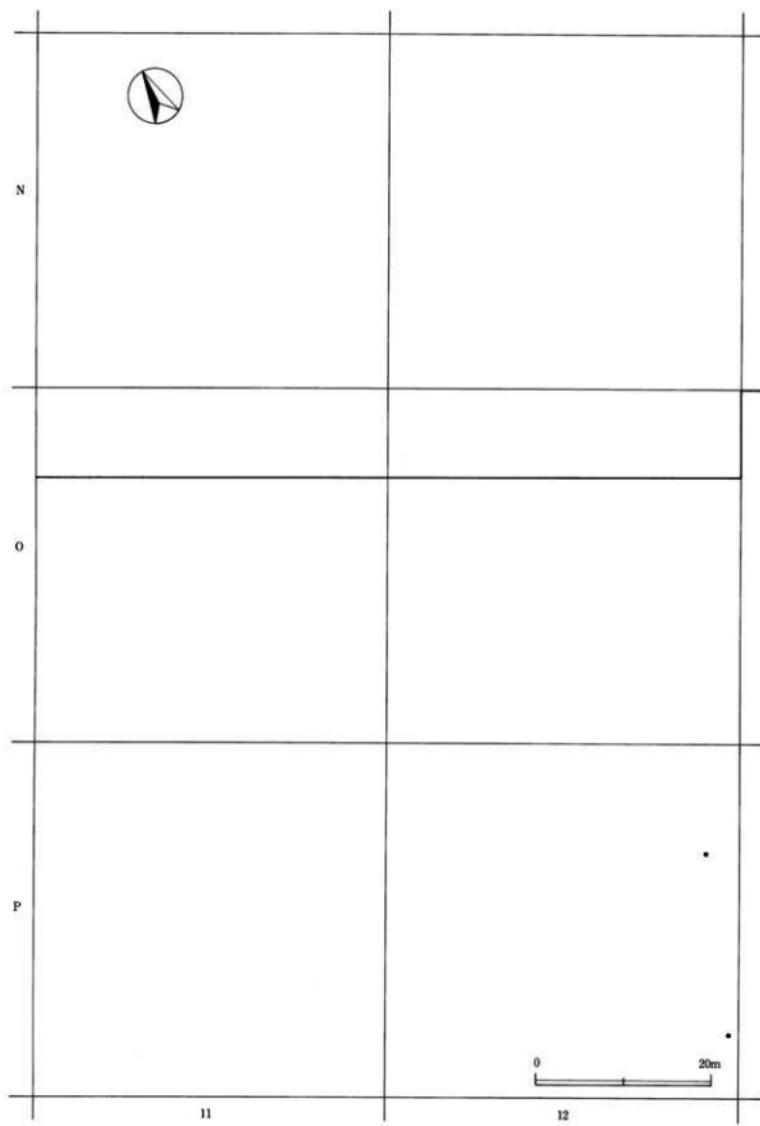




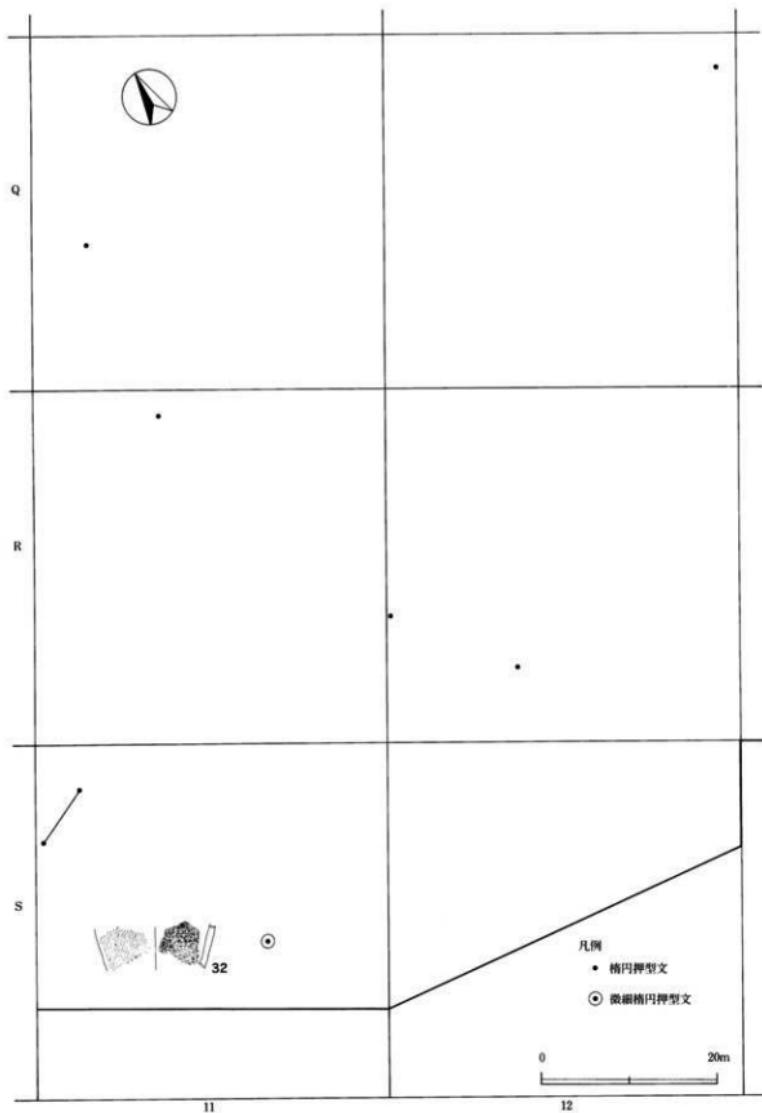
第79図 構内押型文土器出土状況図2 (R・S-7・8区)



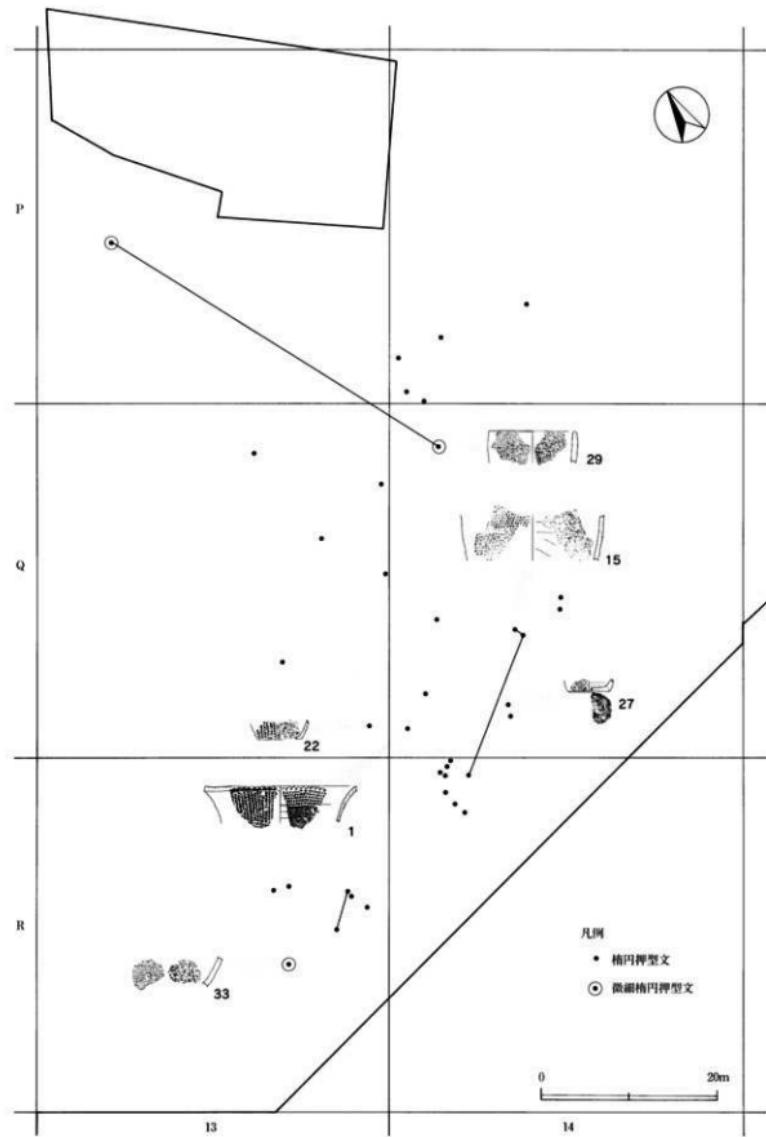
第80図 楊円押型文土器出土状況図3 (Q・R・S・9・10区)



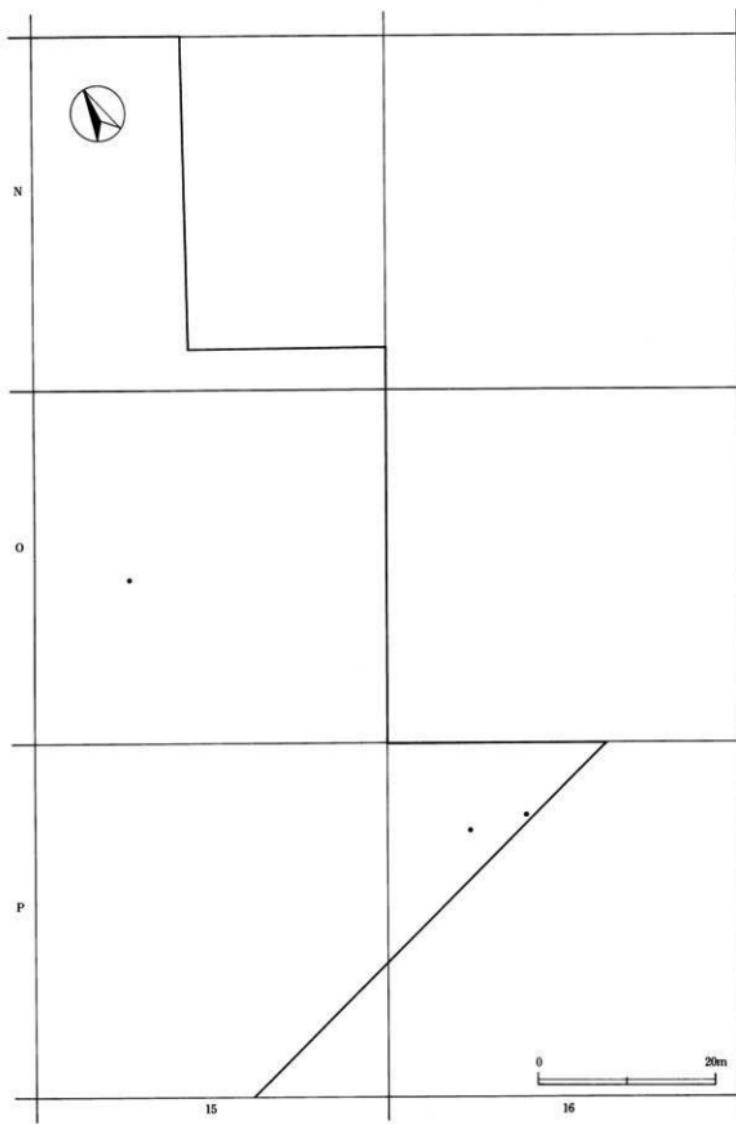
第81図 精円押型文土器出土状況図4 (O・P-11・12区)



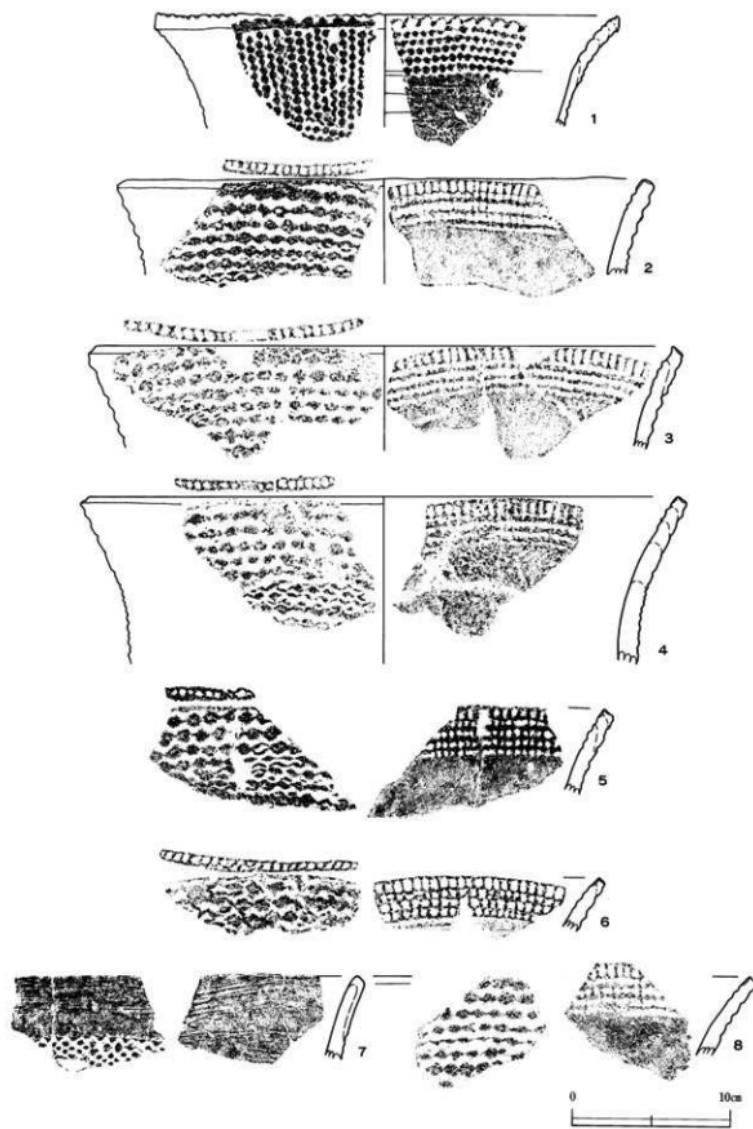
第82図 楊円押型文土器出土状況図5 (Q・R・S-11・12区)



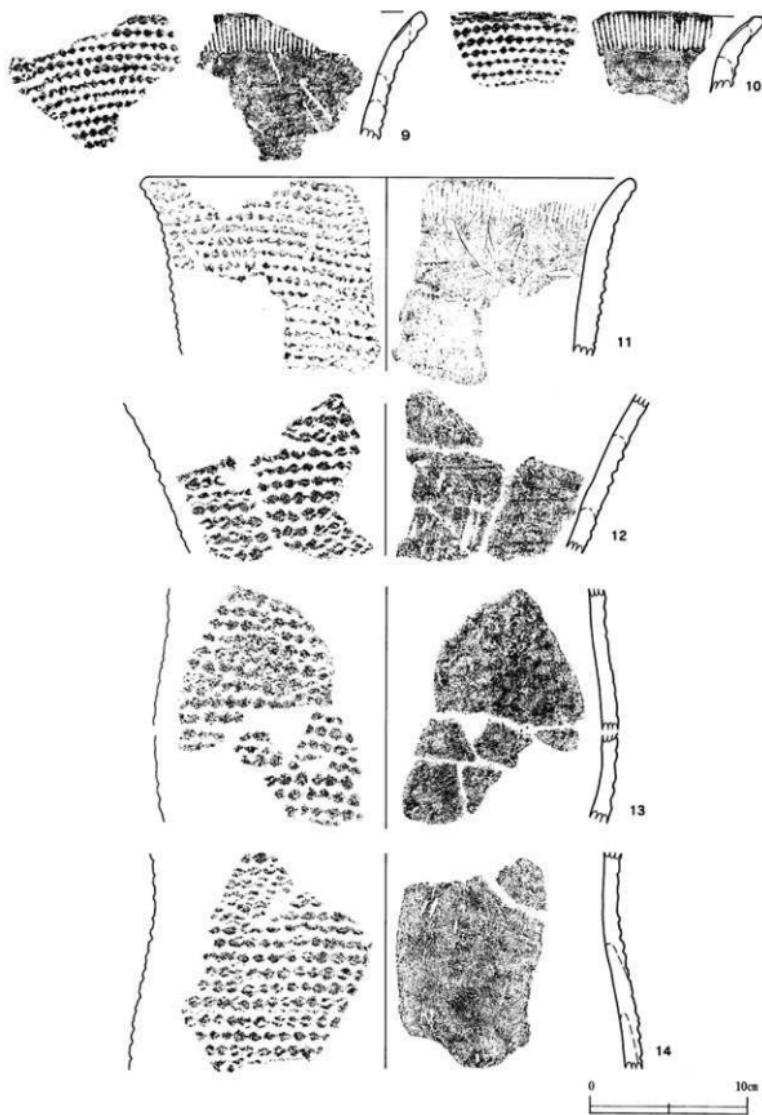
第83図 横円押型文土器出土状況図6 (P・Q・R-13・14区)



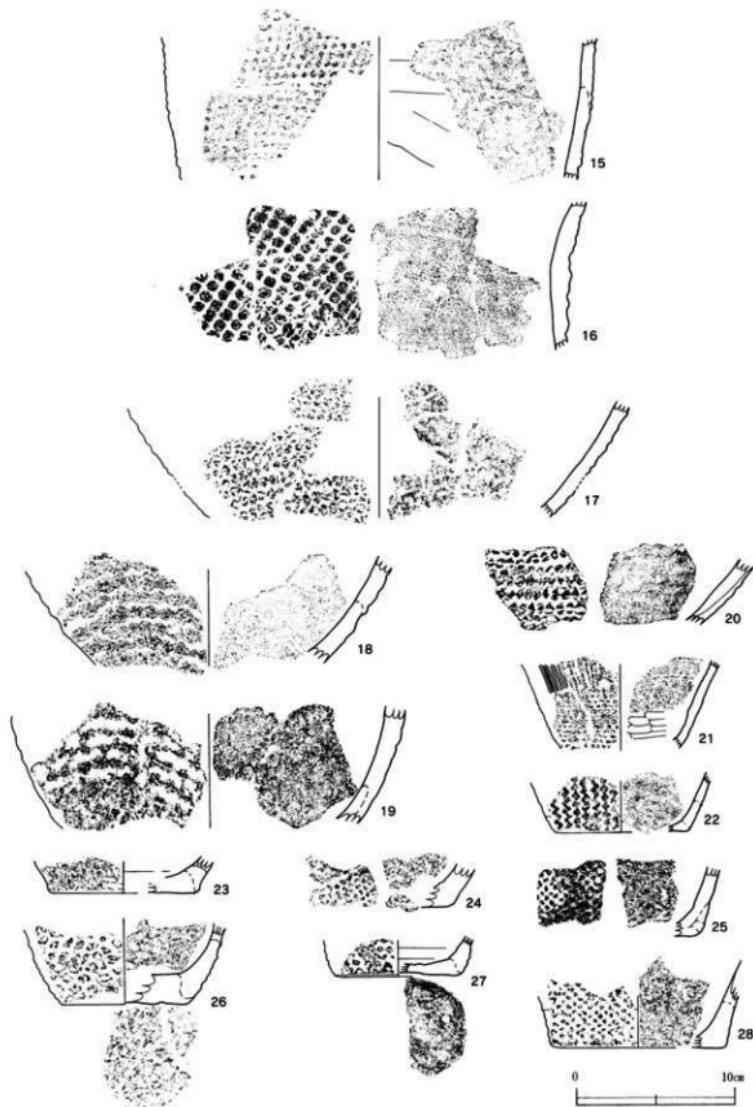
第84図 楊円押型文土器出土状況図7 (O・P-15・16区)



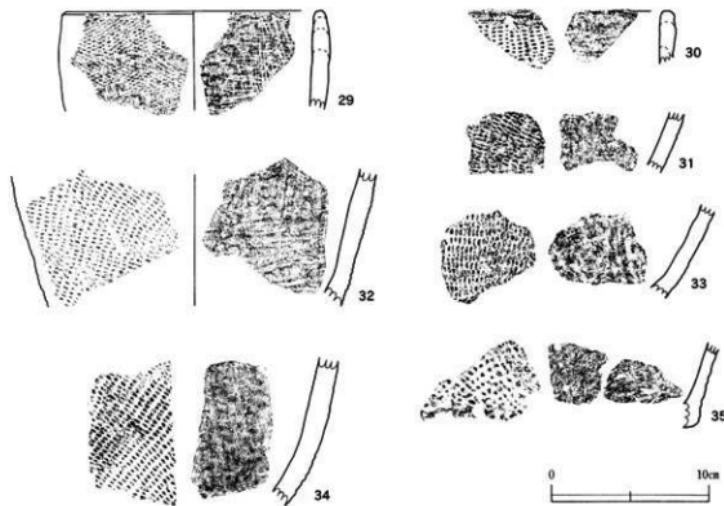
第85図 横円押型文土器実測図（1）



第86図 構内押型文土器実測図（2）



第87図 模内押型文土器実測図（3）



第88図 楊円押型文土器実測図（4）

一方、出土状況全体図から第7群は、主に標高262mから259mにかけての、R・S・9区からS-10区を中心とする発掘区画南側の区域に集中して出土している（第77図参照）。この区域は、第3群に分類した桑ノ丸式土器や第6群に分類した山形押型文が集中して出土した地域と重なっているのに対して、第2群に分類した下剥峯式土器や第4群に分類した円筒形条痕文土器が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

ii) 小結

この第7群の特徴を挙げると、

- ① 直行口縁の器形で、外器面に横走する楊円押型文を施すが、内器面には文様を施さないタイプの土器（第1類土器）。
- ② 外反口縁の器形で、外器面には横走する楊円押型文を施し、内器面には口縁部内面上段に短い原体条痕を、下段に横走する楊円押型文を施すタイプの土器（第2類第1種土器）。
- ③ 外反口縁の器形で、外器面には横走する楊円押型文を施し、口縁部内面には長めの原体条痕を1段のみ施すタイプの土器（第2類第2種）。
- ④ 外反口縁の器形で、外器面には口縁部上段に無文帯を設け、下段に横走する楊円押型文を施し、口縲部上端や内器面には文様を施さないタイプの土器（第2類第3種）。
- ⑤ 外反口縁の器形で、外器面には縦走する楊円押型文を施し、口縲部内面には上段に横位の刺突連点文を施し、下段に横走する楊円押型文を施すタイプの土器（第3類）

に分けることができそうであることを、この項では指摘しておく。

横円押型文土器観察表

標 本 番 号	場所 名	出土 区	目記	実測圖 番号	等	目種	品 位	地 土			片頭部 調査	内部面 調査	色 調		備 考
								石英	長石	角閃石	クロンキ 石	砂粒	外器底 調査	内器底 調査	
1	Q-1-4	231	77	11	直	深鉢	口縁・削部	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	ナデ	口徑29.6cm
2	R-0-9	1200	30	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	細赤褐色 細赤褐色	細赤褐色
3	Q-0-9	4558	94	直	深鉢	口縁・削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	口徑37.1cm
4	R-0-9	684	95	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	口徑38.0cm
5	R-0-9	1221	94	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	新郎径33.6cm
6	R-0-9	1295	95	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	
7	R-0-9	2545	96	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	
8	R-0-9	2068	102	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	
9	R-0-9	5669	92	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色 細黃褐色	
10	S-0-9	1106	91	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	細赤褐色 細赤褐色	
11	R-0-9	543	94	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ+ナデ	暗赤褐色 細茶褐色	口徑33.0cm
12	R-0-9	265	99	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ+ナデ	黄褐色 細黃褐色	
13	S-0-9	1327	100	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	黄褐色 細茶褐色	新郎径32.8cm
14	R-0-9	1217	91	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色 細茶褐色	新郎径33.0cm
15	Q-1-4	711	87	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	ハケ+ナデ	細茶褐色 細茶褐色	
16	Q-1-4	2198	106	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	新郎径27.6cm
17	S-0-9	541	32	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	口徑31.0cm	
18	R-0-9	5659	95	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ+丁寧なナデ	暗褐色 細茶褐色	
19	S-0-9	495	97	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗褐色 細茶褐色	新郎径23.6cm
20	S-0-9	1748	95	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗褐色 細茶褐色	
21	R-0-9	5623	101	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗褐色 細茶褐色	新郎径25.2cm
22	S-0-9	5323	79	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗褐色 細茶褐色	
23	S-0-9	3424	76	直	深鉢	削部下半	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	ナデ	暗褐色 細茶褐色	新郎径2.6cm
24	Q-1-3	94	16	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	丁寧なナデ	明黃褐色 明黃褐色	直径8.0cm
25	R-0-9	5341	66	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	直径9.4cm
26	S-0-9	2613	85	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	
27	R-0-9	2615	85	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	直径8.0cm
28	R-0-9	2132	65	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	直径7.4cm
29	R-0-9	47	67	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒・微細	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	直径6.0cm
30	P-1-3	238	87	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ+ナデ	明黃褐色 明黃褐色	口徑6.0cm
31	Q-1-4	2443	82	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	
32	S-1-0	2650	79	直	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	丁寧なナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	
33	Q-1-0	5307	78	直	深鉢	削部下半	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	
34	S-1-1	193	72	直	深鉢	削部下半	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ+ナデ	明黃褐色 明黃褐色	新郎径2.4cm
35	R-1-3	2336	79	直	深鉢	削部下半	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	
36	S-1-0	4902	74	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	明黃褐色 明黃褐色	
37	R-0-6	92	87	直	深鉢	削部	○	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黃褐色 明黃褐色	

⑧ 第8群 条線押型文土器（第89～94図）

i) 概要

第8群に属する土器は、33点の土器片が出土し、その内の22点、3個体を資料化した。

第8群は、器表面に条線状の押型文を施す土器である。第10地点からは2個体分が出土した。

第8群に属する土器形態の特徴は以下のとおりである（第94図1～3）。まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は平坦面を作り出す。口縁部は外側に開き、脣部はほぼ直線的にそぼまる。底部は接合例がないため不明であるが、丸底的な尖底である3を同一個体と判断して、掲載した。ところで、口縁部内面の形態は、不明瞭ながらも稜を形成するタイプである。さて、土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約1cmである。

ところで第8群の文様が施される部位は、外器面では出土している口縁部上端から脣部上半にかけて部分で、内器面では口縁部内面である。そのうち外器面の文様は、棒状工具に螺旋状の条線を施したものをお原体として横位にころがしてつけたもので、本類の指標である。また、口縁部内面の文様は、上段に短い原体条痕を下段に横走する楕円押型文を施す土器で、口唇上端部は無文である。

さて土器の胎土は、石英・長石・角閃石で構成されている。一方、土器の調整方法は外器面はナデ調整が、内器面は木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行っている。土器の色調は、外器面が茶褐色で、内器面が暗茶褐色から茶褐色であった。

ここで出土状況全体図を注目すると、第8群土器はR・S-9区を中心として出土するものの、集中域はなく分散して出土していることが分かる。また、最長約220m離れて出土した土器が接合していることや、約150m離れて出土したほぼ同じ標高地の土器が接合していることも注目できる（第89図参照）。

ii) 小結

この第8群の特徴を挙げると、外器面に横走する押型文を施し、口縁部内面には上段に原体条痕を、下段に横走する楕円押型文を施すタイプの土器である、と指摘できる。

⑨ 第9群 変形撚糸文土器（第95～101図）

i) 概要

第9群に属する土器は、90点の土器片が出土し、その内の16点、11個体を資料化した。

第9群は、器表面に撚糸文を施す土器である。

第9群に属する土器形態の特徴は以下のとおりである（第101図1～11）。まず、口縁部形態は平口縁である。口縁部は外側に大きく開き、頭部はすばまり、脣部上半で膨らみ、脣部下半で再びすぼまる器形である。さて、土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約0.6cmである。

一方、文様が施される部位は、出土している口縁部から脣部下半までの外器面と、口縁部内面とである。そのうち外器面の文様は、4条から5条の撚糸を縱位あるいは横位にころがしてつけたものである。口縁部内面には横走する撚糸文を施した土器である。これが、本類の指標である。

さらに土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石・クロウンモで構成されており、中にクロウンモが特に多く含まれる土器が見受けられた。

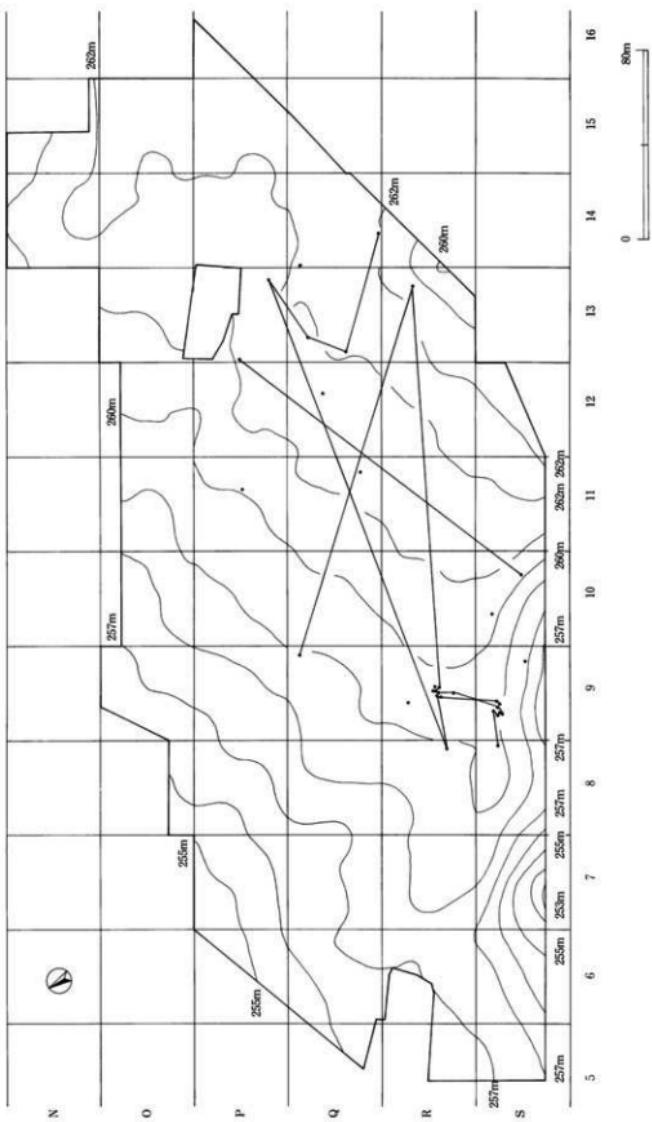
ところで土器の調整方法は外器面はナデ調整が、内器面は木製工具による横方向のハケ目調整の後にナデ調整を行っているのが主流である。土器の色調は外器面が暗茶褐色あるいは明黄褐色、内器面が暗黄褐色や茶褐色そして暗赤褐色が主流であった。

さて出土状況全体図から第9群は、主にQ・R-13区を中心とする、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩傾斜地に集中して出土している（第95図参照）。

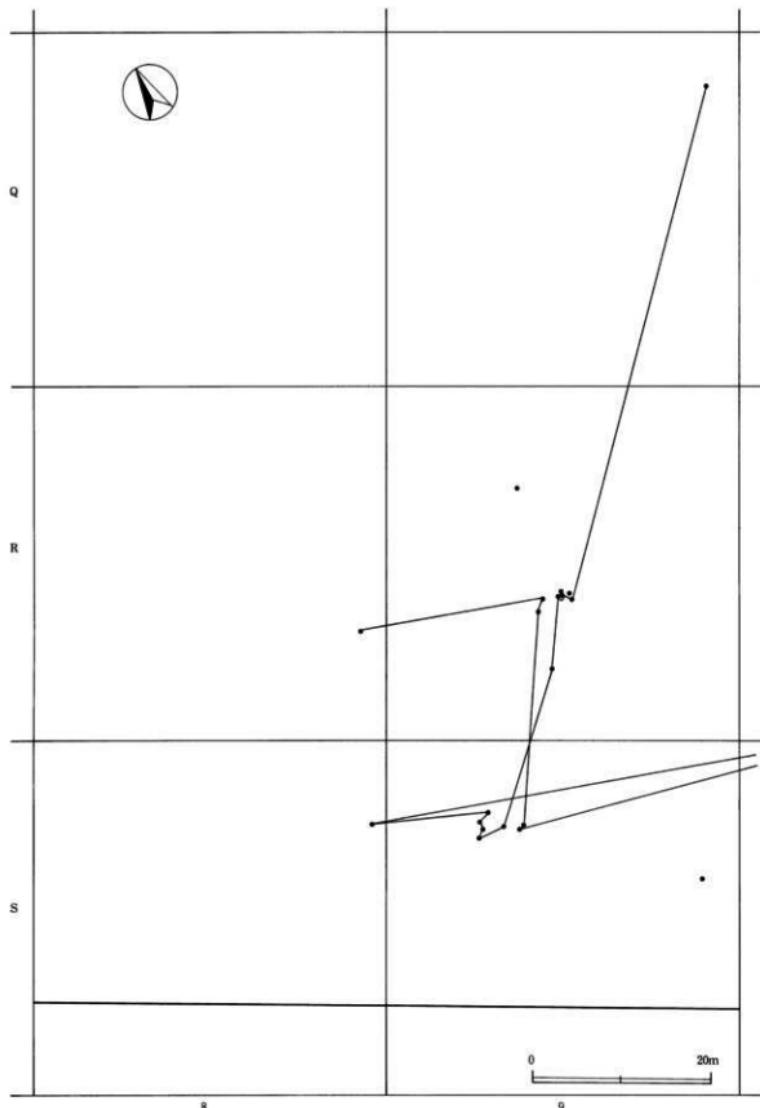
この地域は、第2群や第4群そして第5群が集中して出土した地域と重なっている一方で、第3群や第6群そして第7群が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

ii) 小結

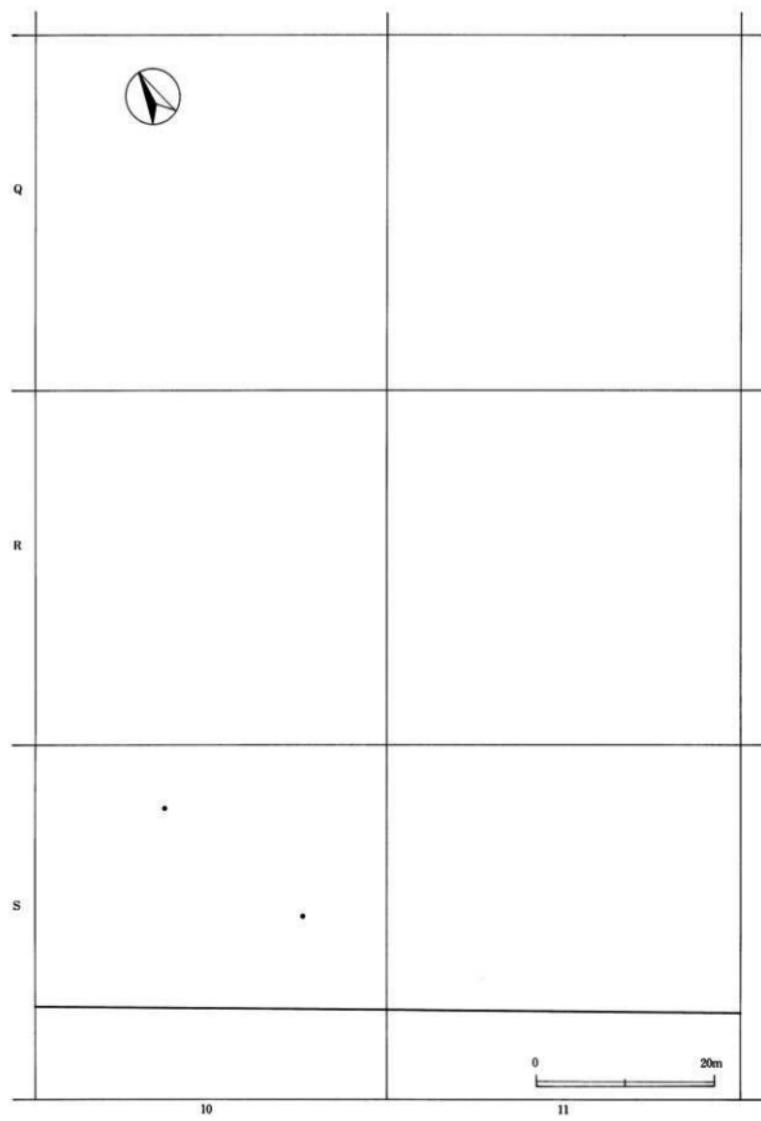
この第9群の特徴を挙げると、口縁部が大きく開く器形で、文様は外器面に横走、あるいは縦走する撚糸文を施し、口縁部内面には横走する撚糸文を施している、と指摘できる。



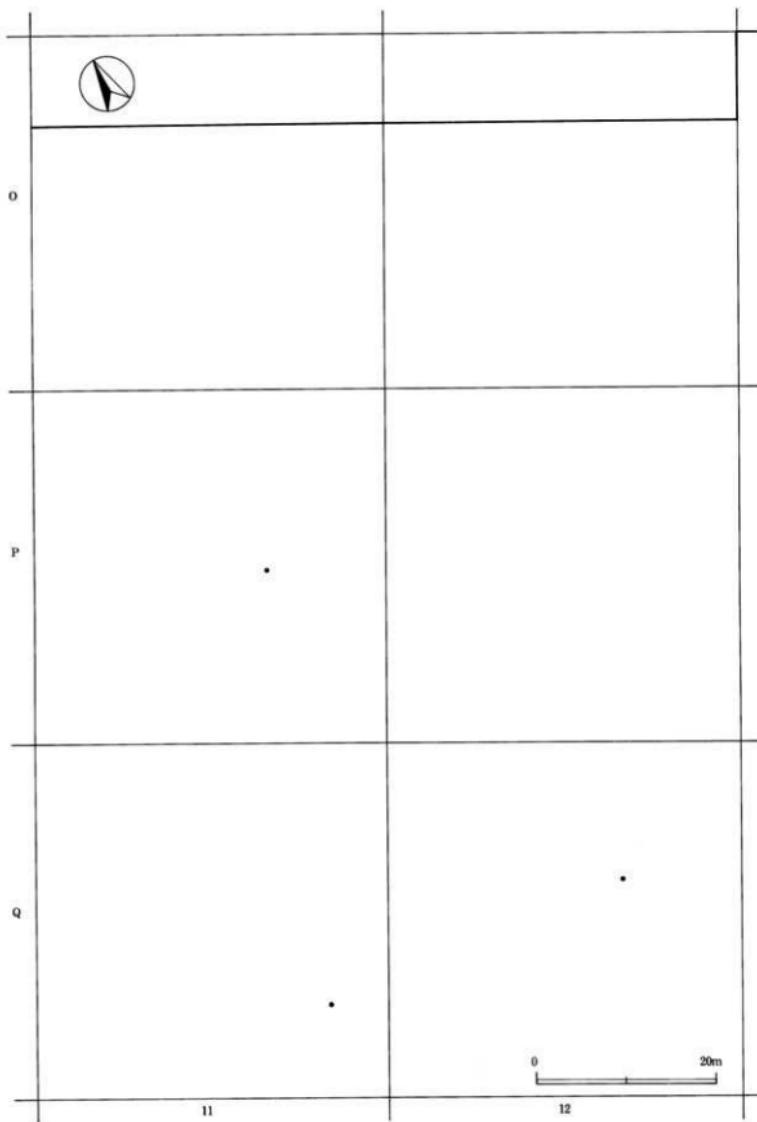
第89圖 条縹押文土器出土狀況全體圖



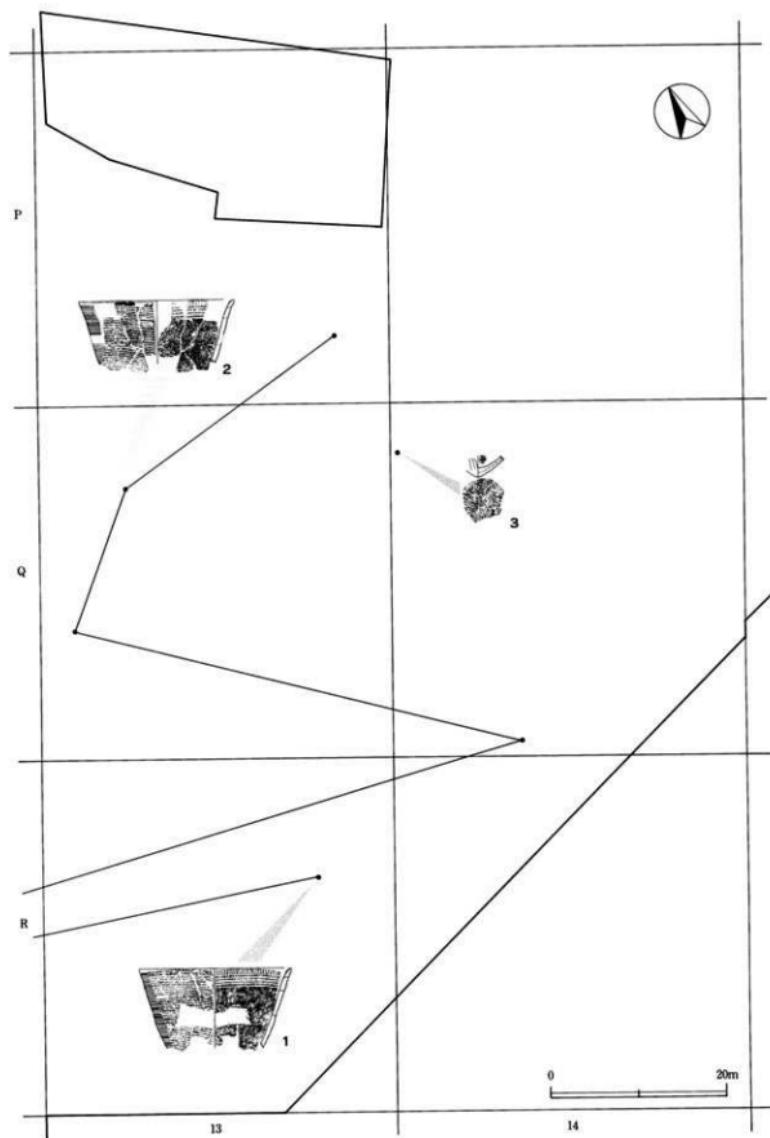
第90図 条線押型文土器出土状況1 (Q · R · S - 8 · 9区)



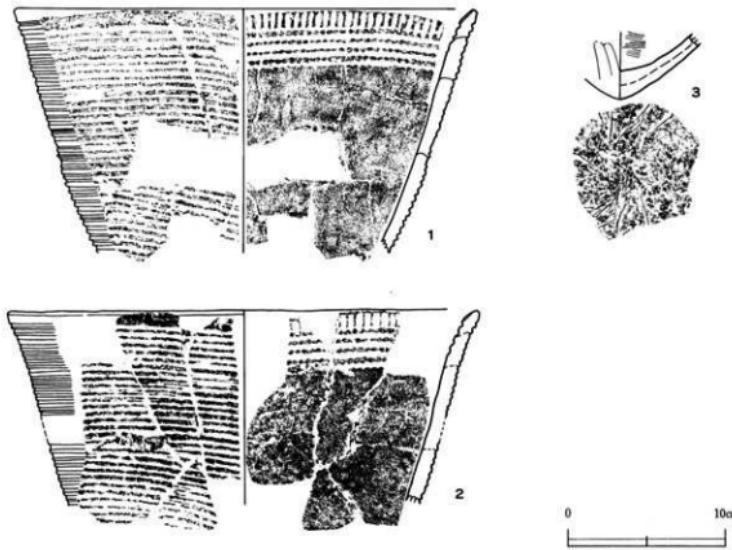
第91図 条線押型文土器出土状況2 (Q・R・S-10・11区)



第92図 条線押型文土器出土状況3 (O・P・Q-11・12区)



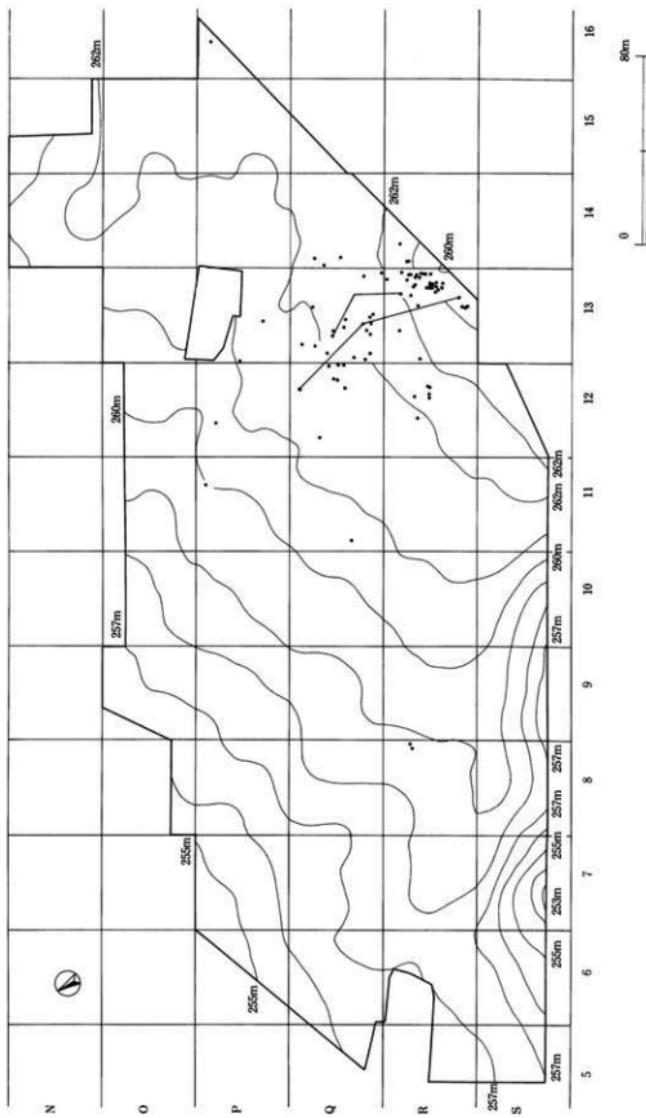
第93図 条線押型文土器出土状況4 (P・Q・R-13・14区)



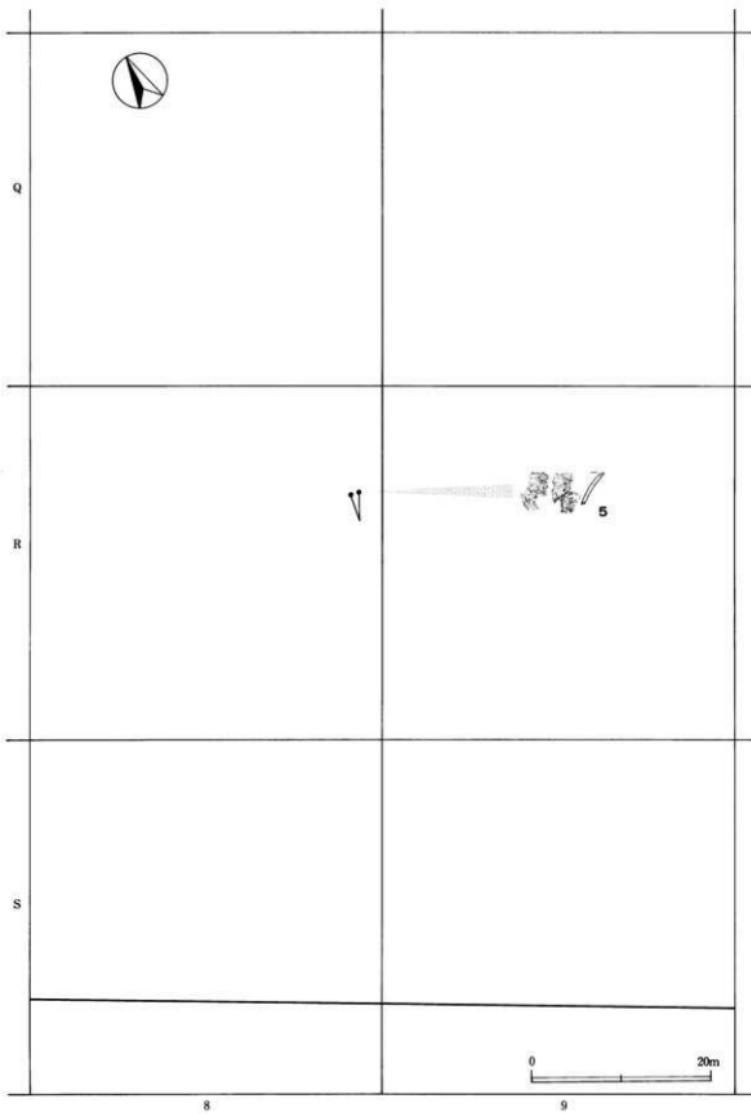
第94図 条線押型文土器実測図

条線押型文土器観察表

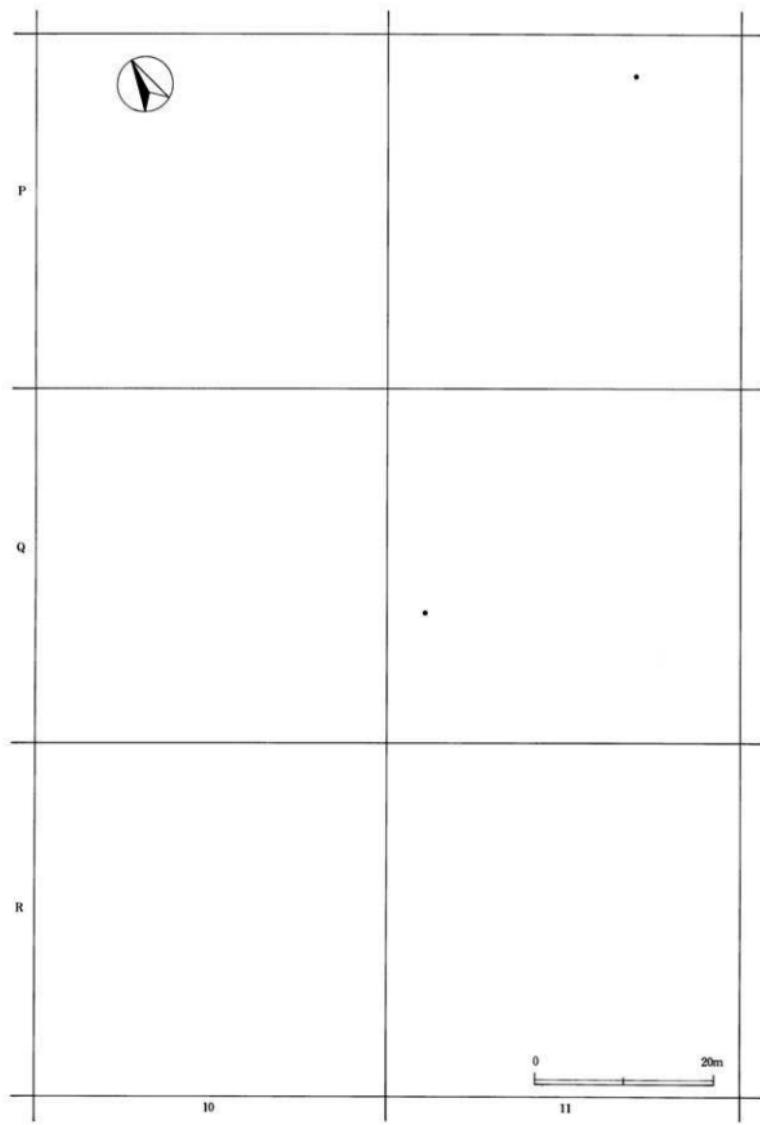
標本 番号	部員 番号	出土 地区	日記 番号	実測図 番号	幅 mm	基種 種類	経位	地　土				外部面 調査	内部面 調査	色　調		備考
								石英	長石	角閃石	クロウンセ			外表面	内表面	
1 94 回	Q-0.9	6415	V1													
	R-0.9	4850	V1													
	R-0.9	4861	V1													
	R-0.9	4863	V1													
	R-0.9	5408	V1													
	R-1.3	4030	V1													
	S-0.9	299	122	泥鉢	口縁～胴部	○	○	○				繊維・凹凸	ナゲ	ヨコハナーナゲ	茶褐色	口径29.4cm
	S-0.9	662	V1													
	S-0.9	663	V1													
	S-0.9	1364	V1													
2	S-0.9	665	V1													
	S-0.9	1864	V1													
	P-1.3	452	V1													
	Q-1.3	10252	V1													
	Q-1.3	10275	V1													
3 94 回	Q-1.4	2865	V1													
	R-0.8	103	123	泥鉢	口縁～胴部	○	○	○				繊維・凹凸	ナゲ	ヨコハナーナゲ	茶褐色	口径29.6cm
	R-0.8	260	V1													
	R-0.9	599	V1													
	S-0.9	582	V1													
	S-0.9	583	V1													
Q-1.4	2000	124	V1	漆鉢	底盤	○	○	○	○	○	○	繊維・凹凸	ハケーテナゲ	ヨコハナーナゲ	茶褐色	底面褐色



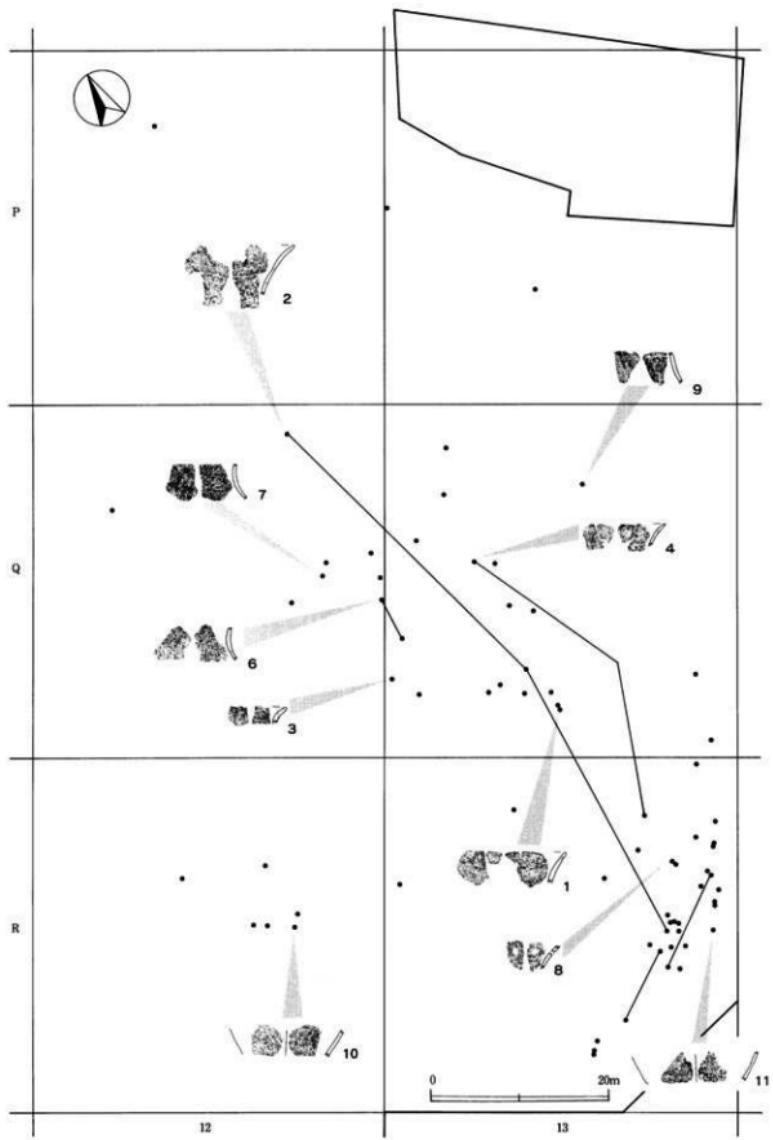
第95図 変形燃系文土器出土状況全體図



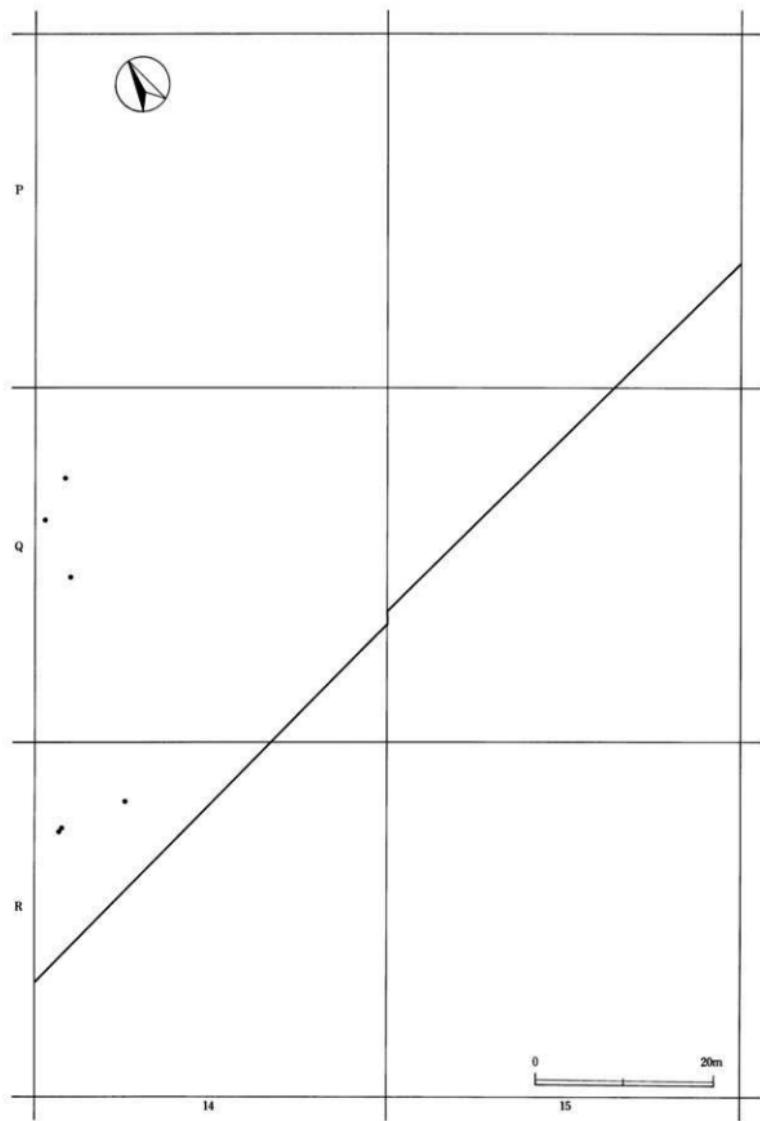
第96図 变形撚糸文土器出土状況1 (Q・R・S-8・9区)



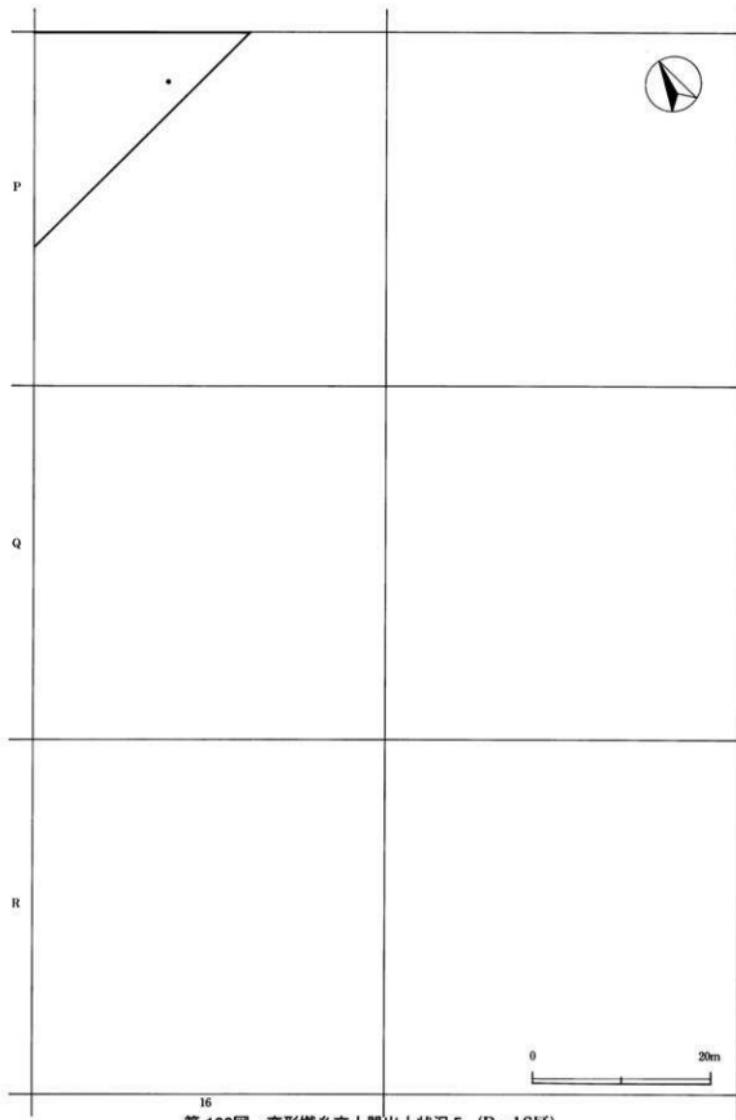
第97図 变形燃系文土器出土状況2 (P・Q・R-10・11区)



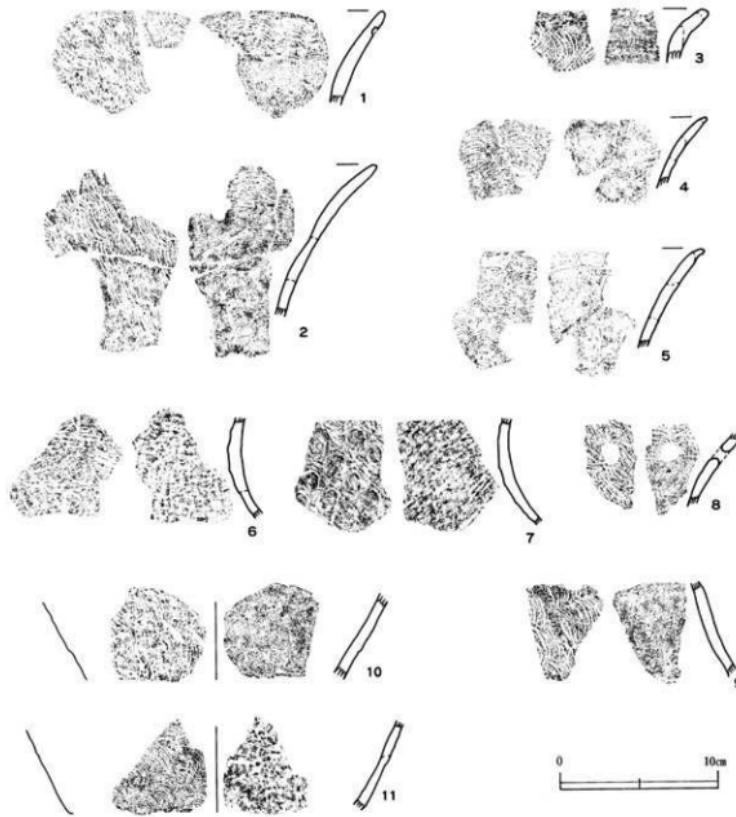
第98図 变形燃系文土器出土状況3 (P・Q・R-12・13区)



第99図 变形燃系文土器出土状況4 (P・Q・R-14・15区)



第100図 変形撚糸文土器出土状況5 (P-16区)



第101図 变形燃系文土器実測図

变形燃系文土器観察表

種類 番号	直方 番号	出下 番号	外記	実測値	号	器種	形状	第一			第二			外壁部		内部部		備考	
								直角	斜直	斜曲	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
1	Q-1-3	0608		176	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	備考孔あり
2	Q-1-2	0609		176	1	深鉢	口縁一側傾	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
3	Q-1-3	0607		176	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
4	Q-1-3	0539		177	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
5	R-1-2	0538		176	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
6	R-0-9	0518		174	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
10	Q-1-2	0507		172	1	深鉢	口縁一側傾	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
7	Q-1-2	0522		171	1	深鉢	口縁一側傾	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
8	Q-1-2	0567		176	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	備考孔あり
9	Q-1-2	0603		176	1	深鉢	口縁一側傾	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	
10	R-1-2	0521		176	1	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	備考孔あり
11	R-1-2	0520		176	1	深鉢	口縁一側傾	○	○	○	○	○	○	直角	斜直	斜曲	直角	斜直	備考孔あり

⑩ 第10群 手向山式土器（第110～112図）

i) 概要

第10群に属する土器は、215点の土器片が出土し、その内の53点、20個体を資料化した。

手向山式土器は、「口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部中央よりやや下方で張り出し屈曲し、上げ底気味の小さな平底にいたる」と定義されている寺師見國氏により設定された、土器である。鹿児島県大口市羽月に所在する手向山遺跡から出土した土器を標識とする土器である。

1から16は深鉢形土器である（第110・111図）。定義の範疇に入る土器は6～15である。そのうち6～10は、深鉢形土器である。屈曲部より口縁部側が大きく外反する器形的特徴を呈する。6の口縁部外面には縱位方向に、口縁部内面には横位方向に山形押型文を施す土器である。口唇部上端部には横位方向に沈線文を施している。7・8は、外器面に縱位方向に山形押型文を施す胴部である。7には突帯が横位方向に巡り、突帯上には刺突点文が施される。9・10は屈曲部上位の胴部である。外器面には、縱位方向に沈線文が施されている。一方11～16は、小型深鉢形土器の胴部である。13には屈曲部下位に縱位方向の山形押型文土器を施す。11と15は、屈曲部に刺突点文を施す突帯を横位方向に巡らす。また、外器面には沈線による菱形文を施している。16は、縱位方向に押し引き沈線文を施す土器である。

注目できるのは、1～5の土器である。いずれも内傾する口縁部であり、手向山式土器の器形的特徴からはずれる土器である。しかし、屈曲部の製作技法や内器面の調整方法から、手向山式土器の範疇に入る土器であると判断した。外器面には右下がりの沈線文を施し、口唇上端部には刻みを施す土器である。

さて、17～20の土器は壺形土器である（第112図）。器形的特徴から、以下の2タイプに分類できる。

まずa類土器は、17～19のように口縁部が強く外反するタイプの壺形土器である。このタイプに属する土器には、口縁形態がしっかりした波状口縁を呈する土器と、口縁形態が緩やかな波状口縁を呈する土器と、ほぼ平口縁を呈する土器がある。波状口

縁を呈する土器は、4か所の波頂部には瘤状の突起を設け、口縁部外面にはこの突起にかぶせるようにして、刻み目を施した2条の突帯を横位に巡らしている。いずれの土器も、頸部はすぼまり、肩部はしっかりと張る器形を呈する。このa類土器の施文的特徴としては、先が細い棒状工具を使用して、頸部に菱形文を順次重ねていく文様構成を施す土器である（17・18）。

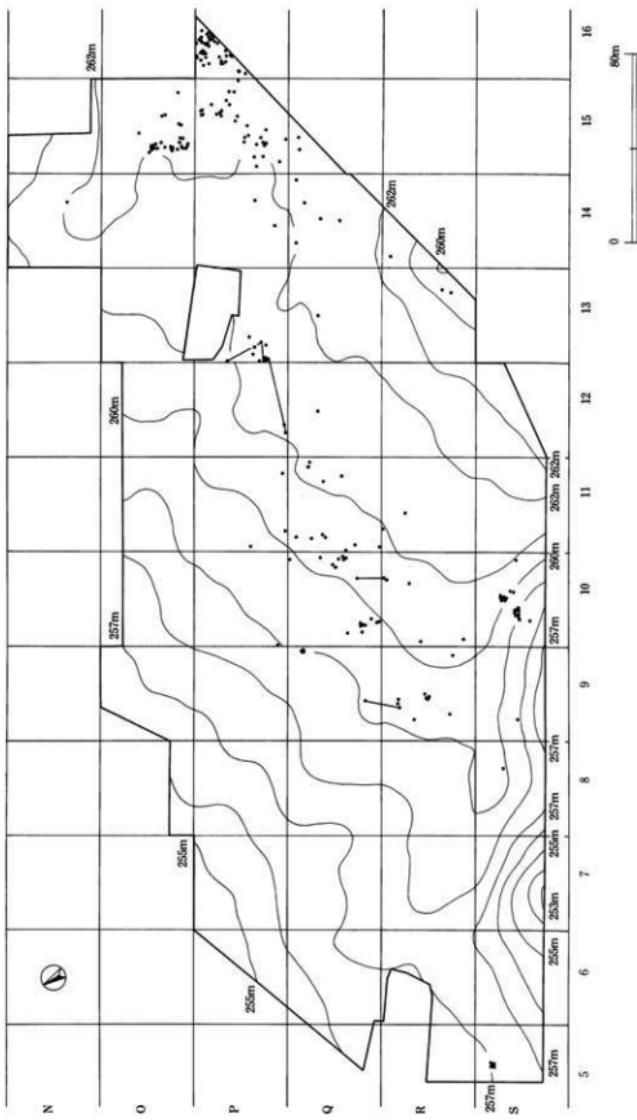
一方b類土器は、口縁部がほぼ直行する、無頸壺に近いタイプの壺形土器である。肩部はなで肩を呈する土器である。このb類土器の施文的特徴としては、先が細い棒状工具を使用して、頸部に同心円状の文様を施す土器である（20）。

このように、手向山式土器の段階には既に壺形土器に多種類の器形が認められることは、注目できる。

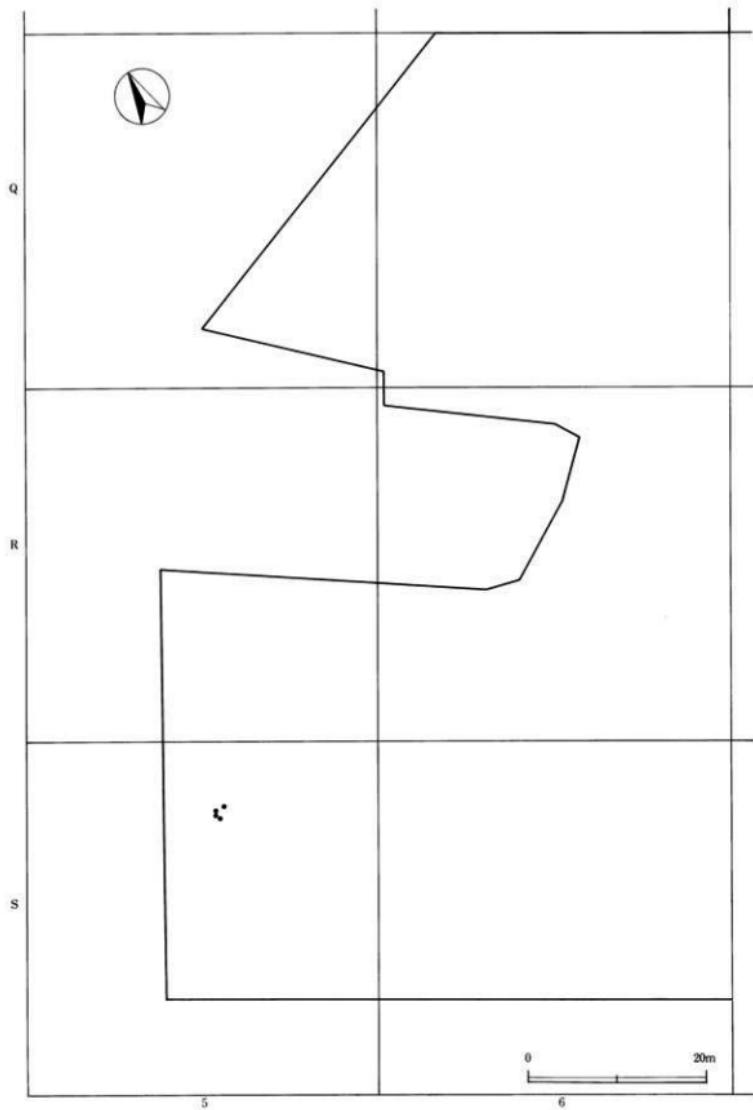
さて、手向山式土器の土器胎土中の鉱物は石英・長石で構成され、角閃石を含む土器とクロウンモを含む土器とがあった。深鉢形土器の内6～14の土器はクロウンモが特に多く含有していた。これに対して、1～5の土器や11・13・15・16の土器は、クロウンモは確認できなかったものの、角閃石の含有は認められた土器である。また、土器の調整方法は、外器面、内器面共にハケ目調整の後にナテ調整を行うことが主流である。中には丁寧なナテ調整を行う土器も見受けられた。なお、土器の色調は外器面が暗茶褐色や茶褐色を、内器面は茶褐色を呈す土器が主流であった。

ところで、出土状況全体図から第10群は、広範囲に分布していることが看取できるが、特に、O-15区やP-15・16区を中心とする、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地にあたる、区域に集中して出土している（第102図参照）。

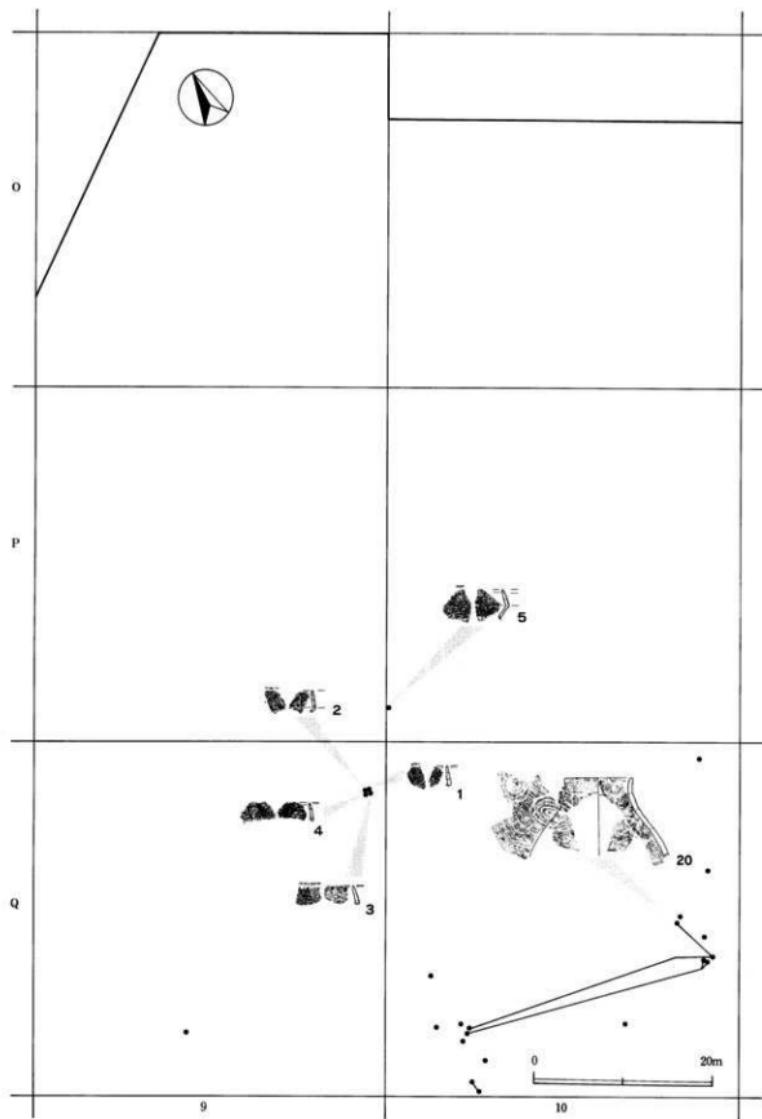
したがって第10群の出土分布の状況から、これらの土器を使用した人々は、P-16区より東側の発掘区域外にかけて、生活の場を設けていたことが想定できる。また壺形土器は、出土状況図（第103図～第109図）から深鉢形土器と同様に広範囲にわたり出土している。



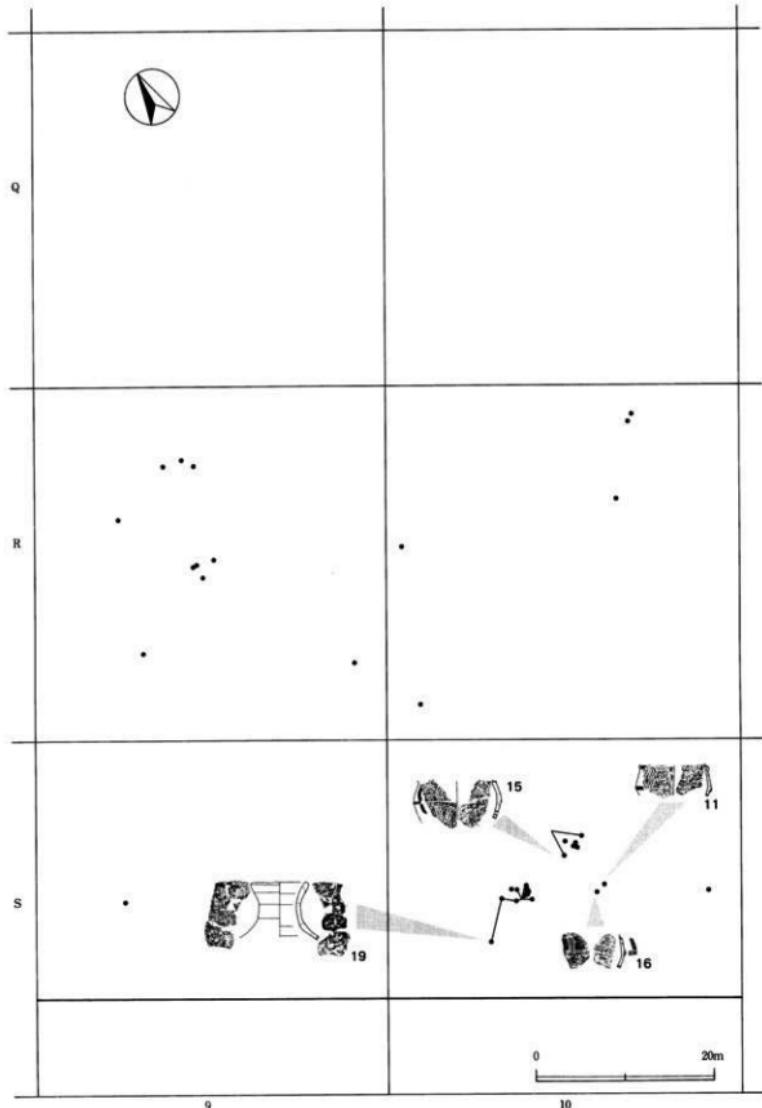
第102図 手向山式土器出土状況全図



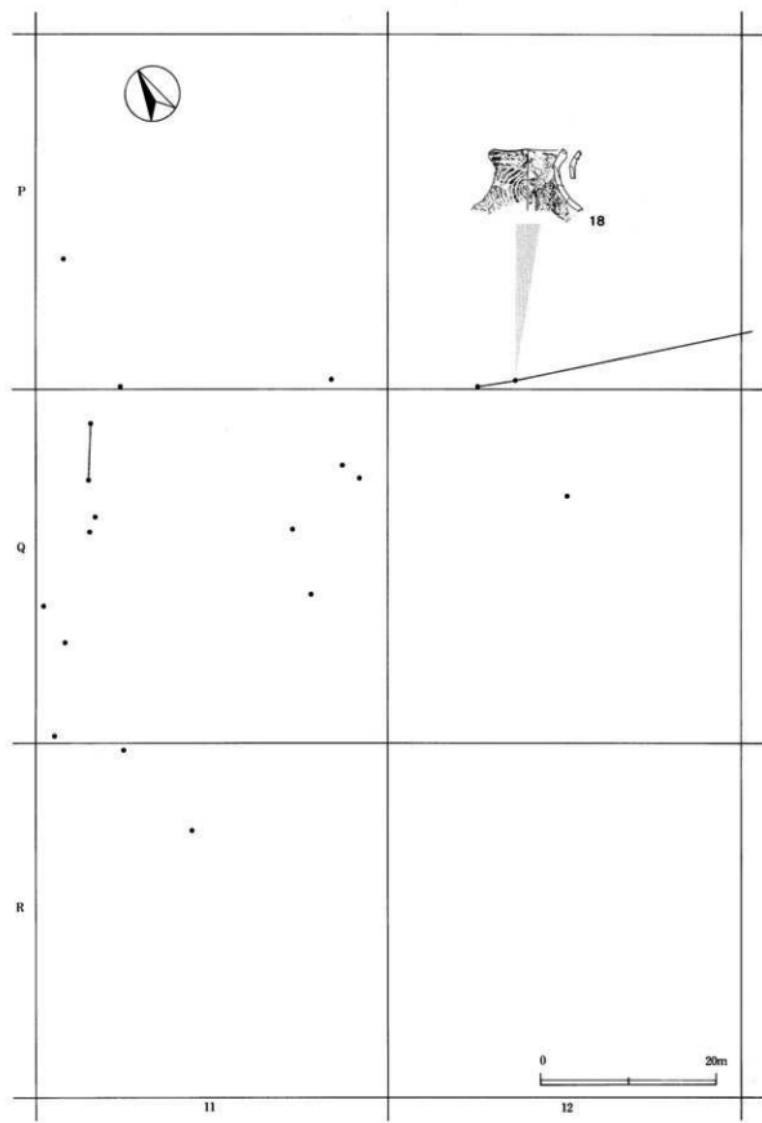
第103図 手向山式土器出土状況1 (Q・R・S-5・6区)



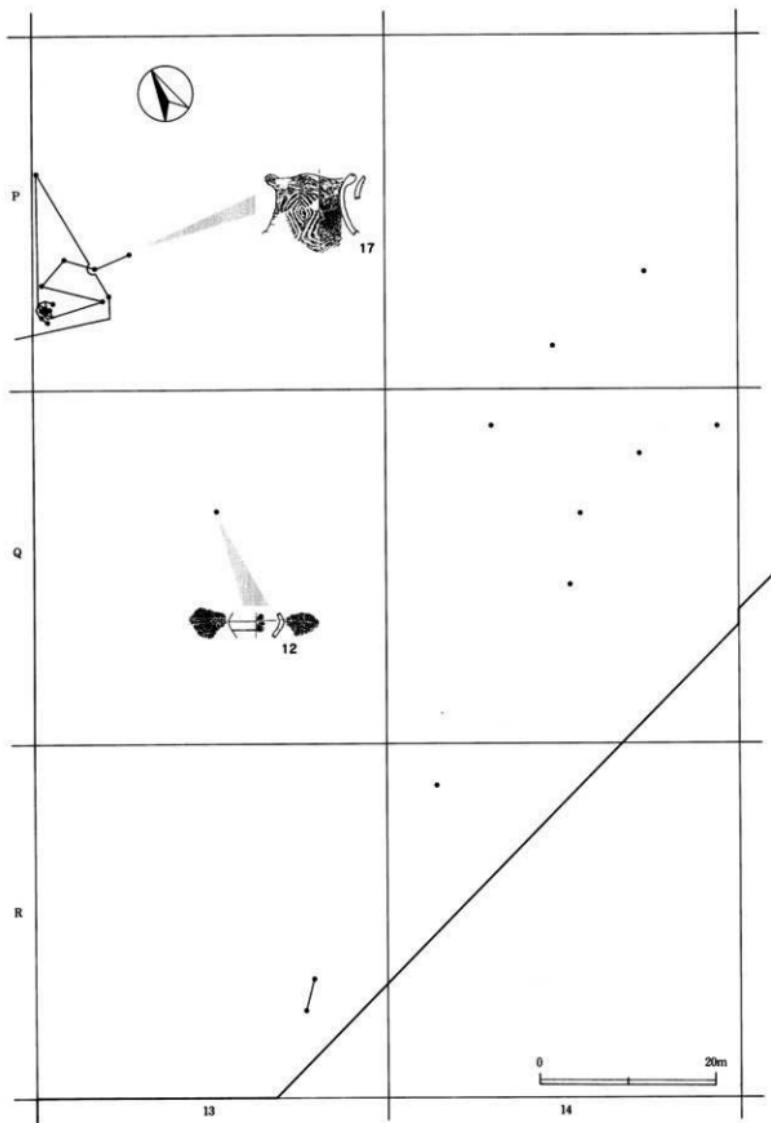
第104図 手向山式土器出土状況2 (P・Q-9・10区)



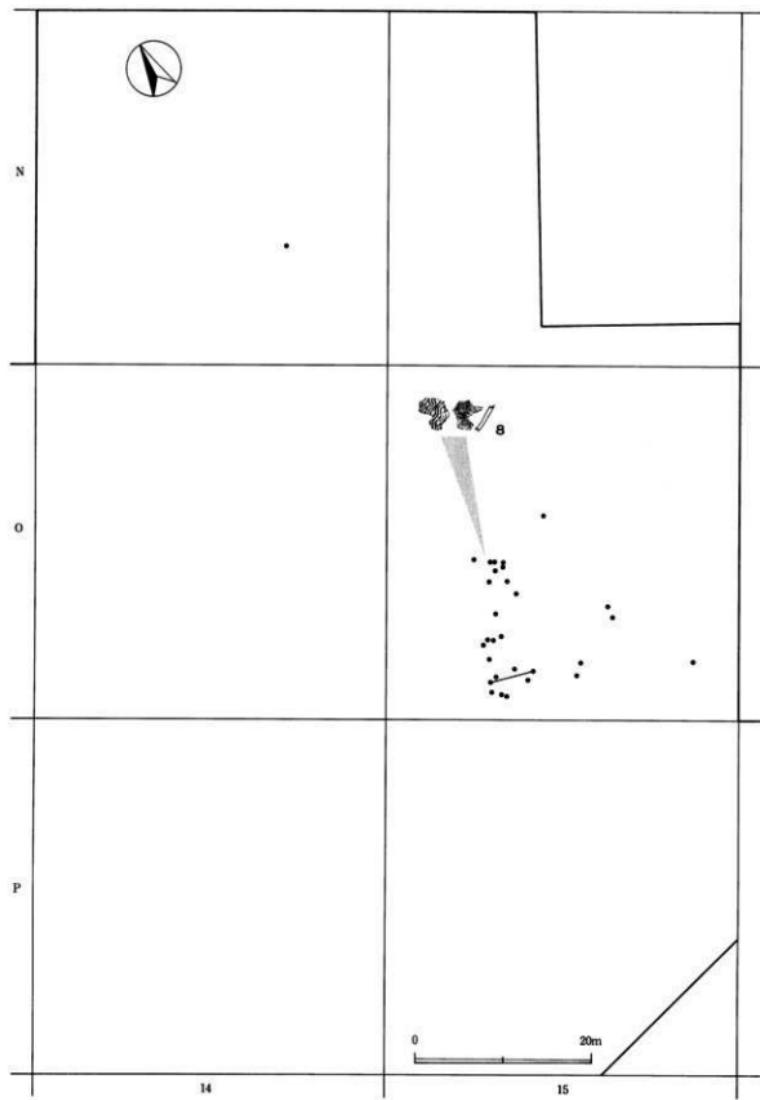
第105図 手向山式土器出土状況3 (R・S・9・10区)



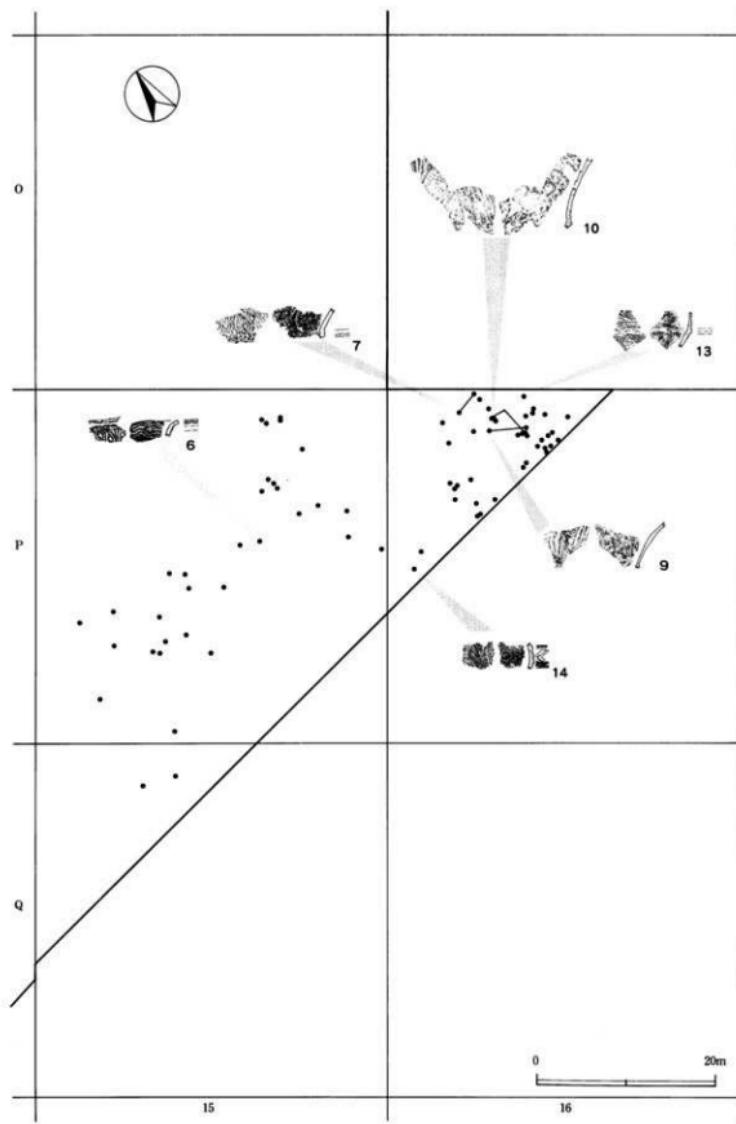
第106図 手向山式土器出土状況4 (P・Q・R-11・12区)



第107図 手向山式土器出土状況5 (P・Q・R・13・14区)



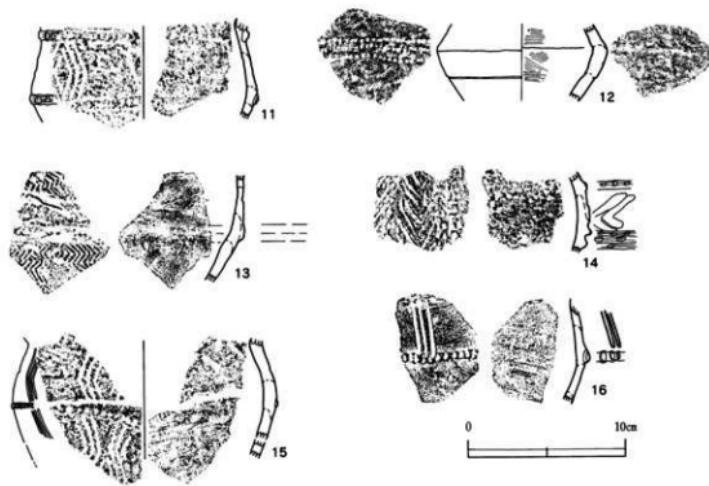
第108図 手向山式土器出土状況6 (N・O・P-14・15区)



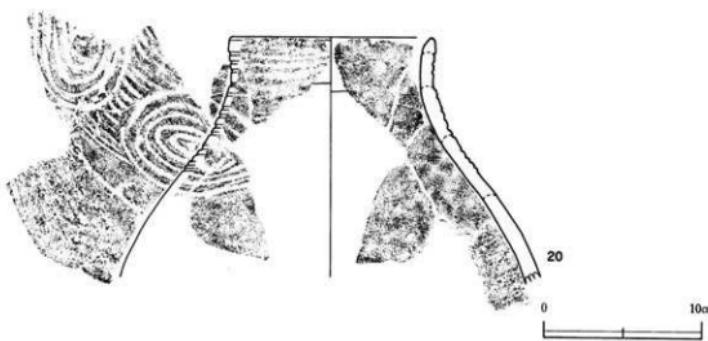
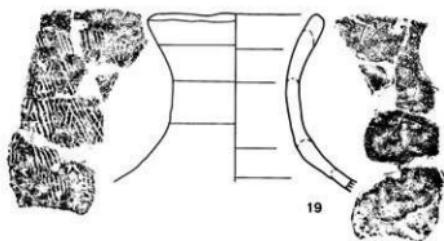
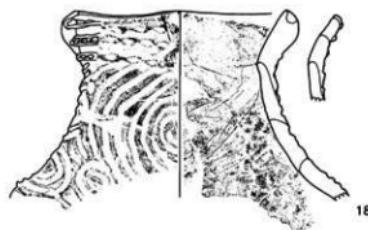
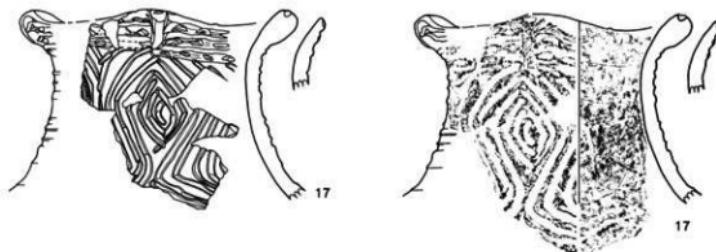
第109図 手向山式土器出土状況 7 (O・P・Q-15・16区)



第110図 手向山式土器実測図（1）



第 111図 手向山式土器実測図（2）



第112図 手向山式土器実測図（3）

手向山式土器觀察表

⑪ 第11群 手向山式類似土器 (第116図1~5)

i) 摘要

第11群に属する土器は、14点の土器片が出土し、その内の8点、3個体を資料化した。

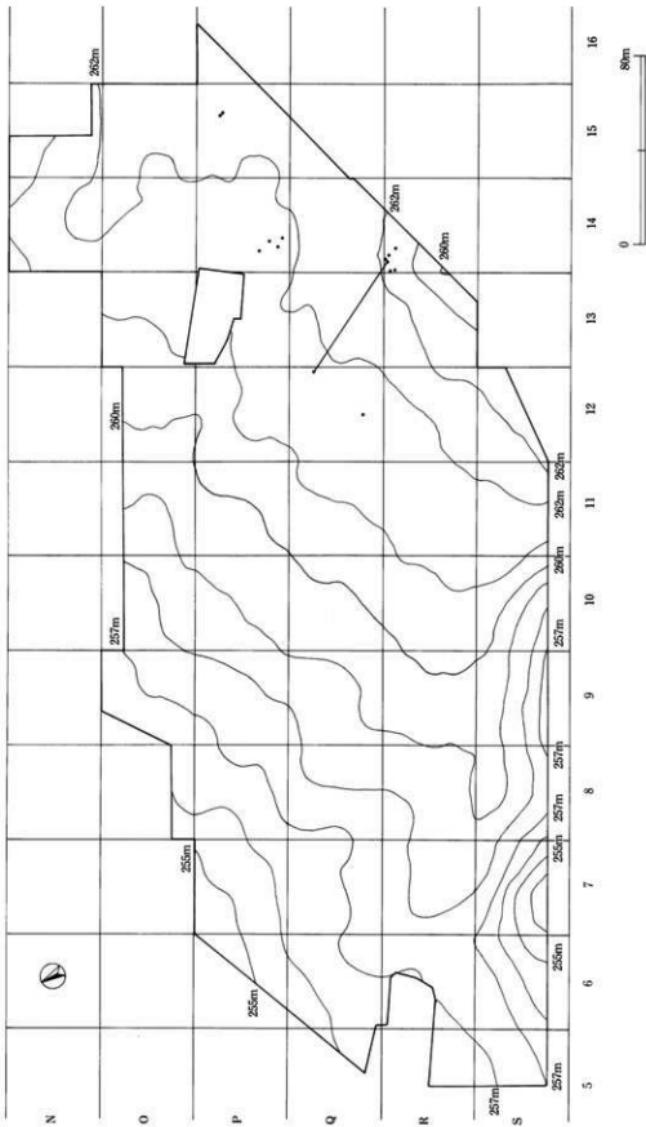
第11群は、次に述べるよう 犀形的にも、施文的にも様々な要素が見られる土器を集めた類である。

1は、口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が若干内彎して、口唇部が内傾する平坦面を作り出す。という土器である。外器面には、貝殻腹縫部を使用して、縦位方向に押引波状文を施文をする。この土器は、器形的には桑ノ丸式土器の範疇に属する土器である。しかし、縦位方向に貝殻を押し引いて施文する方法は、厳密には桑ノ丸式土器の定義の中にはない。しかも、縦位方向に波状文を施す文様構成がもつイメージは、手向山式土器の屈曲部位より上の部分に施される「間延びした山形押型文」を意識したものであると判断して、本類に含めた。

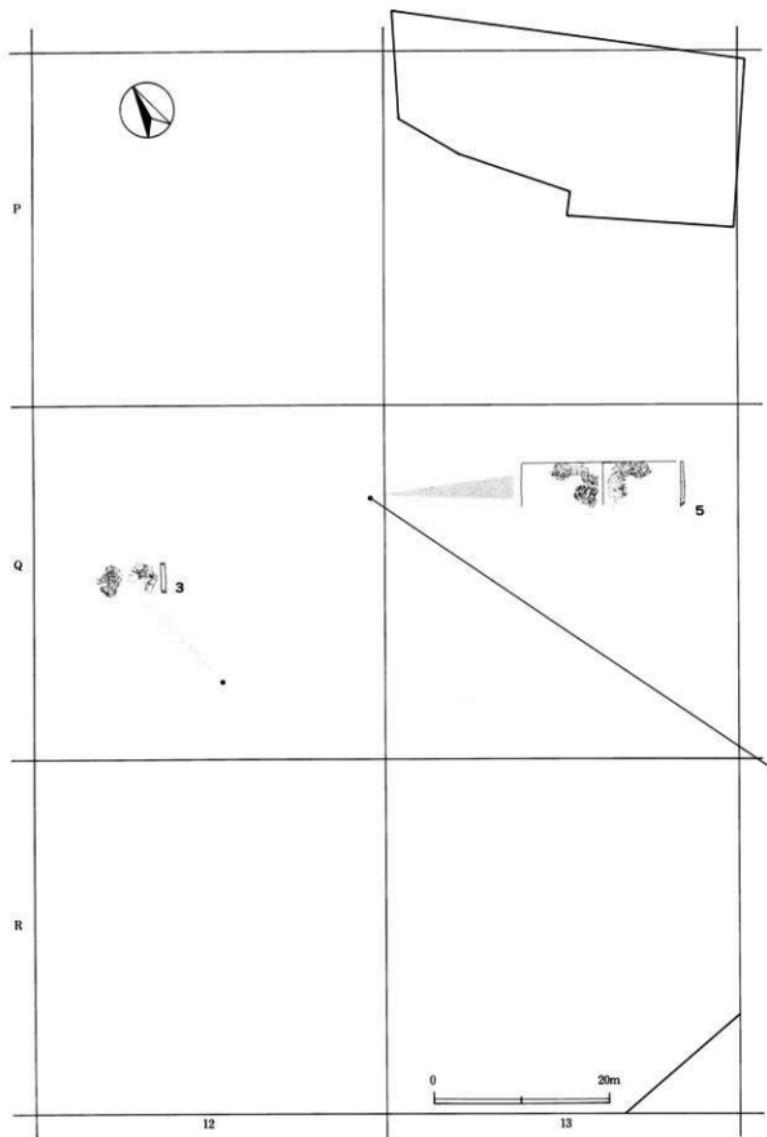
2から5の土器の器形的特徴としては、口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は直行して、口唇部は舌状をなす点が挙げられる。施文的特徴としては、外器面には、先が尖った棒状工具を使用して、縱走する押し引き羽状文あるいは、垂下する沈線文を施すことが指摘できる。一方、内器面には口縁部内面に縱走する押し引き羽状文を施す点が挙げられる。

これらの土器は、器形的には微細山形押型文土器などの範疇に属する土器である。しかし、口縁部内面に山形押型文を意識した施文を施すことや、外器面に継走する山形押型文一間延びた山形押型文一をイメージしている文様構成を施す点は、押型文土器様式の中でも新しい時期に現れる文様構成要素である。この点に注目してこれらの土器を本類に含めた。

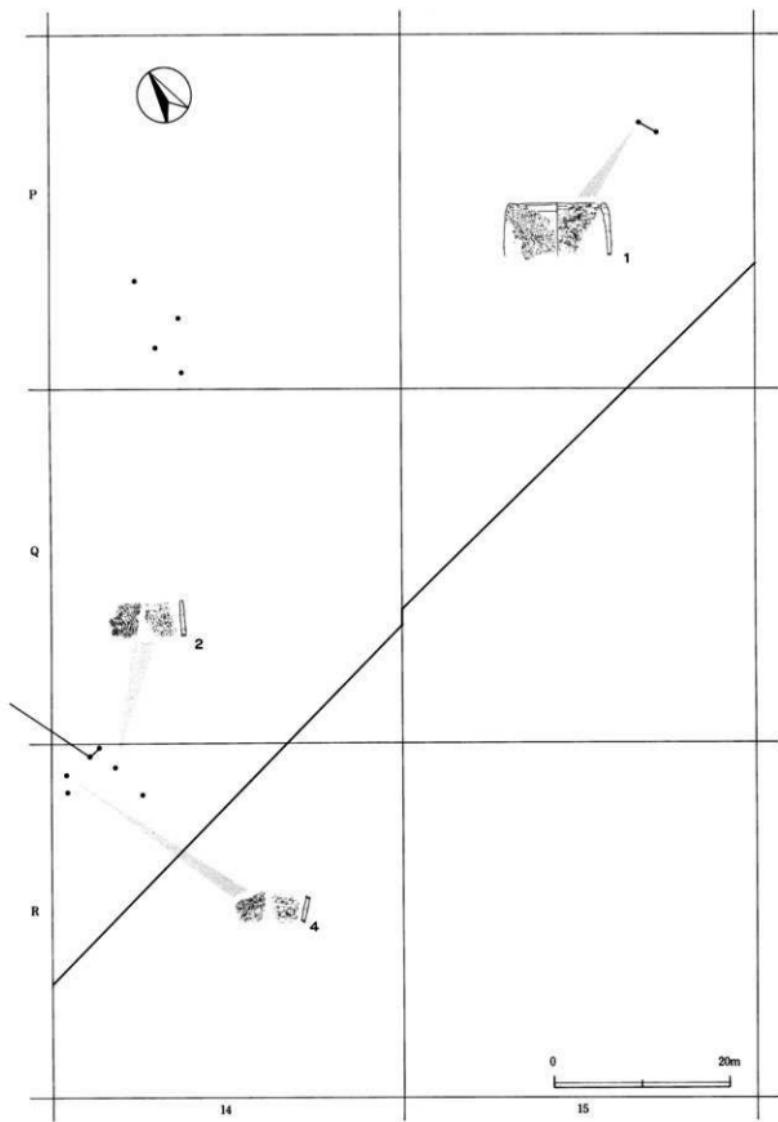
(p.142へ続く)



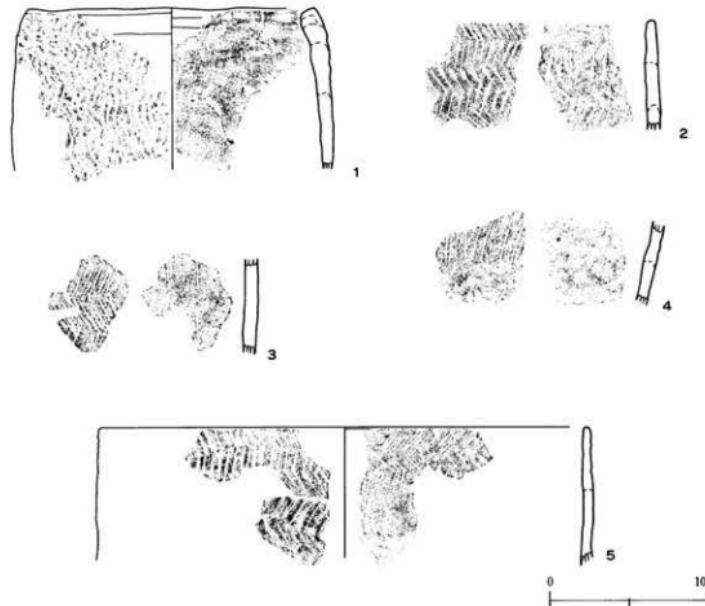
第113図 手向山式類似土器出土状況全体図



第114図 手向山式類似土器出土状況図1 (Q・R-12・13区)



第115図 手向山式類似土器出土状況図2 (P・Q・R-14・15区)



第116図 手向山式類似土器実測図

手向山式類似土器観察表

編 號	発 見 地	出 土 年 代	外 器 面 性 質	内 器 面 性 質	火 照 度	胎 土 性 質	厚 さ	形 様	部 位	内 器 面 性 質				外 器 面 調 整	内 器 面 調 整	色 調	外 器 面 内 器 面	備 考
										石英	長石	角閃石	クロウンモ	砂砾				
1	P-1.5	237	質	津鉢	口縁	○	○	○	1	細砂・微砂	ナダ	ハケ	暗赤褐色	暗褐色	口徑18.1cm			
	P-1.5	209	V	津鉢	口縁	○	○	○	2	細砂・微砂	半なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
	R-1.4	732	質	津鉢	口縁	○	○	○	3	細砂・微砂	半なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
2	R-1.4	732	質	津鉢	口縁	○	○	○	4	細砂・微砂	半なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
	R-1.4	732	質	津鉢	口縁	○	○	○	5	細砂・微砂	半なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
3	Q-1.2	7846	質	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	半なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
	Q-1.4	149	質	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	半なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
	Q-1.4	10268	質	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
4	Q-1.4	423	V	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
	R-1.4	255	V	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
5	Q-1.4	10268	V	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				
	R-1.4	255	V	津鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナダ	丁寧なナダ	暗赤褐色	暗赤褐色				

(p.138から続く)

さて、第11群の土器胎土中の鉱物は、石英・長石・角閃石で構成されていた。クロウンモの含有が認められなかったのは、注目できる。また、土器の調整方法は外器面・内器面共に丁寧なナダ調整を行うのが主流である。また土器の色調は、外器面が暗赤褐色から茶褐色、内器面が暗茶褐色から暗褐色が主流であった。

ii) 小結

本類に属する土器は、施文的特徴から手向山式土器と比べると、型式的には時間軸では近い距離にあると、判断できた土器である。

⑫ 小結

上野原遺跡第10地点の発掘調査では、繩文時代早期の時期に属する土器は、層位的に把握することは

できなかった。したがって、特に土器型式内の差が時間差を示す事柄なのか、種類の豊富さを示す事柄なのか、層位的には明らかにはできなかった。

しかしながら先に述べたように、各型式間には器形的特徴にも施文的特徴にも違いがある。さらには第2群土器と第3群土器との間に、第3群a類土器やc類土器とb類土器との間に、出土分布の状況に明瞭な差が認められる。これらのことから、これまで分類した土器型式内の差が時間差を示すと仮定して、型式組列を考えることにする。

②-1 第2群について

南九州縄文早期土器編年において、第1群の石坂式土器より新しく、第3群の桑ノ丸式土器より古く位置づけられている第2群の下剥峯式土器に属する土器について若干の考察を記す。

さて、第2群の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- 1) 口縁形態は波状口縁を呈する土器である。口唇部は水平平坦面を作出している。口縁部は弯曲しながら外反するタイプの土器(2類b)。
- 2) 口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまるく削られ、見かけ上、口縁部の内湾形態が強調される。胴部は円筒形で、胴部下半で心待ちすばまる。底部は平底となるタイプの土器(1類b、2類a)。
- 3) 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内湾して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する。胴部は直線的にすばまる。底部は平底を呈するタイプの土器。(1類a、3類)

という3タイプに分類することができた。

さて次に、第2群の施文具の種類と文様帶との関係については次のように、

- A) 横施文の口縁部文様帶(上位文様帶)にも、縦施文の胴部文様帶(下位文様帶)にも、貝殻を使用するタイプの土器(1類a、1類b、2類b)。
- B) 口縁部文様帶(上位文様帶)にはヘラ状工具を、胴部文様帶(下位文様帶)には貝殻を、施文具として使用するタイプの土器(2類a)。

C) 口縁部文様帶(上位文様帶)にはヘラ状工具を、胴部文様帶(下位文様帶)にはヘラ状工具と貝殻とを、施文具として併用するタイプの土器(3類)。

という3タイプに分類することができた。

さて南九州縄文早期土器編年から、「第1群→第2群→第3群」という編年觀を基本とすると、器形的特徴からは1) タイプ→2) タイプ→3) タイプとなる。そこで上記の様相をまとめると、

(1A : 2類b)→(2A : 1類b)→(2B : 2類a, 3A : 1類a)→(3C : 3類)
という型式組列を考えることができる。

②-2 第3群について

南九州縄文早期土器編年において、第2群の下剥峯式土器より新しく位置づけられている、第3群の桑ノ丸式土器に属する土器について若干の考察を記す。

さて、第3群の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- 4) 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部が内湾し、口唇部は内傾する平坦面を作出し、底部は平底を呈し、胴部に移行するにしたがってかなりふくらみをもつタイプの土器(a類、c類)。
- 5) 口縁形態は平口縁を呈し、口唇部が内傾する平坦面を作出する。という基本的器形は共通するが、口縁部が内湾する土器の他に、外反する土器や直行する土器(b類)。

という2タイプに分類することができた。

さて次に、第3群の土器文様帶は口縁部から胴部にかけて單一文様帶である。

さらに、第3群の施文的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- D) 柳歛状の羽状文や、流水状の文様を施す土器。
(a類、c類)
 - E) スダレ状の文様を施す土器(b類)。
という2タイプに分類することができた。
- さらに、内裏面調整の変化と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、
- i) ミガキ調整あるいは、丁寧なナテ調整もしくは、ナテ調整が主流である土器(a類、c類)。

ii) ケズリ調整が主流である土器(b類)。

という2タイプに分類することができた。

さて南九州縄文早期土器編年から、「第1群→第2群→第3群」という編年觀を基本とし、さらに先に述べた第2群の様相と合わせると、5) タイプの土器が4) タイプの土器より古いとは考えにくく、器形的特徴からは4) タイプ→5) タイプとなる。そこで上記の様相をまとめると、

(4 D i : a類, c類)→(5 E ii : b類)

という型式組列を考えることができる。

②-3 第4群について

中九州西部地域を中心に分布している円筒形条痕文土器の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

1) 口縁部が外反し、脇部はわずかに膨らむ土器。

(a類)

2) 口縁部から脇部にかけて直行する土器(b類)。

3) 口縁部が内弯し、口唇部は内傾する土器(c類)。

という3タイプに分類することができた。

さて次に、第4群の施文的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

A) : 貝殻腹縁部で、まず縱位方向に条痕文を施した後に、横位方向に条痕文を巡らした土器(a類)。

B) : 貝殻腹縁部で、まず縱位方向に条痕文を施した後に、横位方向に押し引き文を施した土器。

(b類, c類)。

C) : 叉状工具を使用して、横位方向あるいは斜位方向に押し引いた土器(b類)。

という3タイプに分けることができた。

さて南九州縄文早期土器編年から、「第1群→第2群→第3群」という編年觀を基本とすると、器形的特徴からは1) タイプ→2) タイプ→3) タイプ

となる。そこで上記の様相をまとめると、

(1 A : a類)→(2 B, 2 C : b類)→(3 B : c類)

という型式組列を考えることができる。

②-4 押型文土器様式について

さてこの項では、押型文土器様式のうち、第5群(微細山形押型文土器)、第6群(山形押型文土器)、

第7群(梢円押型文土器)に属する土器について若干の考察を記す。

まず、押型文土器様式に属する土器型式と、貝殻文系円筒形土器様式に属する土器型式との間には、出土分布域に相関関係がある、ことが指摘できる。

すなわち、微細山形押型文土器が集中して出土した地域は、下剥峯式土器や円筒形条痕文土器が集中して出土した地域と重なっていることが指摘できる。その一方で、山形押型文土器や梢円押型文土器が集中して出土した地域は、桑ノ丸式土器が集中して出土した地域と重なっている、ことが指摘できる。

ところで、この項で対象にしている押型文土器の出土点数は、梢円押型文土器を除くといずれも少ない。このことから、本遺跡の押型文土器様式は客体的な存在であり、一過性の存在であったと、考えられる。梢円押型文土器についても既に指摘したように5分類を行うことが可能である。とすると、1分類の出土点数は少なく、やはり客体的に一過性の存在であったと、考えられる。

そして先述したように、下剥峯式土器から桑ノ丸式土器へは、時間軸上で先後関係がある。

これらのことから、次の2点が指摘できる。

第1に、下剥峯式土器・微細押型文土器の出土分布域が、桑ノ丸式土器・山形押型文土器・梢円押型文土器の出土分布域と異なる。このことは、下剥峯式土器と桑ノ丸式土器との間に先後関係があるよう、押型文土器の間にも第5群から第6・7群へという先後関係があることを示している。そして、当時の人々が生活した「場」が変遷したことがいえる。

第2に、本遺跡では主客体的な存在である貝殻文系円筒形土器様式に属する土器型式に、客体的な存在である押型文土器様式に属する土器型式が共存していることがいえる。

さて、それでは押型文土器様式に属する各土器型式の器形的特徴と施文的特徴を比較すると、以下のようになる。

まず、第5群に分類した微細山形押型文土器の主な特徴を挙げると、

- ① 口縁が直行すること。
- ② 帯状施文が行われていること。
- ③ 内器面に原体条痕が施されていない

こと。の3点を指摘できる。

つぎに、第7群に分類した梢円押型文土器の主な特徴を挙げると、

- ① 直行口縁の器形で、外器面に横走する梢円押型文を施すが、器内面には文様を施さないタイプの土器（第7群1類）。
- ② 外反口縁の器形で、外器面には横走する梢円押型文を施し、内器面には口縁部内面上段に短い原体条痕を、下段に横走する梢円押型文を施すタイプの土器（第7群2類第1種土器）。
- ③ 外反口縁の器形で、外器面には横走する梢円押型文を施し、口縁部内面には長めの原体条痕を1段のみ施すタイプの土器（第7群2類第2種）。
- ④ 外反口縁の器形で、外器面には口縁部上段に無文帶を設け、下段に横走する梢円押型文を施し、口唇部上端や内器面には文様を施さないタイプの土器（第7群2類第3種）。
- ⑤ 外反口縁の器形で、外器面には縱走する梢円押型文を施し、口縁部内面には上段に横位の刺突連点文を施し、下段に横走する梢円押型文を施すタイプの土器（第7群3類）。

という5タイプの土器群に分けることができた。

最後に、第6群土器に分類した山形押型文土器の主な特徴を挙げると、

- ① 外器面に横走の山形押型文を施し、稜を形成しない口縁部内面には上段に原体条痕を下段に横走の山形押型文を施すタイプの土器（第6群1類）。
- ② 外器面に横走の山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面には上段に刺突連点文を下段に横走の山形押型文を施すタイプの土器（第6群2類）。
- ③ 外器面に縦走の山形押型文を施し、稜を形成する口縲部内面および脣部内面には文様を施さないタイプの土器（第6群3類）。
- ④ 外器面に縦走の山形押型文を施し、稜を形成し

ない口縲部内面および脣部内面には文様を施さず、口唇部に平坦面を形成するタイプの土器（第6群4類）。

という4タイプの土器群に分けることができた。

さて、本遺跡で出土した押型文土器の特徴を列挙したところ、器形的にも、施文方法的にも、較差が見られる。先述したようにこの較差は時間軸上の差である可能性が高い。

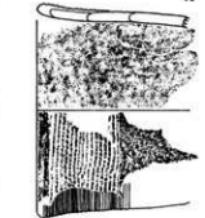
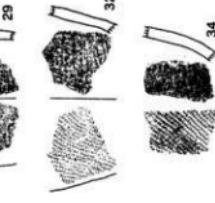
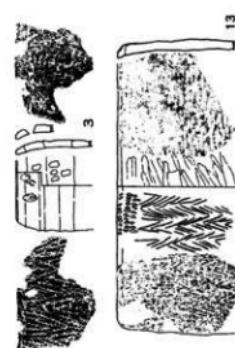
そこで、「第5群から第6・7群へ」の原則に従い、属性の変遷を考えると次の4点が考えられる。

- ① 口縲部の形態は、「直行口縲から外反口縲へ」
- ② 外反口縲の形態は、「外反度が低い土器から外反度が高い土器へ」
- ③ 外反口縲の内面形態は、「棱を形成しない土器から棱を形成する土器へ」
- ④ 外器面施文は、「横走から縦走へ」
- ⑤ 内器面施文は、「原体条痕が短い土器から原体条痕が長い土器へ」

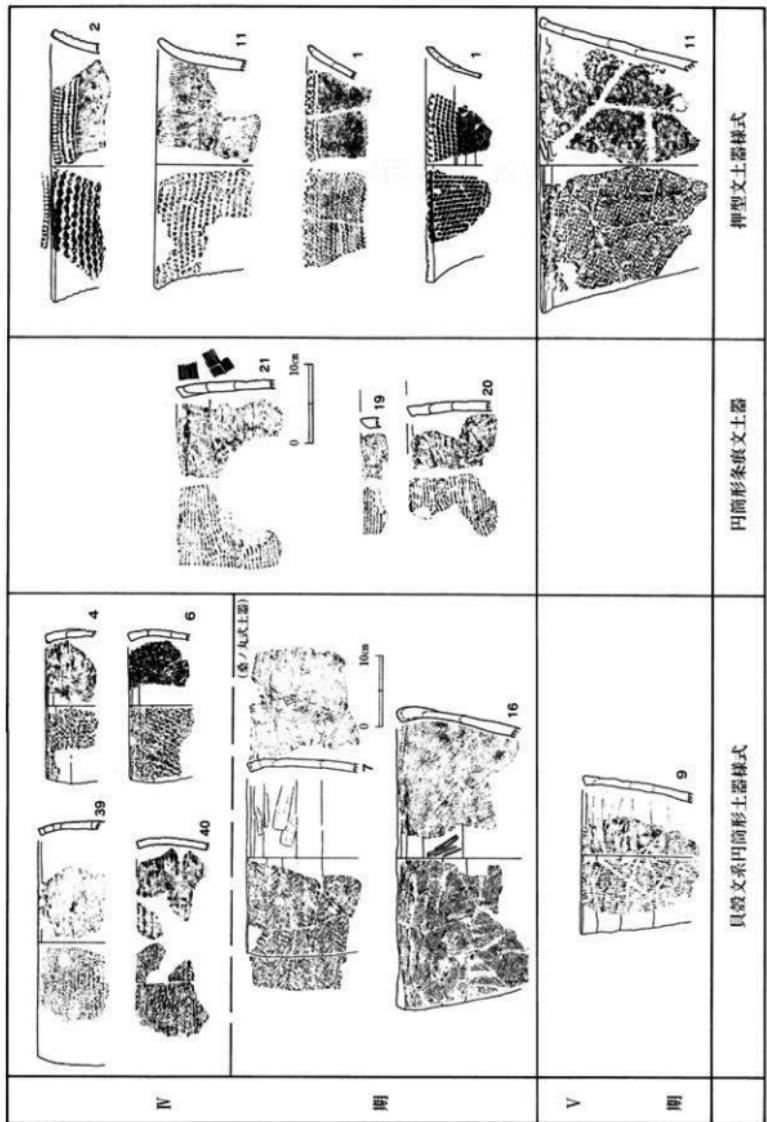
以上、①から⑤までの条件を満たすと次の⑥と⑦の条件が加えられる。

- ⑥ 内器面施文は、「施されない土器から施される土器へ、そして施されない土器へ」
- ⑦ 内器面施文は、「原体条痕から刺突連点文へ」
上記の①から⑦までの条件を満たす変遷は次のようないくつかの経路がある。
A) 第5群、第7群1類
B) 第6群1類、第7群2類第1種
C) 第7群2類第2種
D) 第7群2類第3種
E) 第6群2類
F) 第7群3類
G) 第6群3類
H) 第6群4類
表記したものが下記の表である。

	口縲部形態		口縲部内面		後の有無		外器面施文の方向		内器面施文の有無		
	直行	外反（弱い）	外反（強い）	無	有	横走	縦走	無	有（短い原体条痕）	有（長い原体条痕）	有（刺突連点文）
A) タイプ	○			○		○		○	○		
B) タイプ		○		○		○				○	
C) タイプ		○		○		○		○		○	
D) タイプ			○	○		○		○			
E) タイプ			○	○		○		○			
F) タイプ			○	○		○		○			
G) タイプ			○	○		○		○	○		
H) タイプ		○		○		○		○	○		

	貝殼文系円筒形土器様式 (上部古土器)	円筒形条痕文土器 様式	押型文土器様式
I 期			
II 期			
III 期			

第 111 図 上野原遺跡第 10 地点縄文早期中葉土器編年案 (1)



第118図 上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年表 (2)

②-5 まとめ(第117・118図)

この小結では、第2群・第3群・第4群・第5群・第6群・第7群に属する土器の器形的特徴や施文的特徴などを検討することで、各群の型式組列を考え、それぞれ試案を提出することができた。

それらをまとめたのが、上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年案(第117図、第118図)である。各時期を概観すると次のようになる。

【I期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第1群石坂式土器(ないしは石坂式新段階)に分類した土器を基準とする時期である。器形的特徴の類似性から、口縁部が外反する円筒形条痕文土器が共存したと考える。しかし、両型式の土器とも出土点数は少なく、本遺跡での生活は非常に小規模であったと思われる。

【II期】

第2群(下剥峯式土器)2類bに分類した、波状口縁を呈する土器を基準とする時期である。他の系列には該当する土器が無く、I期と同様に非常に小規模な生活が行われていたようである。

【III期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第2群1類bや第2群2類aに分類した土器を基準とする時期である。これらの土器は、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する土器である。この器形的特徴に注目すると、円筒形条痕文土器では第4群b類が該当する。施文的特徴においても縦位方向の施文と横位方向の施文とを意識している点も共通している。また、押型文土器様式ではA)タイプに属する土器を位置づけることができる。

第2群1類bや第2群2類aなどに分類した土器は、上野原遺跡第10地点で出土した下剥峯式土器の範疇では主体となる時期である。このことから上野原遺跡第10地点におけるIII期は、縄文早期中葉の時期ではピークをなす時期といえる。

【IV期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第2群1類aや第2群3類に分類した土器から、第3群(桑ノ丸式土器)a類、c類に分類した土器にかけてを基準とする時期である。これらの土器は、口縁部が若干内湾

して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する土器である。下剥峯式土器に属する土器をIV期前半に、桑ノ丸式土器に属する土器をIV期後半に分けることができる。この器形的特徴の類似性から

円筒形条痕文土器では第4群c類が該当する。

さてこの時期に属すると考えられる押型文土器は、

②-4で考察したように

B) タイプ(第6群1類、第7群2類第1種)

→C) タイプ(第7群2類第2種)

→D) タイプ(第7群2類第3種)

→E) タイプ(第6群2類)

→F) タイプ(第7群3類)

→G) タイプ(第6群3類)

というタイプの変遷を位置づけることができる。

早期中葉の時期全体から見るとこれらの土器の出土量は中程度であり、上野原遺跡第10地点での生活も、中規模であったと言える。

なお上野原遺跡では、他地点でこの時期の遺物が多数出土している。したがって、上野原遺跡において当該期の人々がどのような生活を営んだかは、他地点の報告を待って再度考察を行う必要がある。

【V期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第3群b類に分類した土器を基準とする時期である。これらの土器は、口唇部が内傾する平坦面を作出する土器で、口縁部が内湾する土器の他に、外反する土器や直行する土器が見られる。施文的特徴ではスダレ状の文様を施す土器である。また内器面調整はケズリ調整が主流であった。この器形的特徴および施文的特徴に注目すると、押型文土器様式では第6群4類が該当する。

両型式の土器とも出土点数は少なく、本遺跡での生活は非常に小規模であったと思われる。

ここまで上野原遺跡第10地点における土器の編年観に基づいて、人々の生活がどのように変遷したかを概観した。最後に今後の問題点を指摘してまとめる。

最大の問題点は、土器編年上で次の時期に位置づ

けられている「手向山式土器」と【V期】との関係である。本遺跡でV期に位置づけた第6群4類土器や第3群b類土器と、手向山式土器との間には、器形的特徴からも、施文的特徴からも、型式学的な距離が有りすぎるのである。

ところが、第5分冊で指摘していくことではあるが、縄文早期中葉末から早期後葉の時期にあたる、手向山式土器から妙見・天道ヶ尾式土器そして平桙式土器へという、土器型式学的に非常に滑らかな変遷が、上野原遺跡第10地点では観察できる状況にある。つまり、この時期に上野原遺跡第10地点において人々は、連続と繁栄した大規模な生活を送っていたことを明らかにできる。

その中で、前段階とでも言うような「手向山式土器前夜」の時期に、上野原遺跡第10地点では全くの空白期間を迎えるのである。その理由は何か。

このことは、「手向山式土器」成立の問題と含め、将来的な課題として提起して、本分冊を閉じることとする。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)
国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(II)

上野原遺跡（第10地点）（第4分冊）

発行日 平成13年3月31日
発 行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-5652 鹿児島県姶良郡姶良町平松6252番地
☎ (0995) 65-8787
印刷所 濱島印刷株式会社
〒890-0052 鹿児島市上之園町17-2
☎ (099) 255-6121

